ヲ州長及ヒ宰相ニ控訴スルヲ得ルモ之ヲ參議院ニ申訴ス可カラス何トナレハ是ヲ以テ唯假リノ判決ノ性質ヲ有スル者トスレハナリ

危險ニシテ健康ニ害アル製造所設立ニ關スル郡長ノ職務ニ就キ亦同一ノ觀察ヲ爲スヲ得凡ソ郡長及ヒ巴里府ノ警察長ハ千八百十年十月十五日ノ詔書第二第八條及ヒ千八百十五年一月十四日ノ王勅第三條ニ因リ第三級ニ屬スル建物設立ニ必要トスル許可ヲ與フルノ權アリ而シテ右ノ千八百十年ノ詔書第八條ニハ左ノ一節ヲ加ヘタリ曰ク第三級建物設立願ニ關スル警察長若クハ郡長ノ決定書ニ服セスシテ爭訟ヲ起ス者アル時ハ參事院ニ於テ其判決ヲ行フ可シト

純然タル行政務ト行政訴訟務トヲ區別スルカ爲メニ余カ豫メ定メタル原則ニ從フ時ハ右ノ郡長決定書ヲ以テ行政訴訟上ノ判決トナシ難シ蓋シ此場合ニ於テハ製造所持主若クハ製造所ニ隣接スル者ニ於テ

郡長ノ決定書ニ不服ナリトシテ抗爭スルノ後ニ至リ始メテ行政訴訟ヲ生シ之ヲ參事院ノ判決ニ附スルナリ故ニ該郡長決定書ヲ以テ初メヨリ行政訴訟判決ノ性質ヲ有スル者ト看做スヲ得ス此場合ニ於テ惟郡長ハ參議院ノ確定判決ニ附セラル可キ行政訴訟上ノ事ヲ行ヘリトスルヲ得ルノミ（本書第三十七項ヲ看ヨ）

郡長ハ官有森林伐木ノ入札事件ニ關シ眞ノ行政訴訟判決ノ權ヲ有ス夫レ千八百三十七年五月四日ノ法律ヲ以テ修正シタル森林法第二十條ニ因レハ凡ソ伐木入札ノ施行ニ際シ其施行方法ノ適否若クハ入札者資力ノ有無ニ關シ起レル爭訟ハ入札場ニ上席セル官吏ニ於テ直ニ判決ヲ行フ可キナリ其官吏トハ即チ郡ノ治所ニ在ル郡長是レナリ（千八百二十七年八月一日ノ王勅第八十六條）右ノ法律ニ因リ郡長ニ屬シタル職掌ハ其行政訴訟判決ノ權タルヿ亦疑フ可カラス何トナレハ其政府ト入札者トノ間

若クハ入札者相互ノ間ニ起レル爭訟ヲ判決スルニ在リ而シテ其爭訟ノ性質ハ人民ノ權理ニ關係シ僅ニ其利益上ノ損害ニ止マラサレハナリ且ツ此場合ニ係ル郡長ノ決定書ハ終審確定ノ力ヲ有ス故ニ通則ニ從ヒ之ヲ州長宰相及ヒ參議院ニ控訴スルヲ許サス該件ニ關シキュラソン氏ハ其著述セル森林法註解第一卷第百九十四葉ニ於テ云ヘルアリ曰ク始メテ森林法ヲ起草セシ時ハ該郡長判決書ヲ其上長官ニ控訴スルヲ許シ上院議員中其說ヲ贊成セシ者アリ然ルニ政府ノ委員タルドマルチギヤク氏ハ其確定判決ノ權ヲ以テ入札上ノ上席官吏ニ委任スルヲ必要トシ其故ハ入札及ヒ競賣ヲ行フ場合ニ於テハ每事緊急ニ處分スルヲ要シ苟モ遲疑スルヲ得ス是ニ因リ爲メニ爭訟ヲ生スレハ速ニ之ヲ處分確定シ賣買ノ約一タヒ成リタル者ヲ以テ確定不動ノ者トセサル可カラスト陳述セシニ其說行ハレテ遂ニ今日ノ法制ヲ立

ツルニ至レリ（千八百五十四年二月十六日カスチヨン件千八百五十五年四月十二日ルクレル件判決ヲ看ヨ）但シ郡長ヲ以テ弄權ノ所爲アリトスル場合ハ前ニ論スルノ限リニ在ラス故ニ之ヲ參議院ニ控訴スルヲ許ス可シ

以上ノ規則ハ又政府ニ屬スル漁業稅入札ノ事項ニ適施ス可シ（千八百八十九年四月十五日ノ法律第十四條及ヒ千八百四十年六月六日ノ法律ヲ看ヨ）

之ヲ約言スレハ郡長ハ行政ノ權ヲ固有スル者ニ非ス故ニ特例若クハ緊急事件ニ係ル場合ヲ除ク外唯上命ヲ下ニ移シ下情ヲ上ニ通スルノ機關タルニ過キス郡長已ニ行政上ノ命令ヲ爲スノ權ナシ況ヤ行政訴訟判決ヲ行フノ權ニ於テヲヤ固ヨリ之ヲ有スルノ理アル可カラス若シ郡長ヲ以テ不羈獨行ノ權アリトスル時ハ勢ヒ州長ノ命令ニ抗シテ之ヲ執行セス遂ニ中央集權ノ大法ヲシテ萎靡セシムルニ至ルヲ免カレス是ヲ以テ政府ノ法令ノ執行ヲ阻碍スルナキヲ欲セハ施政ノ大權

ヲ國家中央ノ政廳ニ收メ其命スル所ヲシテ普ク村邑ニ通徹セシムル
ヲ圖ルヲ要ス是レ所謂ル郡ナル者ヲ以テ僅ニ一行政區ト爲シテ之ニ
與フルニ財產ヲ賣買所有スルノ權アル無形人タル性質ヲ以テセス又
一郡ニ長タル者ヲ以テ僅ニ邑官ト州長トノ間ニ立テ彼此ノ意欲ヲ相
交通スルノ機關トナシ之ニ與フルニ陳議ノ權ヲ以テシテ其上長官ヲ
補佐セシメ苟モ獨斷決行スルノ權力ヲ之ニ委セサル所以ナリ

第三章　邑長

(提要)第千四百　邑ハ二樣ノ性質ヲ有ス即チ第一行政區第二無形人
是レナリ○是レニ因リ邑長ハ二樣ノ職務ヲ行フ

第千四百一　邑ハ自カラ其政務ヲ施爲スルノ權アリ

第千四百二　邑長ニ屬スル判決權ノ猶ホ今日ニ存スル者

第千四百三　陸運警察ニ關スル邑長ノ職務

第千四百四　邑長ハ軍人ノ住所ニ關スル爭訟ヲ判決ス

第千四百五　邑長ハ小賣飲料ノ稅額ヲ定ム

第千四百六　邑長ハ毀崩ノ懼レアル建物ノ取崩ヲ命令ス

第千四百七　千八百三十七年七月十八日ノ法律第六十三條ニ
因リ州長ヨリ交附スル督促狀

第千四百八　此督促狀ハ邑ニ對スル負債者ノ財產上ニ書入質
ノ權ヲ生スルヤ

第千四百九　或ル場合ニ於テハ督促狀ヲ施行ス可カラス

第千四百十　何レノ官衙ニ對シテ督促狀ニ係ル故障申述ヲ爲
ス可キヤ

第千四百十一　軍人ノ住所ニ關スル費用徵集ノ方法

第千四百十二　斷定○邑長ハ行政訴訟判決ノ權ヲ有ス

第千四百十三　邑長ノ判決書ニ對スル控訴○此控訴ニ關スル期限ヲ定メス

第千四百十四　州長ハ邑長ノ判決書ヲ改定スルヲ得ルヤ

第千四百十五　邑ノ代理員タル邑長ノ職務

第千四百十六　一切ノ行政訴件ノ性質ニ關スル說約

邑ハ郡ノ如ク僅ニ一行政區ニシテ固有ノ權ナキ者ニ非ス故ニ邑ハ二樣ノ性質ヲ有セリ即チ全國ヲ通シテ定メタル細少ノ行政區タル一ナリ法律ノ認ムル所ニ因リテ自カラ存立スル無形人タル二ナリ邑ニハ以上二種ノ性質ヲ有セリ隨テ邑長ハ此二樣ノ性質ニ相應スル權ヲ有ス乃チ邑長ハ行政區ト看做セル一邑ノ主長トナリテ全國行政ノ一部ニ參與シ上長行政官ノ指揮ヲ受ケテ其勤メニ服ス（千八百三十七年七月十八日ノ法律第九條）又地方ノ會社ト看做セル一邑ノ委員トナリ全邑民ニ代リテ

其事ヲ執ル此場合ニ於テハ之カ上長行政官タル者ハ唯邑長ニ對シテ監督ノ權アルノミ（同上法律第十條）余ハ立憲議會及ヒ其議長アンリチン、ド、パンセイ氏ノ說ニ因リテ決定シタル該法律ニ因リ州長ニ委任セル警察上ノ職務ヲ以テ邑權ニ因リテ固有スル職掌ノ中ニ列置セシヲ不當トス（同上法律第十條第一節）蓋シ法律ニ非サル外警察上定期ノ權ノ如キ準立法權ヲ以テ邑長ニ委任スルヲ得ス（同法律第十一條ヲ看ヨ）焉ソ今ノ時ニ當リ邑ニシテ其固有スルノ理アル可カラサル是等定期ノ權ヲ以テ敢テ他ニ委任スルヲ得ンヤ故ニ余ハ該確定法律ヨリモ寧ロ該法律草案ニ定ムル所ノ者ヲ取ル（余カ著行政法問題第七項第八項及ヒ第七十一項ヲ看ヨ）

邑長ハ郡長ノ如ク唯上命下情ヲ傳達スルノ職ニ止マル者ニ非ス夫レ邑ハ前ニ論セシ二樣ノ性質ヲ有スルニ因リ自カラ施爲スルノ權アル者ナリ隨テ邑長モ亦此權ヲ有ス余ハ邑長ニ屬スル行政訴訟判決ノ權

ニ關係セサル職掌ヲ本章ニ掲論セス故ニ今研究セントスルノ要點ハ特ニ或ル場合ニ於テ邑長ヲ以テ行政訴訟判決ノ權アル者ト看做スヲ得サルヤ否ヤニ在ルノミ後項ニ援引スル法律ノ條款ヲ研究スル時ハ邑長ニ此行政訴訟判決ノ權アルヲ非拒スルヲ得サルナリ

現今ノ法律ハ第十二世紀ノ特許狀ニ因リ古ノ邑ニ與ヘタル政權ノ一部ヲ猶ホ含有セリ即チ司法權ノ一部ヲ以テ邑ニ屬スル是ナリ亦治罪法第百六十六條ニ因リ所管内ニ於テスル違警罪犯判決ノ權ヲ以テ邑長ニ屬セシモ亦古ヘ邑ニ與ヘシ政權ヲシテ猶ホ今ニ存セシムルノ一證トス是等司法權ヲ以テ邑長ニ屬セシ所ノ條例ハ羅馬帝國ノ法制ニ從テ定メタル者ナレ𪜈其行政司法兩權區別ノ大則ニ背クニ因リテ今ノ制度ニ適合セス（余カ著羅馬公法及ヒ行政法第二百五十二項以下及ヒ第二百七十二項ヲ看ヨ）此兩權區別ノ大則ハ極メテ有要ナレ𪜈羅馬法ニ於テハ却テ之ヲ認メス（前ニ註記セル余カ著書第百二十九項ヲ看ヨ）

陸運警察ニ關シ邑長ニ與ヘタル職掌ハ又司法上ニ屬スル者ト看做スヲ得即チ千八百五十一年五月三十一日ノ法律第二十條ニ定ムル者是レナリ今該條ヲ左ニ掲錄セン

凡ソ犯罪人ニ於テ佛蘭西國ニ其住所ヲ有セサル時ハ假リニ其犯罪物品タル馬車ヲ勾收シ其調書ハ即時ニ之ヲ認記セシ地ノ邑長若クハ犯罪人ノ通行スル道路ニ最近ナル邑ノ邑長ニ送致ス可シ

此場合ニ於テ邑長ハ假リニ罰金額ト必要トスル補償入費トヲ判定ス但シ犯罪人ニ於テ資力アル保證人ヲ定メサル時ハ本人ヲシテ直ニ其罰金ト補償ノ費額トヲ納メシム

右ノ費額若クハ保證人ヲ出サヽル時ハ調書ニ因リテ判決ヲ行フニ至ル迄犯罪物品ニ屬スル馬車ヲ勾收ス但シ其勾收ニ就テ生スル費

用ハ馬車ノ持主ニ於テ負擔ス可シ

犯罪人ハ其犯罪ヲ憑證セラレタル地ノ州内ニ其住所ヲ撰定ス可シ

之ヲ撰定セサル時ハ罰金若クハ補償費ヲ判定シタル邑長所管ノ邑書記局ニ致セル諸送達ヲ以テ適法ノ者トス可シ

邑長ハ邑官ヨリ切符ヲ交附スルニ因リテ屯所幷ニ廐ヲ貸與シタル邑民ニ對シ屯營軍人ヨリ支拂フ可キ金額ニ關シテ起レル所ノ爭訟ヲ判決ス（千七百九十二年五月二十三日議決同九十三年一月十八日公布ニ附添セル條例第二十六及ヒ第五十二條ヲ看ヨ）是レ其行政訴訟判決ノ權タルヿ疑フ可カラス故ニ此場合ニ於テスル邑長ノ判決ハ所謂ル裁判宣告ニ異ナラス邑長ニ屬スル右ノ職掌ハ適法ノ者トス何トナレハ前ニ註記セル法律第一條ニ因リ同上條例ヲ認可シ法律ノ力アル者トシタレハナリ

以上法律ノ定ムル所ニ因リテ邑長ノ判決ス可キ者ハ行政上ノ事務ヨリ生スル爭訟即チ軍人カ邑官ノ切符ニ因リテ宿營シタル事項ヨリ生スル爭訟ニ限ル之レニ反シ相對ノ約束ヲ以テ屯所ヲ軍人ニ貸與シタル者ハ普通ノ貸與契約ニ係ルヲ以テ爲メニ生スル爭訟ハ普通裁判所ノ管轄ニ屬ス

千八百十六年四月二十八日ノ法律ハ其第四十七條ニ於テ葡萄酒其他飲料ノ小賣稅ヲ定メ且ツ該件ニ就キ間稅局ト小賣人トノ間ニ爭訟ヲ生スル場合ヲ豫定セリ乃チ其第四十九條ニ曰ク酒價屆書ノ當否ニ關シ收稅吏ト小賣人トノ間ニ爭訟ヲ生スル時ハ邑長ニ出訴シテ其判決ヲ受ク可シ但シ原被告ノ中ヨリ參事院ニ咨詢決定スル州長ニ控訴スルハ此限ニ在ラス該州長ハ郡長幷ニ間稅局長ノ意見ヲ聞キ控訴ノ日ヨリ八日内ニ於テ確定ノ判決ヲ下ス可シ

法律ニ因リ邑長ニ委任シタル職務ノ中ニ就キ猶ホ其性質判然タラサ

ル者アリ即チ千七百九十年八月十六日議決二十四日公布ノ法律第十一章第三條第一項ニ因リ邑長ニ委任シタル職務ノ中ニ列セシ壞崩ノ懼レアル建物取崩ノ命令是ナリ千七百二十九年七月十八日及ヒ千七百三十年八月十八日ノ布達ハ巴里府內臨街ノ建物取崩ヲ命令スルノ權ヲ以テ「シヤトレー」法衙ト會計局トニ分任セリ千七百九十年八月十六日議決二十四日公布ノ法律出ツルニ及ンテ更ニ該判決權ヲ以テ特ニ行政官タル邑長ニ移與シ爾來司法官ハ行政官ノ命令セシ處分ニ關シ助力スルノ外復タ建物取崩ヲ命スルヿ昔時ノ如クナル能ハス刑法第四百七十一條第五項ヲ看ヨ抑取崩ヲ命セラレタル家屋持主ニ於テ其毀崩ノ懼ナキヲ述テ之カ取崩ヲ命セラルヽノ理ナシト主張スル時ニ當リ爲メニ下セル判決ヲ以テ裁判宣告書ノ性質ヲ有スル者トス可キヤ蓋シ昔時ノ法律ハ毀崩ノ懼アル建物取崩ヲ命スル權ヲ以テ司法官ト行政

官トニ兼テ屬セシヿ前ニ徵引セシ千七百二十九年及ヒ千七百三十年ノ布達ノ如クナルヲ以テ該判決ニ裁判宣告ノ性質アリトスルヲ得可シ然レヒモ參議院ノ公判ハ是等ノ判決ヲ以テ裁判宣告ノ性質ヲ有セサル者トナシ其弄權ニ係ル者ノ外之ヲ該院ニ控訴スルヲ許サス本書第八百七十八項及ヒ第八百八十項ヲ看ヨ

千八百三十七年七月十八日ノ法律ニ因リ更ニ行政訴訟ニ關スル重要ノ判決權ヲ以テ邑長ニ與ヘタリ即チ其第六十三條ニ定ムル者是ナリ今其全文ヲ左ニ示サン

凡ソ法例ニ因リ特別ノ徵收方法ヲ定メサル邑收入ハ邑長ノ編作スル簿冊ニ依準シテ徵收シ該簿冊ハ郡長ノ檢署ヲ得レハ執行ノ力アル者トス

普通裁判所ノ所管ニ屬スル事項ニ就キ故障申述ヲ爲ス者アリタル

時ハ緊急事件トシテ速時ニ之ヲ裁判ス此場合ニ於テ邑ハ參事院ノ豫許ヲ受ケスシテ直ニ其辯護ニ從事スルヲ得

救貧院ニ屬スル貸與權ノ徵收ニ關シ亦前ノ第六十三條ト同一ノ規則ヲ立テタリ（千八百五十一年八月九日蓋シ千八百三十七年ノ法律第六十三條ヲ看ヨ）

十三條ヲ定メタル所以ノ者ハ邑收入ニ關シ司法訴訟上ノ普通ノ程式ヲ踐履スルニ因リテ大ニ時日ヲ費シ且ツ許多ノ訴訟入費ヲ出スノ不便ヲ避ケシメンカ爲メナリ故ニ邑長ハ自カラ邑貸與權ニ關スル執行狀ヲ作リ郡長ノ檢署ヲ受ケテ直ニ之ヲ執行シ爲メニ執行狀ヲ司法官ニ請求スルヲ要セス是ニ因リ邑長ハ邑ノ貸與權ニ關シ共和曆第八年風月十八日ノ布令ニ因リ政府ニ屬スル貸與權ニ關シ大藏宰相ニ與ヘタル者ト同一ノ權理ヲ有ス隨テ之ヲ執行スルカ爲メニ邑ニ對スル負債者トスル者ノ財産ヲ差押ルヲ得ルナリ（千八百五十年七月二日破毀法院裁決）

千八百三十七年七月十八日ノ法律第六十三條ノ明文アルニ拘ラス某ノ使吏ハ邑長ヨリ發スル執行狀中ニ於テ訴訟法第五百四十五條ニ定ムル司法官吏ニ對スル命令書式ヲ揭ケサルニ因リ之ヲ執行スルヲ拒メル者アリト雖モ未タ其當ヲ得ルトス可カラス何トナレハ千八百三十七年七月十八日ノ法律第六十三條ノ精神ト明文トニ就テ觀察スルニ邑長ノ編作セル徵收狀ニ執行ノ力ヲ與フルニハ唯郡長ノ檢署アルヲ以テ足レリトス可ケレハナリ而シテ該第六十三條ノ旨トスル所ハ邑ヲシテ司法官ノ執行命令書ヲ得ルノ煩ヲ避ケシメ以テ邑收入徵集ノ便ヲ計ルニ在ルヤ明白ナリ（千八百五十九年內務宰相局布達全書第二十九項ヲ看ヨ）

千八百三十七年ノ法律第六十三條ニ因リ公布シタル督促狀ハ邑ノ負債者ニ屬スル財産ニ對シ司法上書入質ノ權ヲ生スルヤ否ヤノ問題ヲ分解スルハ稍〻其難キヲ覺ユ此督促狀ニ司法上書入質ノ効ヲ生ス可シ

トスル者ハ共和暦第十二年暖月十六日千八百十一年十月二十九日及ヒ千八百十二年三月二十四日ノ參議院意見書ニ據憑スルヲ得此三意見書ハ法律全書中ニ登錄セラレタルニ因リテ法律ノ力ヲ有スル者ナリ而シテ其共和暦第十二年ニ發スル者ハ法律ニ因リ處罰ヲ命スルノ權若クハ督促狀ヲ發スルノ權ヲ有スル行政官ヲ以テ眞ノ裁判官トナシ其宣告書ヲ以テ普通裁判所ヨリ下セル裁判宣告書ト同一ノ効驗ヲ生シ且ツ同一ノ執行力ヲ生ス可シト爲シ隨テ權限內ノ事項ニ關シ該行政官ヨリ發出スル處罰書幷ニ督促狀ハ司法官ヨリ發出スル者ト同ク書入質ノ權ヲ生ス可シトセリ又千八百十一年十月十九日ノ參議院意見書ハ同上ノ主義ヲ以テ或ル場合ニ於テ海口稅局ヨリ納稅者ニ向テ發出スルヲ許セル督促狀ニ適施シ千八百十二年三月二十四日ノ同院意見書ハ更ニ邑幷ニ公舍主計吏ノ負債額ヲ定メタル決定書ニ同上ノ主義ヲ適施セリ是ニ因リ邑長ヨリ發スル督促狀ニ司法上書入質ノ權アル可シトスルノ論者ハ必ス謂ハン邑長ハ郡長ノ檢署ヲ得タル督促狀ヲ發出スルヲ得可キ行政官吏ナリ故ニ邑長ノ發出スル督促狀ハ前ニ徵引シタル參議院意見書ニ定ムル所ノ者ニ適當スト此ノ如キノ說ヲ主張セントスル者ハ更ニ左ノ一節ヲ加ヘテ愈之ヲ主張スルヲ得ン曰ク以上ノ分解ハ又千八百三十七年七月十八日ノ法律ノ精神ニ適セリ蓋シ該法律ノ旨トスル所ハ邑ニ與フルニ司法官ヨリ發スル文書ノ利益ヲ以テシ之ヲシテ普通訴訟手續ニ從フカ爲メニ許多ノ費用ト時日トヲ費サヽラシムルニ在リ而シテ貸與權ノ徵收ヲ固保スル所ノ司法上書入質ハ即チ是等利益ノ一端ナルヿ確トシテ疑フ可カラス然ルニ若シ邑長ヨリ發スル督促狀ニ書入質ノ權ヲ生セストスル時ハ爲メニ邑ヲシテ法律ニ因リ行政官ヨリ發出スル督促狀ニ附箋トシタル全利

ヲ得サラシムルニ至ル可シ焉ソ行政官ヨリ發スル督促狀ヲ以テ普通裁判所ヨリ發スル者ト同一ノ効驗ヲ生シ且ツ同一ノ執行力ヲ有セリト云ハサルヲ得ンヤト以上ノ諸理由ハ甚タ緊要ナラサルコアラスト雖モ余ハ未タ之ヲ以テ此問題ヲ適當ニ分解セリト斷言スルヿ能ハス」

余ハ寧ロ邑長ヨリ發スル督促狀ニ書入質ノ權ナシト云ハントスルノ說ヲ採用セサル可カラスト思惟ス抑〻夫レ書入質ノ權ナル者ハ負債者ニ屬スル現在幷ニ未來ノ總財產ニ被求シ大ニ社會ノ公利ニ關係アル者ニシテ且ツ該負債者ト外人トニ對シ非常ノ効驗ヲ生スル者ナリ是ニ因リ法律上特ニ之ヲ定ムル明文アル場合ヲ除ク外容易ニ書入質ノ權ヲ與フ可カラス前ニ徵引シタル參議院ノ三意見書ノ如キハ唯〻行政官ニ於テ參事院判決書宰相判決書及ヒ參議院判決書等ノ如キ裁判宣告書ト看做サレタル行政訴件ノ判決ヲ下スヲ許サレタル場合ニ於テ所謂ル司法上ノ書入質權ナル者ヲ生ス可シトス可キヤ否ヤノ問題ヲ定メシニ過キサルノミ

余ハ千八百十二年ニ於テ督促狀ヲ發スルノ權ヲ有スル行政官ヨリ交附スル督促狀ニ對シ前ニ徵引シタル參議院意見書ニ定ムル主義ヲ適施ス可キヿ明確ナリト思惟スレ𪜈著者中往々之ニ反對ノ議ヲ唱フル者アリ（余カ著書行政法問題第四百四十四葉ヲ看ヨ）若シ其レ之ヲ以テ千八百三十七年七月十八日ノ法律第六十三條ニ因リ邑長ヨリ發スル督促狀ニ適施スルハ當時立法者ノ意ヲ了解セサル者ニシテ余ノ甚タ取ラサル所ナリ蓋シ邑長ヲシテ其所管邑內ニ於テ必須執行ノ力ヲ有スル文書ヲ發セシムルノ一事ニ止マルモ之ニ與フル所ノ者已ニ極メテ大ナリ況ヤ之ヲ推擴シテ郡長ノ檢署シタル督促狀ヲ發スルニ因リテ邑ニ對スル負債者ニ屬スル現在幷ニ未來ノ總財產ニ書入質ノ義務ヲ負ハシムルノ大權

ヲ附與スルニ於テヲヤ其過當ナルヿ固ヨリ論ヲ待タス此ノ如キハ豈ニ立法者ノ精神ナランヤ故ニ法律上明文アル場合ヲ除ク外督促狀ニ附スルニ書入質ノ權ヲ以テスヿ可カラス且ツ全國三萬七千ノ邑長ヲシテ邑ニ對スル負債者ノ財産ニ向テ隨意ニ書入質ノ義務ヲ被ラスヲ得ルトスル時ハ殆ト豫想ス可カラサルノ大弊ヲ生セン此ノ如キノ惡結果ヲ生ス可キ者ヲ許認スル前ニ徵引セル千八百三十七年ノ法律第六十三條ノ主意ヲ誤解スル者ナリ當時ノ立法者ニシテ果シテ邑長郡長ニ與フルニ此大權ヲ以テセントスルノ意ナラハ法律上必ス其明文ヲ掲ケサル可カラス然レ𪜈未タ嘗テ之アラス是ニ因リテ之ヲ觀レハ郡長及ヒ邑長ハ右ノ六十三條ニ定ムル場合ニ於テ必須執行ノ力アル文書ヲ發スルヲ得レ𪜈其書入質ノ權ヲ生ス可キ者ニ至リテハ獨リ之ヲ發スルノ權ナシト斷定セサル可カラス

第千四百九十　千八百三十七年七月十八日ノ法律第六十三條ハ法例ニ因リ特別ノ徵收方法ヲ定メサル收入ニ關シテ適施ス可シ是故ニ千八百三十七年ノ法律第四十四條ヲ適施ス可キ場合ニ於テ之ニ從ハスシテ同法第六十三條ヲ適施シタル時ハ該第六十三條ヲ執行スルカ爲メニスル所爲ヲ取消ス可シ（千八百五十九年九月二十一日ボルサーノ、ド、ラベールーズ件判決ヲ看ヨ）

第千四百十　郡長ノ檢署ヲ得テ邑長ヨリ發出スル執行狀ニ對スル故障申述ハ何レノ場合ニ於テ參事院若シハ普通裁判所ニ致ス可キヤ蓋シ督促狀ノ程式ニ所缺アルニ因リテ起セル故障申述ハ普通裁判所ニ致シ其徵收ノ事實ニ關シテ起セル故障申述ハ之ヲ參事院ニ致スヿ猶ホ直稅訴件ニ於ケルカコトクナル可シ（千八百三十七年七月十八日ノ法律第四十四條ヲ看ヨ）

第千四百十一　千八百三十七年ノ法律第六十三條ハ邑民中軍人ヲ旅宿セシムルヿヲ拒ミタル場合ニ於テ之ヲ旅店ニ投宿セシムルニ因リテ邑長ノ負擔ス

可キ宿料ヲ徴收スルノ簡便法ヲ定メタリ抑此宿料徴收ノ法ニ關シテハ内務幷ニ司法ノ兩宰相ニ於テ大ニ其判決ニ苦ミ遂ニ千八百四十九年五月二十四日及ヒ同年八月二十九日ノ決定書ニ因リ左ニ徴引セル千八百三十三年二月二十二日ノ參議院内務部意見書ニ從ハサル可カラサル者トセリ曰ク軍人ノ投宿ヲ命セラレタル邑民ニ於テ之ヲ拒ムニ因リテ該邑民ナシテ負擔セシム可キ旅宿ノ支辨ニ關シ爭訟ヲ生スル場合ニ於テハ邑長其費額ヲ定メ而シテ後該費額ヲ定メタル文書ト邑長ノ請求書トヲ治安裁判官ニ呈出シ其執行狀ヲ受ク可シト余ハ參議院内務部ニ於テ右ノ千八百三十三年二月二十二日ノ意見書ヲ發スルノ後チニ定メタル千八百三十七年ノ法律第六十三條ノ程式ニ從フヲ以テ更ニ簡易ニシテ且ツ適當ナリト思惟ス但シ爲メニ故障申述ヲ爲ス者アルニ因リテ治安裁判官ニ出訴スルハ此限ニ在ラサルナリ要スルニ此難題ヲ起セシハ内務司法ノ兩宰相ニ於テ前ニ徴引セル法律第六十三條ノ存在セシヿヲ遺忘セシカ故ナリ然レトモ余カ前ニ指示セシ如クセントスル時ハ邑ニ於テ勉メテ軍人ノ投宿ヲ拒ミタル者ト旅宿主トナシテ滿足セシメンヿヲ計ルヲ要ス

以上逐項掲論スル所ノ者ヲ約説スレハ邑長ハ或ル場合ニ於テ行政訴訟判決ノ權ヲ有スル者ナリ然レトモ前數項ニ引例スル場合ニ限リテ邑長ニ此權アリトス可カラス凡ソ邑長ヨリ發スル文書中何レノ者ヲ以テ行政訴訟手續ニ從ヒ參議院ニ控訴スルヲ得ルヤ否ヤノ問題ヲ定メントト欲セハ宜シク本書第二十八項以下ニ定メタル例則ニ參照シテ之ヲ定ム可シ是ニ因リ參議院ニ於テ認可シタル整路線總圖ニ反背シ邑長ノ定メタル整路線ニ關スル訴件ハ行政訴訟手續ニ從ヒ之ヲ該院ニ控訴スルヲ得可シ（本書第二十九項第十節ヲ看ヨ）

行政訴件ニ係ル邑長ノ判決書ニ對スル控訴ハ先ツ州長ニ致シ次キニ宰相ニ致シ之ニ不服ナレハ又更ニ參議院ニ申訴スルヲ得法律上邑長判決書ヲ州長及ヒ宰相ニ控訴スルノ期限ヲ定メス是故ニ邑長決定書ハ其送達ヲ得ルノ日ヨリ多少ノ期限ヲ經過スルノ一事ヲ以テ控訴ス可カラサル力ヲ有スル者トナリタリトスルヲ得ス

州長ニ於テ邑長ノ判決書ニ係ル控訴ヲ受理シタル時ハ必ス之ヲ認定シ若クハ之ヲ廢棄ス可キヤ將タ該決定書中ノ條項ヲ變更スルヲ得ルヤ州長ニハ唯邑長決定書ヲ廢棄若クハ停止スルノミニシテ之ヲ變更スルヲ得可カラストスル者ハ千八百三十七年七月十八日ノ法律第十一條ヲ引テ其論據トセリ該條ニ曰ク邑長ノ決定書ハ直ニ郡長ニ送移ス而シテ州長ハ之ヲ廢棄シ若クハ其執行ヲ停止スルヲ得ト當時下議院ニ提出シタル該法律ノ議案ハ之ニ加フルニ州長決定書ヲ變更スルノ權ヲ以テ州長ニ屬シタリ然ルニ該議案調査委員ニ於テ該議案ニ定ムル所ノ如ク之ヲ變更スルノ權ヲ以テ州長ニ與ヘタル時ハ之ヲ處分スルノ權モ亦之ニ屬セサル可カラス然ルカ如キハ邑長ノ權ヲシテ僅ニ起議スルニ止マラシメ州長獨リ全權ヲ有シテ全ク邑權ヲ毀壞スルニ至ル可シトスルノ說ヲ立ツルニ因リテ遂ニ議案中變更ノ二字ヲ削リ同上ノ法律第十一條ニ於テ邑長決定書ヲ廢棄若クハ停止スルノ權ヲ以テ州長ニ與ヘタリ以上ノ論說ヲ主持セソカ爲メニ又同上法律第十條ヲ徵引スルヲ得蓋シ該條ハ上長行政官ノ監督ヲ受ケテ邑長ノ執行スル所ノ者ヲ以テ固有ノ邑權ニ屬スル者トナシ之ヲ以テ同上法律第九條ニ因リ上長官ノ指揮ヲ受ケテ邑長ノ執行スル者ト區別シタリ是等ノ道理アルニ拘ラス余ハ州長ニ於テ人民ノ權利ヲ妨害スル條項ヲ含メル邑長決定書ヲ變更改定スルノ權ヲ有ス可シト思惟ス請フ今

邑長ニ於テ決定書ヲ出シ毀崩ノ懼アル家屋取崩ヲ命令スルヲ拒ミ若クハ整路線ヲ獨定シ若クハ臨街家屋ノ墻壁修補ヲ許セリト假定セヨ此ノ如キ場合ニ於テ州長ハ僅ニ該決定書ヲ認定シ廢棄シ若クハ停止スルニ止ムルヲ得ス須ラク公利ト訴者ノ權利トヲ考察シテ以テ自カラ命令スル所アラサル可カラス而シテ之ヲ命令スルノ權ハ千七百八十九年十二月十四日ノ法律第六十條ニ明記シテ之ヲ州長ニ認メタリ即チ該條ニ曰ク凡ソ邑長ヨリ發出スル文書ニ因リテ其私權ヲ害セラレタリトスル者ハ其主意ヲ知事（今ノ州長）ニ告訴スルヲ得該州知事ハ事實ノ調査ヲ擔任ス可キ區行政官ノ意見ヲ聞キ以テ之ヲ裁定ス可シト所謂ル千八百三十七年ノ法律ハ右ノ千七百八十九年ノ法律第六十條ヲシテ廢止ニ屬セシメタル者ニ非ス而シテ千八百三十七年ノ法律第十一條ハ邑長ノ發スル定規上ノ決定書ニ就キテ定ムル者ニシテ各箇人ノ

私權上ニ關スル邑長決定書ニ關係セス若シ夫レ然ラスシテ縱令ヒ邑長ニ於テ毀崩ノ懼アル家屋ノ取崩ヲ命令スルヲ拒ミ若クハ有害ノ整路線ヲ獨定シ若クハ惡意ヲ以テ墻壁ノ修補ヲ拒メル決定書ヲ下スアルモ州長敢テ之ヲ變更改定スルヲ得ストスル時ハ却テ州長ヲシテ邑長ノ判決スル所ノ者ヲ遵奉セシムルニ至ル可シ是レ豈ニ事理ノ宜クシ然ル可キ者ナランヤ邑長ニ於テ家屋ノ修補ヲ拒ミタル時ニ當リ州長若クハ宰相ニ於テ其修補ヲ許可スルヲ得可シトスル千八百三十八年一月二十五日レハール邑件ニ係ル參議院判決及ヒ余カ著行政法問題第五百七十一葉ヲ參看ス可シ

以上論述セル所ノ者ハ特ニ州長一人ニテ判定ス可キ行政訴訟上ノ職務ヲ指示スルノミ更ニ邑長ニ於テ邑委員ト計リテ行政訴訟判決ヲ行フ可キ場合アリ左ニ掲クル二例ハ其尤モ較著ナル者トス即チ邑ノ爲

メニスル入札ニ關スル千八百三十七年七月十三日ノ法律第十六條ニ定ムル者一ナリ國會州會幷ニ邑會代議士ノ撰擧人名簿調査ノ場合ニ於テ起レル爭訟ヲ判決スルニ就キ千八百五十二年二月二日ノ詔書第二十條ニ定ムル者二ナリ此兩條ハ本書第千十四項以下及ヒ第千九十六項以下ニ於テ余已ニ之ヲ說明セリ故ニ又之ヲ此ニ再論セス

千八百四十八年二月ノ革命ニ因リ民主政度ヲ立テタルカ爲メニ邑會ニ屬ス可キ行政訴訟判決ノ權ヲシテ大ニ增加セシメタリ是レ君主政度ニ於テハ大權ヲ一所ニ收メテ決行スルヲ旨トスレトモ民主政度ニ於テハ上、中央政府ヨリ下、郡邑ニ至ル迄勉メテ衆共ニ事ヲ取ルヲ以テ其要領トスルニ因ル右千八百四十八年二月ノ革命以來邑會ニ與ヘタル行政訴訟判決權中現ニ存スル者ハ僅ニ不健康ナル住所ニ關スル千八百五十年四月十三日ノ法律第五第六ノ兩條ニ過キス余ハ本書第二百

四十二項ニ於テ略〻之ヲ辯セリ今又已ニ廢止ニ屬セル諸法律ヲ此ニ徵引シテ以テ舊時邑會ニ屬セシ行政訴訟判決ノ權ヲ臚列スルノ必要ヲ見ス故ニ悉ク之ヲ略セリ

要スルニ凡ソ普通行政ハ國長ヨリ出テ宰相之ヲ下ニ受ク宰相ハ更ニ之ヲ州長ニ移シ州長ハ郡長ニ因リテ更ニ之ヲ邑長ニ傳フ邑長ハ普ネク之ヲシテ其所管邑民ニ布及セシム又行政訴訟即チ私權ヲ害セラレタリトスル者ヨリ起セル訴訟ニ關シテハ邑長ヲ以テ最下等ノ裁判官トシ州長宰相ハ各〻其上ニ立テ當該ノ判決權ヲ行ヒ而シテ之ヲ統卒スルノ權ハ參議院ニ咨詢決定ス可キ國長一人ニ歸ス此訴求ヲ調査シテ之ヲ判定スルモ亦行政上ノ處務ニシテ司法上ノ事ニ非ス蓋シ被治者ノ訴求ヲ聽クハ治者ノ務ノ最モ大ナル者ナリ若シ此訴求ヲ聽クノ務メト普通行政務トヲ分テ二トナシ一ハ行政官ニ與ヘ一ハ司法官ニ與

ヘントスルカ如キハ事理ニ反シ且ツ我國法制ノ原則ニ違ヘル者ナリ是ニ因リテ之ヲ觀レハ普通行政務幷ニ行政訴訟務執行ノ權ハ千八百五十二年ノ國憲第二條ニ因リ皇帝ニ與ヘタル行法權中ニ含蓄スル者ニシテ同國憲第七條及ヒ第二十六條ニ因リ普通裁判所ニ認メタル司法權中ニ入ル可キ者ニ非サルナリ

第四卷　會計法院（クイルデコント）

（提要）第千四百十七　會計法院ハ行政部ノ裁判所ニシテ司法部ノ裁判所ニ非サルナリ

會計法院ハ其組織上及ヒ該院官吏ヲ以テ終身官ト定メタル點ヨリ觀察スレハ大ニ普通裁判所ニ髣髴セリト雖モ然レトモ之ヲ以テ行政訴訟ヲ判決ス可キ官衙ノ部類ニ列セサル可カラス此組織上及ヒ官吏就任上ニ就キテ其普通裁判所ト似タルアルハ唯其外見ニ止マル者ナリ而シテ該院ノ職掌上ニ於テハ嘗テ普通裁判所ト相同シキ所アラス是故ニ國憲上定ムル所ノ行政司法兩權區別ノ大則ニ從ヒ會計法院ヲ以テ斷然行政官衙ノ部類ニ屬シ之ヲ以テ司法部ニ列スル者トス可カラス該院ヲ以テ大藏宰相局中ニ置キテ司法宰相局中ニ設ケス且ツ該院ノ判決ヲ以テ參議院ノ統轄ニ附シテ之ヲ破毀法院ニ屬セサルヿ後段ニ論スルカ如クナルハ亦是カ爲メナリ然ラハ則チ諸公文中會計法院ヲ稱シテ司法々衙トナシ又該院ノ職掌トスル財政上監督ノ權ヲ定メタル千八百六十二年五月二十三日ノ詔書第四篇第三百七十五條以下ニ關スル者ヲ名題シテ司法上ノ理財務トナシタルハ大ニ事實ヲ誤マル者ナリ

是ニ因リテ之ヲ推セハ會計法院ノ官吏ハ陪審官トナルヲ得可シ何トナレハ陪審官ノ職ト裁判官ノ職ト兼攝ス可カラストスル法制ハ特ニ

純然タル司法官吏ノ爲メニ定メタル者ナレハナリ千八百四十三年四月二十一日破毀法院裁判千八百五十三年六月四日ノ法律第三條

第一章　會計法院ノ原因及ヒ組織

(提要)第千四百十八　舊會計院及ヒ其職掌

第千四百十九　舊會計院ノ廢止○立法議會ニ於テ決算表ヲ勘定セシ事○理財局及ヒ理財委員

第千四百二十　會計法院ノ創立千八百七年九月十六日ノ法律

第千四百二十一甲　會計法院ノ組織構成

第千四百二十一乙　會計法院官吏ノ退老年齢

第千四百二十二　會計法院ノ班級○分局○議決

古ヘ立君政ノ時代ニ於テハ佛蘭西國ニ數會計院ナル者アリテ財政及ヒ王室所有財産ノ保存ニ關スル事件ニ對シ終審判決ヲ行フヲ以テ其

本務トセリ是等會計院ノ中ニ就キ巴里府ノ會計院ハ其權尤モ大ニシテ今ノ會計院ノ當務トスル所ノ者ニ超越セリ請フ其職務ノ大要ヲ示サン蓋シ巴里府ノ會計院ナル者ハ第一公ケノ秩序ニ關スル者第二理財務第三王室所有財産ノ保存等凡ソ三樣ノ事項ニ關スル職務ヲ行ヘリ而シテ其公ケノ秩序ニ關スル職掌ニ就キ該院ハ國法トナル可キ勅令、和親ノ條約、國王ノ結婚契約等ヲ簿冊ニ登錄シ理財務上ニ於テハ諸決算表ノ程式ヲ定メタル勅令ヲ簿冊ニ登記シ及ヒ王室ノ收入幷ニ國庫ノ收入決算表ヲ判決スルヲ司トリ又王室所有財産ノ保存ニ關シテハ該財産ノ保存幷ニ管理ニ關スル勅令及ヒ該財産ノ一部ヲ質入トスルヲ許セル命令ヲ調査スルヲ職トス而シテ其書庫ニハ僧侶ノ誓約書幷ニ其收入調書及ヒ諸侯ノ誓約書等ヲ保存セリ

千七百九十年九月七日議決同月十一日公布ノ法律第十二條ニ於テ舊

會計院ノ廢止ヲ命令シ翌年九月十七日議決同月二十九日公布ノ法律ニヨリ遂ニ之ヲ實行セリ此九月二十九日公布ノ法律ニ因レハ爾後國庫財政ノ決算表ヲ調査確定スルノ任ハ之ヲ立法議會ニ任ス可キナリ（同上法律第二篇第一章及ヒ千七百九十年七月十七日決議八月八日公布ノ法律第十二條ヲ看ヨ）抑〻立法議會ヲシテ國庫財政ノ決算表ヲ調査確定セシムルノ法ヲ創定セシ所以ノ者ハ國民ハ其代理者ニ因リテ財務ニ預カル官吏ノ決算表ヲ領收調査セサル可カラストスル論説ニ基ケリ是ニ因テ右ノ千七百九十年九月二十九日ノ公布ノ法律第二第三條ニ因リ理財局ナル者ヲ置キ之ヲシテ諸決算表ヲ領收シテ其假調査ヲ行ハシメ又其第七條ニ因リ是等決算表ノ條目ニ就テ起レル爭訟ハ區裁判所ノ判決ニ附ス可シトセリ次ヲ此理財局ニ代フルニ理財委員ナル者ヲ以テシ全國ノ歲出入決算表ヲ規定調査スルニ任シタリ（共和暦第三年菓月五日ノ國憲第三百二十一條以下及ヒ共和暦第八年霜月二十二日ノ國憲第八十九條ヲ看ヨ）

千八百七年九月十六日ノ法律及ヒ同年同月二十八日ノ詔書ニ因リ會計法院ナル者ヲ創設セリ該院ハ院長一名局長三名判事十八名（コンセイエ、メートル）評事若干名（政府ニ於テ其員數ヲ定ム）目代長一名及ヒ書記長一名ヲ以テ成ル（同上法律第二條）爾後千八百四十八年五月二日ノ布令ニ因リ會計法院各局ノ人員ヲ減シタレ𪜈千八百五十二年一月十五日ノ布令ニ因リテ右ノ布令ヲ廢止セリ千八百六十年十二月十二日ノ詔書ハ評事ノ員數ヲ定メテ八十四人トナシ其中二十四人ヲ第一等評事トシ他ノ六十人ヲ第二等評事トセリ是ヨリ先キ千八百五十六年十月二十三日ノ詔書ニ因リ二十名以内ノ評事見習ヲ新置シ之ヲ二等ニ分テ第一等見習第二等見習各十名トナシ第一等見習ニハ二千「フラン」ノ年給ヲ給セリ（千八百五十九年十二月十四日ノ詔書）而シテ二等見習ヲ進メテ一等見習ト爲サントスルニ當リ其半數ハ不時拔擢ノ法ニ從ヒ他ノ半數ハ最古參昇進ノ法ニ從テ之ヲ行フ（同上法律第三十七條）

會計法院ノ僚員ハ勅任終身官トス其各局長ハ毎歳之ヲ變更スルヲ得（千八百七年九月十六日ノ法律第六條）余ハ此僚員中ニ目代長及ヒ書記長ヲ含蓄セサル者ト思惟ス又評事見習ハ皇帝ニ於テ之ヲ命シ大藏宰相ノ建議及ヒ院長幷ニ目代長ノ意見ニ因リ詔書ヲ下シテ之ヲ廢黜スルヲ得（千八百五十六年十月二十三日ノ詔書第四條）第二等評事ニ缺員アル時其三分一ハ必ス評事見習ヲ撰拔シテ之ニ充ツ（千八百六十年十二月二十二日ノ詔書第四條）

年齢滿三十歳以下ノ者ハ會計法院長判事目代長若クハ書記タルヲ得ス（千八百七年九月二十八日ノ詔書第十三條第四十五條）又滿二十五歳以下ノ者ハ評事タルヲ得ス（同上法律第十五條）其第二等評事ヲ第一等評事ニ擧ケントスル時ハ半ハ最古參昇進ノ法ニ從ヒ半ハ政府ニ於テ之ヲ不次拔擢ス（同上法律第十四條）凡ソ年齢二十一歳以上三十歳以下ノ者法學得業生トナラサル者及ヒ大藏宰相ノ指定シタル判事一名評事二名大藏宰相局附屬官吏二名ヲ以テ構成シ

タル試驗委員ノ許可ヲ得サル者ハ評事見習ニ拜スルヲ得ス（千八百五十六年十月二十三日ノ詔書第三條）

年齢七十五歳トナリタル破毀法院ノ僚員ヲ退職者ト爲ス可シト定ムル千八百五十二年三月一日ノ詔書ノ條款ハ會計法院長該院ノ各局長及ヒ判事ニ適施ス可シ年齢七十歳トナリタル控訴院幷ニ始審裁判所ノ僚員ヲ退職者トス可キ同上詔書ノ條款ハ亦之ヲ會計法院ノ評事ニ適施ス可シ（千八百五十二年三月十九日ノ詔書第一條）會計法院ハ其職權ニ因リ又ハ目代長ノ請求ニ因リ當務ヲ怠リ若クハ其職位ヲ汚シタル該院官吏ヲ譴責停職剝職等ノ懲戒令ニ擬スルヲ得（同上法律第三條）但シ剝職ヲ命シタル該院ノ議決ハ大藏宰相ノ申報ニ因リ更ニ詔書ヲ下スニ非サレハ必須執行ノ力アル者トス可カラス

會計法院附屬目代長ノ職掌ハ千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第

三百八十九條乃至第三百九十七條ニ同院書記長ノ職掌ハ同上ノ詔書第三百九十八條以下ニ掲錄セリ

會計法院ハ破毀法院ノ次キニ列シ之ト同一ノ特權ヲ享受ス（千八百七年九月十六日ノ法律第七條）又會計法院ハ三局ニ分チ各局局長一名判事六名ヲ以テ成ル而シテ院長ハ隨時各局ノ會議ニ上席スルヲ得（同上法律第三條及ヒ千八百七年九月二十八日ノ詔書第八條）各局長ニ故障アル場合ニ於テハ該局附屬僚員ノ古參者ヲシテ代リテ議事ニ上席セシム（同上詔書第十條）毎歲各局附屬ノ僚員二名ヲ他ノ兩局若クハ一局ニ轉任セシム（千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第三百八十一條）是レ此局ト彼ノ局トノ僚員交代ノ法ヲ行フテ以テ公利益ヲ保護セントスルノ主意ニ出ツル者ナリ凡ソ各局ハ其僚員五名以下ニテ判定スル所アルヲ得ス（同上法律第五條）又評事ハ何レノ局ニモ附屬セス（千八百七年九月二十八日ノ詔書第十七條及ヒ千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第三百八十五條）各局ニ於テ決ヲ擧クルハ投票ノ多數ニ因リ論議

等分スル場合ニ於テハ局長ノ說ヲ以テ其取捨ヲ決ス（同上法律第四條）是レ公平ノ規則ニ違ヘル者ナリ評事見習役ハ院長ノ指揮ヲ受ケテ評事ニ附屬シ之ヲ助ケテ諸下調等ノ務メニ服ス（千八百五十六年十月二十三日ノ法律第二條）人員十名ヲ限リテ皇帝ノ指定シタル評事見習ニシテ在職四年以上ニ至ル者ハ各局ノ議場ニ於テ報告ヲ爲シ且ツ其報告書ニ從テ作リタル判決書ニ署名スルヲ得而シテ該評事見習ハ會計法院ノ諸僚員ト同一ノ權利ヲ有シ且ツ同一ノ懲戒令ニ擬セラル可シ（千八百六十年十二月十二日ノ詔書第二第三條）

第二章　會計法院ノ職掌

（提要）第千四百二十三　會計法院ハ時トシテ始審終審ノ判決ヲ行ヒ時トシテ終審ノミノ判決ヲ行フ○始審終審ノ判決ヲ行フ可キ場合ニ係ル該院ノ職掌

第千四百二十四　收稅者（ペルセプトール）ハ法律上ノ書入質ヲ命セラル可キ計

吏ナルヤ

第千四百二十五　控訴裁判所タル可キ會計法院ノ職掌

第千四百二十六　主計吏ト看做ス可キ者ニ對シ會計法院ニ屬スル行政上ノ職務

第千四百二十七　同上ノ職務ニ因リテ生シタル結果

第千四百二十八　會計法院ノ判決權ハ內地幷ニ藩屬地ニ普及ス

第千四百二十九　會計法院ハ決算表ヲ判定シテ某ノ計吏ヲ以テ政府ニ對シ前貸シヲ爲シタル者ト宣告シテ其負債ヲ國庫ニ負ハシムルヲ得ス

第千四百三十　結果○大藏宰相ハ政府ニ前貸シタル計吏ニ向テ其拂渡ノ權ヲ失ヒタリト命スルヲ得

第千四百三十一　大藏宰相ハ會計法院ノ判決アリタル後ニ於テ右ノ失權ニ關スル事項ヲ判定スルヲ得ルヤ

第千四百三十二　會計法院ハ拂渡令狀ヲ發スル者ニ對シ判決ノ權ヲ有セス○擬律ノ錯雜

第千四百三十三　會計法院ハ書入質ノ減削若クハ變換ヲ命令スルヲ得

第千四百三十四　會計法院ノ判決權ハ特定ノ一事項ニ限レル者ナリ○結果

第千四百三十五　主計吏ノ處分ニ關シ大藏宰相ニ屬スル職掌

第千四百三十六　會計法院ニ於テ調製スル照査總表

第千四百三十七　物品上ノ決算表ニ關シ會計法院ノ監督權

會計法院ハ昔時ノ理財委員ノ職ヲ續ケル者ナリ（千八百七年九月十六日ノ法律第一條）其

職トスル所ハ時トシテハ始審終審ノ判決ヲ兼行シ時トシテハ控訴裁判所トシテ終審ノ判決ノミヲ行フ其始審終審ヲ兼行スル裁判所タル時ハ毎歳大藏ノ出納長官、記錄稅局、印紙稅局、公領管理局ノ收稅吏、海口稅局、間稅局ノ收稅吏、郵便局長、鑄錢局長、アルゼリー州其他藩屬地ノ計吏、中央金庫ノ主計長及ヒ定額金挪移ノ責メニ任スル官吏等ヨリ提出スル出納決算表ヲ判決スルニ任ス公債係、退老金係ノ計吏巴里府其他各州ニ於テスル財産讓渡ノ「ヲ」管掌スル計吏消債局及ヒ物件預局印刷局ノ計吏領事館證印局ノ計吏海軍廢兵局ノ主計長、官立中學校ノ計吏、巴里府工事局計吏、法例ニ因リ定メタル收額ヲ有スル邑、救貧院、其他ノ施濟舍ニ屬スル計吏等ヨリ提出スル毎歳決算表、其他法例ニ因リテ會計法院ノ所轄ニ屬セシ諸決算表ニ係ル始審終審ノ判決ヲ行フモ亦會計法院ノ職ナリ物品ニ關スル決算表ニ關シ監督ヲ行フモ均シク會計法院ノ行フ所ナリ千八百三十七年九月十六日ノ法律第十一條千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第三百七十五條

收稅者ハ大藏宰相局ニ於テ計吏ノ財産上ニ於テ行フ可キ權利ヲ定メタル千八百七年九月五日ノ法律ニ準擬ス可キ計吏ナルヤ之ニ準擬ス可キ者トスル時ハ該收稅者ノ財産ニ對シ書入質ノ權ヲ行フヲ得ルヤ

該法律第七條ニハ收稅者ヲ以テ法律上書入質ノ義務ヲ負ハシム可キ計吏ノ中ニ算入セス千八百九年八月二十一日ノ宰相判決書、トロプロンジグ氏著特權及ヒ書入質權論第二卷第四百三十項及ヒトロプロンジグ氏カ該書ニ引用セシ千八百二十年六月十日コルマル件ニ係ル參議院判決等ニ於テモ亦收稅者ニ書入質ヲ命セラル可キ義務アル者トセス

然レトモ民法第二千百二十一條ニ定ムル所ノ者ハ其義務博ニシテ之ヲ一般ニ推シ及ホス可キヿ猶ホ千八百七年九月五日ノ法律第一條及ヒ第

六條ニ定ムル所ノ者ノコトクナル可キカコトシ蓋シ該法律第七條ハ收稅者其他該條ニ揭錄セサル諸計吏ニ適施セスシテ獨リ或ル計吏ニ適施ス可キ特例ヲ示スノミ故ニ該條ヲ據トシ收稅者其他該條ニ揭錄セサル計吏ニ於テ法律上ノ書入質ヲ命セラル可キノ義務ナシトスルヲ得ス邑收稅吏ハ千八百七年ノ法律中ニ明記算入セラレサルモ千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第三百七十五條ニ因リ更ニ之ヲ計吏ノ部類ニ入レ法律上書入質ノ義務アル者トセシカ如キハ則チ其一證ナリ（千八百四十年六月十七日大藏宰相諭達書第千六十條ヨリ看ヨ）抑〻夫レ邑收稅吏ト州收稅吏トハ各其收稅上ノ責任ヲ有スル者ナルカ故ニ其下ニ隸屬シテ國稅ヲ徵スル收稅者ノ財產上ニ法律上書入質ノ義務ヲ蒙ラシムルハ大藏宰相ニ於テ或ハ實際上之ヲ無益ト考察スルヿアル可ケレモ法律上ニ於テハ民法第二千九十八條及ヒ第二千百二十一條千八百七年九月五日ノ法律

第一條及ヒ第六條ニ從ヒ收稅者ヲ認ノテ計吏トナシ之ニ蒙ラシムルニ法律上書入質ノ義務ヲ以テス可キヲ覺ユ千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第三百七十五條ニ於テ收稅者ニ關シ別ニ規定スル所ナキモ之ヲ以テ該收稅者ハ計吏ニ非サルノ論據トスルヲ得ス何トナレハ該詔書ハ獨リ此收稅者ノミナラス千八百七年九月五日ノ法律第七條ニ因リ計吏ト認ラレテ書入質ノ職務ヲ有スル邑收稅吏ニモ亦言及スル所アラサレハナリ

會計法院ハ控訴裁判所トシテ邑救貧院其他施濟舍計吏ノ財務ニ係ル參事院判決ニ對スル控訴及ヒ殖民議會ノ所管ニ屬スル計吏ノ每歲決算表ニ係ル該議會ノ判定ニ對スル控訴ヲ判決ス（千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第三百七十五條）會計法院ニ屬スル右ノ判決權ハ法定ノ許可ヲ得スシテ邑ニ屬スル財產ヲ管掌スル邑計吏即チ其本務ヲ越テ邑ノ財政ニ關與シタル

邑長等ノ如キ者ヲ除ク外總テノ主計吏ニ對シテ執行スルヲ得千八百七年九月五日ノ法律第六十四條及ヒ千八百三十五年八月七日グロシリエー件千八百三十八年三月二十八日アブリール件千八百三十九年七月三十日ロミユー件判決等ヲ看ヨ

左ニ開列スル者ハ千八百三十七年ノ法律ニ從ヒ邑ノ財政ニ關渉スルニ因リテ之ヲ計吏ト看做ス可シ

第一　邑費ニ充ツ可キ寄附金ニシテ邑會ノ定メテ邑ノ原資トナシタル者ヲ徵集使用スルノ事ニ任スル人民千八百四十八年八月十二日マントニー件判決

第二　寺院ヲ買收スルノ費用ニ充ツ可キ寄附金ヲ徵集使用シ若クハ邑ニ屬スル資本ヲ右ノ費用ニ供シタル邑長千八百五十一年二月二十七日ペラン件判決

第三　邑寺建築ノ費用ニ供スル寄附金ヲ領收シタル村僧但シ寄附者ニ於テ右寄附金ヲ村僧ノ隨意支辨ニ任ス可シト明言セシ場合

ト雖モ亦同シ千八百五十七年四月十五日セルボー件判決

邑ノ財政ニ關與スル者ヲ以テ邑計吏ト看做ス可キヿ前ニ論スル所ノ如クナレハ宜ク左ノ斷定ヲ下サヽルヘカラス

第一　是等邑計吏ト看做ス可キ者ハ本邑ノ總收入三萬フランヽ以下ナル時ハ參事院ニ於テ爲メニ生スル爭訟ノ判決ヲ受ケ其三萬フランヽ以上ナル時ハ直ニ會計法院ノ判決ヲ受ク千八百三十七年七月十八日ノ法律第六十六條而シテ此主計吏ト看做ス可キ者ノ徵集シ若クハ費用シタル金額ノ三萬フランヽニ超ユルト否ラサルトニ因リテ其判決ヲ受ク可キ官衙ヲ定メス

第二　是等計吏ト看做ス可キ者ハ民法第二千二百二十一條ニ因リ邑ニ對シテ其所有財產ヲ書入質トセラルヽヿ有ル可シ

第三　是等計吏ト看做ス可キ者ニ於テ敗訟スル場合ニ於テハ千八

百三十二年四月十七日ノ法律第八條及ヒ第五條ニ因リ邑ニ對スル負債ヲ辨償スル爲メニ要償ノ拘留ヲ命セラルヽ有ル可シ

第四　是等邑計吏ト看做ス可キ者ニ向ヒ州長ノ命ヲ以テ邑ニ對スル負債ヲ返辨セシム可キ判決ヲ下スノ權アル參事院ハ亦該計吏ニ於テ邑ニ對スル前貸金アルヤ否ヤヲ判決スルノ權アリ千八百五十八

第千四百二十八

年三月十八日コセー件判決

會計法院ノ判決權ハ一ニ統テ二アル可カラス故ニ該院ノ權ハ內地アルゼリー州其他ノ藩屬地ニ普及ス千八百三十八年五月三十一日詔書第三百七十五條及ヒ千八百四十一年六月二十五日ノ法律ヲ看ヨ而シテ其旨トスル所ハ一般財政ノ秩序規則ヲ保固シ且ツ諸計吏ヲ監督シテ定額金ニ超加スル費用ヲ爲サヽラシムルニ有ルナリ

第千四百二十九

會計法院ハ該院ニ呈出スル諸決算表ヲ算定スルノ後判定書ナル者ヲ發シテ計吏ニ於テ其收支平均スルヿ若クハ其官ニ對シテ負債アルヿヲ示ス而シテ其收支相平均スル場合及ヒ其官ニ對シテ前貸金アル場合ニ於テハ會計法院ニ於テ該計吏ヲ以テ其義務ヲ完了スル者ト宣告シテ之ニ對スル故障申述及ヒ其所有財產上ニ蒙ラセタル書入質ノ約ヲ解除スルヲ命ス然レトモ其官ニ對シテ負債アリトスル場合ニ於テハ該計吏ニ命シテ法定ノ期限內ニ其負債トナリタル全額ヲ國庫ニ納メシム千八百七年九月十六日ノ法律第十三條及ヒ千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第四百十九條

前ニ徵引シタル條款ニ從ヒ會計法院ハ主計吏ヲ以テ官ニ對シテ前貸金アル者ト宣告スルヲ得ルカ故ニ該法院ハ政府ヲ以テ該主計吏ニ對スル負債者ナリト定ムルヲ得可キカ如シ然レトモ是レ大ニ千六百六十九年八月ノ王勅ノ主意ニ違ヘル者ナリ該王勅第二十一條ニ因リ會計

法院ハ何レノ名義ニ於テスルモ又何レノ事情ニ原由スルモ國庫ニ屬スル財産ノ一部ヲ以テ決算上ノ費用ニ供用セシム可シト命令スルヲ得ス千七百九十年七月十七日議決八月八日公布ノ法律第一條ニ定メタル主意ニ鑑ミルモ亦國庫ヲ以テ計吏ニ對スル負債者トス可カラス蓋シ該法ノ主意ニ從ヘハ凡ソ法律ヲ以テスルノ外國庫ニ對スル貸與權ヲ以テ政府ノ負債中ニ算入スルヲ許サス果シテ此ノ如クナル時ハ責任者クハ其代理者ニ非サル外支辨ス可キ金額拂渡ヲ命令シテ定額金員ヲ越ヘサル政府ノ負債ヲ認ムルヲ得ス是ニ因リ千八百七年九月十六日ノ法律第十七條ニハ會計法院ノ判決書ヲ以テ惟計吏ニ對シ執行ノ力アル可シト明記シ政府ニ對シテ此力アリト云ハス千八百八年四月一日ノ詔書ニ於テ千八百七年九月十六日ノ主義ヲ解スルヿ左ノ如シ

第一、法律及ヒ詔勅ニ因リ當然ノ許可ヲ得タル拂渡指令官ヲ經由スルニ有ラサレハ國庫ニ於テ一切ノ支辨ヲ爲ス可カラサル事第二、會計法院ノ職ハ政府ノ爲メニ決算表ニ關スル判決ヲ爲スニ止マル故ニ唯政府ニ對シ負債スル所ナキ計吏ヲ以テ其義務ヲ完了シタル者トス可キノミ第三、計吏ニ於テ政府ニ對シテ前貸金アリト主張スル時ハ其拂渡ヲ當該宰相ニ求ム可シ是故ニ會計法院ハ該計吏ヨリ請求スル前貸金ニ係ル條款ヲ塗抹スルヿ昔時ノ會計院ニ於ケルカ如クス可シ是等ノ理由ヲ熟考シテ左ノ條款ヲ公布ス

第一條　會計法院ハ如何ナル理由アルニ拘ラス計吏ヨリ呈出スル決算表中支出ノ部ニ掲クル所ノ政府ニ對スル前貸金ヲ塗抹ス可シ

是ニ由テ之ヲ觀レハ大藏宰相ハ計吏ヲ以テ政府ニ對シ前貸金アル者ト宣告シタル會計法院判決書アルニ拘ラス該計吏ハ其拂渡ノ權ヲ失

ヒタリトスルヲ得ルナリ（千八百十六年十一月二十日ガトー件判決）

千八百七年九月十六日ノ法律第十四條ニ因リ誤算及ヒ違算アル場合ニ於テ一タヒ判定シタル決算表ノ再審ニ從事スルノ權ハ特ニ會計法院ニ屬ス是故ニ大藏宰相ニ於テ收入ノ誤算及ヒ違算ニ關シ會計法院ノ判定シタル決算表ヲ再審スル時ハ其權限ヲ踰越スル者トス可シ然レトモ大藏宰相ハ會計法院ニ於テ某ノ計吏ヲ以テ其義務ヲ完了セシ者トスル確定ノ判決アルト否ラサルトニ論ナク該計吏ノ關涉スル簿冊ニ就テ再檢査ヲ行フニ非サレハ其責任ノ有無ヲ明證ス可カラサル事實ニ係ル判定ヲ行フノ權アリトス又大藏宰相ハ千八百三十二年十二月八日ノ王勅第四條中、大藏宰相ハ其統轄スル諸計吏ノ責任ニ關スル問題ヲ判定ス可シ但シ參議院ニ控訴スルハ此限ニ在ラスト云ヘル末節ニ準シ該計吏ヲ以テ責任者ナリト判定シテ之ヲ政府ニ對シ負債ア

ル者ト認ムルヲ得（千八百四十八年二月七日ジユホー件判決及ヒ本書第千三百七項ヲ看ヨ）

何レノ場合ヲ論セス會計法院ハ拂渡指令官ニ對シテ判決ヲ行フヲ得ス又當該主計官ニ對シ請取證書及ヒ拂渡指令官ニ於テ之ニ附添ス可シト命令シタル證書ヲ添ヘ程式ニ從フタル拂渡令狀ニ因リテ支辨ヲ爲スヲヲ拒ムノ權ナシ（千八百七年九月十六日ノ法律第十八條千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第四百二十六條）

且ツ會計法院ハ諸計吏ノ所爲ニ關シ判決權ヲ有スレトモ國長幷ニ議院ニ對シ責任ヲ有スル行政官ニ向テ此權ヲ行フヲ得ス是レ其會計法院ノ僚員ナシテ終身官タラシムルモ危難ナキ所以ナリ若シ參議院ノ僚員ニシテ終身官タルヲ會計法院僚員ノ如クナラハ施政上ニ於テ殆ト言フ可カラサルノ不便ヲ生セン千八百七年ノ法律ニ因リテ下セル見解ハ參議院僚員カ皇帝ナポレオンノ前ニ於テ烈シキ討論アリタル後ニ於テ始テ定マリタル者ナリ（チエル氏著「コンスル」政及ヒ帝國政歴史第八卷第百十三葉ヲ看ヨ）

千八百七年ノ法律第十八條ニ定メタル主義ニ因リテ之ヲ推セハ會計法院ハ計吏ノ拂渡ノ當否ヲ判定スルカ爲メニ拂渡指令官タル宰相ノ認定シタル表中ニ掲クル者ノ外自餘ノ證書ヲ呈出セシムルヿヲ命令スルノ權ナカル可シ何トナレハ右第十八條ノ末節ニ於テ會計法院ハ請取證書及ヒ拂渡指令官ニ於テ之ニ附添ス可シト命令シタル證書ヲ添ヘ程式ニ從フタル拂渡令狀ヲ得ルニ因リテ支拂ヲ爲スヿヲ拒ムノ權ナシト云ヘル明文ノ在ル有レハナリ故ニ今暫ラク拂渡指令官タル宰相ヨリ法律上ノ書入質ヲ滌除シタル證書ヲ出ス可シト命セサルニ因リ計吏ニ於テ其果シテ法律上ノ書入質ヲ滌除セシ者ナルヤ否ヤヲ調査セスシテ直ニ政府ニ於テ買ヒ上ケタル不動產ノ金額ヲ拂渡シタリト假定セヨ此場合ニ於テ會計法院ハ右ノ法律上書入質ヲ滌除シタル證書ヲ呈出セサルヲ名トシテ計吏ノ拂渡ヲ爲ス者ヲ拒ムヲ得サル可シ

千八百三十九年九月八日工部宰相局件千八百四十一年三月二十二日大藏宰相局件判決

會計法院ハ右ノ判決ヲ以テ極メテ不當ナル者トナシ之ヲ爭議シテ曰ク果シテ此ノ判決ノ如クナル時ハ該院ハ又國民ノ爲メニ其權利ヲ保固スルヲ得スシテ法律上該院ニ與フル所ノ監督權ハ遂ニ虛僞ニ屬セン是レ該院ヲシテ僅ニ計算ヲ司トルノ一局タラシメ又大政ノ權ヲ有セサラシメントスルナリト此爭議ヲ是認スル者ノ言ニ曰ク行政官ヲシテ會計法院ニ呈出ス可キ證書ノ性質ヲ規定スルノ權ヲ有セシムルハ是レ之ニ與フルニ隨意ニ法律ヲ執行セサルヲ得ルノ權ヲ以テスル者ナリト而シテ千八百二十二年九月十四日ノ王勅第十條ヲ引テ其論據トセリ蓋シ該條ニ從ヘハ凡ソ拂渡令狀ニハ適當ニ辯解シタル政府負債ノ全部若クハ一部ヲ還濟スルノ効アルヿヲ明カニスル諸證書ヲ附添ス可キナリ

余ハ前説ニ答テ曰ハン證書ヲ添ヘサル拂渡令狀ハ決シテ法律ヲ廢スル可キ効力ヲ有スルヲ得サル可シ且ツ千八百二十二年ノ王勅ハ千八百七年ノ法律ト背馳スル者ニ非ス蓋シ該王勅第十條ニハ拂渡令狀ニ附添ス可キ證書ヲ指定スレトモ其第十五條ハ宰相若クハ其副官タル拂渡指令官ニ許スニ自カラ責任者トナリテ速ニ拂渡ヲ行フヿヲ計吏ニ命スルノ事ヲ以テセリ抑疑フ可キノ點ハ獨リ拂渡ス可キ金額ヲ以テ政府ノ當然ノ負債トスルヿヲ證スル證書ヲ呈出スルヿヲ命ス可キヤ否ヤ而シテ之ヲ命ス可シトスル時ハ其呈出ス可キ證書ヲ指定スルノ權ヲ以テ拂渡指令官ニ屬ス可キヤ將タ會計法院ニ屬ス可キヤヲ知ルニ在ルノミ彼ノ千八百七年ノ法律第十八條ハ此權ヲ以テ拂渡指令官ニ屬セシハ勿論千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第八十八條ニモ亦同樣ノ條規ヲ掲出セリ曰ク此詔書第八十五條及ヒ第八十七條ニ掲錄スル詔書ハ次條ニ定メタル基礎ニ依準シ大藏宰相ト拂渡指令官タル可キ宰相ト協議シテ編作シタル表中ニ於テ之ヲ定ムト

會計法院ノ説ニ從フ時ハ勢ヒ宰相責任ノ法ヲ破リテ國憲ノ大則ニ背カサルヲ得ス今請フ其故ヲ辯セン夫レ會計法院ヲシテ宰相若クハ其隸屬者タル拂渡指令官ニ於テ領收證書ニ附添ス可シト命シタル證書ヲ據トシテ命令セシ拂渡ヲ拒ムヲ得セシムルハ是レ宰相ヲ以テ會計法院ノ判決ヲ受ク可キ者ト爲スナリ然レトモ國憲上ニ於テハ元老院(國憲第十三條及ヒ高等法院同第四十五條及ヒ千八百五十八年六月四日元老院決定書)ノ外宰相ヲ彈劾スルヲ許サス是レニ因リテ之ヲ觀レハ彼ノ會計法院ノ説ノ如キハ其判決權限ノ明白ナランヲ欲シテ却テ千八百七年ノ法律及ヒ國憲ニ定ムル所ノ分限ヲ踰越シテ自カラ知ラサル者ナリ千八百三十九年ノ歲出入豫算表ノ確定ニ關スル法案ノ調査ニ任セシ下院委員等カ會計法

院ノ説ニ均シキ條項ヲ該法案中ニ記入スルヲ拒ミタルモ亦是レカ爲メノミ當時ジユプラー氏ヨリ下院ニ呈出セシ申報書ニ云ヘルアリ曰ク今若シ會計法院ノ請求スル説ヲ容レテ法律ノ條款ニ因リ之ヲ認定スル時ハ行政官ヲシテ全ク計吏ニ屬セシムルニ至ラン果シテ此ノ如クナル時ハ施政上ニ於テ大ニ爭抗ト錯亂トノ弊ヲ生ス可キナリト（千八百四十一年九月一日ノ「モニトール」新紙ヲ看ヨ）但シジユフール氏著書第二版第二卷第百四十一項ニ揭クル所ノ參事院公判ニ關スル不當ノ駁論ヲ併セ參看ス可シ」

會計法院ハ會計年度內若クハ會計年度ヲ過キタレ𪜈未タ其決算表ヲ確定セサル間ハ官ニ對スル書入質ヲ減少シ若クハ變換セントスル計吏ノ請求ヲ聽クヲ得但シ其減少若クハ變換ヲ許シタル時ハ國庫ノ權利ヲ保存スルニ充分ナル保證ヲ命スルヲ要ス（千八百七年九月十六日ノ法律第十五條）是レ該院ノ判決權ニ伴隨シテ生スルノ權ナリ

會計法院ノ判決權ハ特定ノ一事件ニ限畫セラレ之ヲ一般ニ及ホスヿナシ是ニ因リテ左ノ斷定ヲ下スヲ要ス

第一　決算表ヲ調査スルニ臨ミ會計法院ニ於テ其詐僞及ヒ横歛ニ關スル犯罪ヲ發見スルアルモ自カラ之ヲ處斷スルヲ得ス此場合ニ於テハ其旨ヲ大藏宰相ニ報告シ且ツ司法宰相ニ告發ス可シ司法宰相ハ普通裁判所ヲシテ該犯罪者ヲ糺治セシム（千八百七年九月十六日ノ法律第十六條）

第二　有限相續人（相續シタル財産ニ割合ヒ死者ノ負債ヲ擔任ス可キ者ヲ云フ）（エリチエーベチヒシエール）ノ分限ニ關スル問題及ヒ計吏ノ相續人タル可キ權利ノ拋棄ニ關スル問題ハ普通裁判所ノ判決權ニ屬ス（千八百十五年三月十日シヤロパン件判決）

千八百六十三年一月ノ王勅第十六條ハ幼年者ニ非サル外計吏ノ相續人ナシテ有限相續者ノ分限ヲ有セシムルヲ許サス余ハ民法定マルニ

因リテ右ノ條規ヲ廢止セリト思惟ス何トナレハ民法第千七百七十四條ハ何人ヲ論セス一般ニ普通ノ相續權若クハ有限ノ相續權ヲ饗受スルヲ得ルトナシ未タ嘗テ何レノ特例ヲモ定ムルヿ有ラサレハナリ且ツ計吏ノ財産上ニ於テ國庫ノ有ス可キ權利ニ關スル千八百七年九月五日ノ法律ハ該權利ヲ以テ政府ニ屬スル特權トナスヿ舊王勅ノ如クナラス然ラハ則チ該權ハ已ニ廢止ニ屬セシヲ知ル可シ

會計法院ノ職ハ大藏宰相ノ職ト甚タ相似タリ故ニ往々之ヲ區別スルノ難キヲ覺ユル者アリ夫レ會計法院職掌ノ基礎トナル可キ諸法律ノ明文ハ余已ニ前ノ數項ニ揭出セリ今更ニ大藏宰相ノ職掌ヲ定メタル法令ノ明文ヲ左ニ摘錄セン

第一　千八百八年七月二十日ノ參議院意見書第六項ニ曰ク凡ソ利子ノ請求其他附屬官吏ノ擔掌スル財産上ノ問題ニ關シ行政官トノ間ニ起レル爭訟ハ大藏宰相ノ判決ニ附ス

可シ但シ參議院ニ控訴スルハ此限ニ在ラスト

第二　千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第二十一條第三百二十九條第三百五十一條及ヒ第三百五十六條ニ因レハ已ムヲ得サル情由アリテ官金ヲ盜奪セラレ若クハ之レヲ遺失シタル場合ニ於テハ大藏宰相ノ判決書ニ因リ主監計吏ニ於テ其責任ナシトスル請求ヲ定ム但シ參議院ニ控訴スルハ此限ニ在ラズ

是ニ由テ之ヲ觀レハ大藏宰相ハ計吏相互ノ間例セハ州主計吏及ヒ邑主計吏トノ間ニ分配ス可キ利益ノ增減幷ニ已ムヲ得サル事情アリテ盜賊ニ遇フタル主計吏ヲ以テ責任者トナス可キヤ否ヤヲ判決スルノ權アルナリ而シテ計吏相互ノ間ニ係ル利益分配ノ爭訟ハ更ニ國庫ノ利益ニ關係スル所アラスト雖モ已ムヲ得サル事情アリテ盜賊ニ遇フ

タル計吏責任ノ有無ニ關スル問題ニ就テハ僅ニ決算表ノ條項ヲ調査スルニ止マラス更ニ其所謂ル已ムヲ得サル事情ナル者ヲ監定スルヲ要ス故ニ此場合ニ於テハ行政上ノ調査ヲ行フテ諸案據ヲ蒐集セサル可カラス之ヲ蒐集スルハ會計法院ノ判事ニ於テスルヨリモ却テ大藏宰相ニ於テスルヲ便トス（トロレー氏著書第一卷第百九十三項及ヒ第五卷第五百二十二條第五項シユフール氏著書第二版第二卷第百四十五項ヲ看ヨ）

會計法院ニ於テ各計吏ニ向テ判決ヲ行フ時ハ訟廷公行ノ式ニ從ハスト雖モ毎歳編作スル一般ノ財政報告ハ即チ之ヲ公行ス該財政報告書ナル者ハ大藏宰相ヨリ呈出スル歳出入決算表ト財政略表及ヒ各計吏ヨリ會計法院ニ呈出スル決算表ニ係ル判決書ト相符合スルヿヲ據憑スル者ナリ（千八百二十六年七月九日ノ王勅第六條千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第四百三十八條）又會計法院ハ總會議ヲ開キテ前會計年度ノ確定ナル景況ヲ指示スル報告書ヲ編

作ス（同上ノ王勅第七條及ヒ同上ノ詔書第二百四十二條）凡ソ是等ノ報告書ノ類ハ千八百七年ノ法律ニ從ヘハ之ヲ印行セサルヲ例トスレ𪜈千八百三十二年四月二十一日ノ法律第十五條ニハ却テ之ヲ印行シテ上下兩議院ニ分配ス可シト定メタリ蓋シ前ニ註記シタル詔書第四百四十四條ニ從フ時ハ右ノ兩報告書ハ會計法院ニ於テ調査シタル一年間幷ニ毎會計年度間ニ於ケル財政上ノ事實ト政府官吏ヨリ上下兩院ニ呈出シタル一年間及ヒ毎會計年度ノ決算表ニ揭クル事實ト相符合スルヿヲ定ムルヲ旨トセリ是故ニ會計法院ナル者ハ一般ノ財務ヲ檢査スルノ務メニ任シ上下兩院幷ニ政府ヲ助ケテ財政ノ監督ヲ行フヲ必須スル者ナリ立法官ハ所謂ル會計法院報告書ニ依リテ以テ毎歳ノ出入豫算表ヲ議定シ及ヒ毎歳ノ出入決算表ヲ確認ス（ドーザフレー氏著佛國會計法論第一卷第三百九十二葉以下ヲ看ヨ）

政府ハ高價ナル動産ノ持主ナリ千八百四十三年ノ調査ニ因レハ陸海

軍宰相局ノミニシテ政府ニ屬スル動産ノ價格ハ殆ト十億「フラン」ニ近シ然レトモ法律上未タ嘗テ是等動産ヲ監理スル行政官ヲシテ會計法院ノ監督ニ屬スルノ條項ヲ定メサルカ故ニ海陸軍宰相カ議院ニ對スル責任ヲシテ稍〻効ナキ者トナサシメタリ是ヲ以テ會計法ノ申報委員ハ議院ニ向テ屢〻此不便ヲ陳述シタリ千八百四十年度ノ決算表ノ調査ニ任セシ下議院委員ハ爲メニ一修正説ヲ建議セリ他日定メテ千八百四十三年六月六日ノ法律第十四條トナシタル者即チ是ナリ該條ニ曰ク物件ニ關スル決算表ハ會計法院ノ監督ニ屬ス但シ行政定規ノ程式ニ從ヒタル王勅ヲ以テ該監督權ノ性質及ヒ其監督方法ヲ定メ併セテ各官衙ニ於テ政府ニ屬スル物品ノ監理方法ヲ立ツ可シ而シテ該王勅ハ千八百四十五年一月一日ヨリ執行ノ力アル者トス可シト

右ノ原則ヲ實際ニ施行スルニ臨テ大ニ障碍ヲ生シタリ今此原則ニ從フ時ハ如何シテ會計法院ノ監督權ト軍事上ノ規律トヲシテ竝ヒ行ハシムルヲ得ルヤ蓋シ陸軍幷ニ海軍ニ屬スル動産ハ大抵上長官ニ隷屬スル官吏ニ委任スル者ナリ該官吏ハ規律上ニ於テ一ニ其上長官ノ命令ヲ遵踐シテ敢テ違フ所アルヲ得ス而シテ該上長官ハ各皆ナ海陸軍宰相ニ隷屬セリ是故ニ海陸軍所屬物品ニ係ル下等官吏ノ處分ヲ監督スルハ即チ其上長官及ヒ陸海軍宰相ノ責任ニ係ル者ヲ監督スル者ニシテ焉ソ之ヲ以テ會計法院設立ノ主意ニ違ヒ該院ヲシテ行政官ノ所爲ニ關與セシムル者ト云ハサルヲ得ンヤ前項ニ徴引シタル千八百四十三年ノ法律第十四條ニ因リテ定ム可キ王勅ハ右ノ難題ヲ分解シテ以テ會計法院ノ監督權ト行政官吏ノ行爲ノ自由トヲシテ竝ヒ行ハシムルニ在リ而シテ千八百四十四年八月二十六日ノ王勅ハ則チ之カ爲メニ發スル者ナリ該王勅ニ從ヘハ會計法院ハ海陸軍所屬物品ニ係ル各

決算表ノ調査ニ從事シ報告手續ニ依準シテ該決算表ヲ確定ス可シ而シテ該報告ノ副本ヲ拂渡指令官タル宰相ニ送致シ宰相ハ更ニ之ヲ計吏ニ通照ス可シ次テ該宰相ハ右ノ報告書ト右ノ計吏ノ注意書トヲ照閲シテ其決算表ヲ確定ス可キナリ（千八百四十四年八月二十六日ノ王勅第十條）

政府ニ屬スル物品ニ係ル會計法ノ細則ハ千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第八百六十一條以下ニ就テ參看ス可シ所謂ル物品ニ係ル會計法トハ第一、消費物幷ニ變形物、第二永遠不動若クハ時々增減ヲ生スル諸般ノ有價物ニ關スル監理法ヲ定ムル者是ナリ（同上ノ詔書第八百六十二條）但シ署局兵營書庫古物館等ニ供ヘ附ケタル政府所屬ノ動產ノ如キ永遠不動ノ有價物ノ監理ニ係ル者ハ會計法院ノ監督ニ屬セス（同上詔書第八百七十七條及ヒ第八百十八條）

海軍ニ屬スル諸供給物ノ每歲景況表ハ亦會計法院ノ報告書ヲ以テ之ヲ監督シ歲出入豫算表ヲ確定スル法律ヲ以テ之ヲ認定ス可シ（千八百五十年三月八日ノ法律第十四條）

千八百五十四年十一月三十日ノ詔書ニ因リ確定ノ判決ヲ經タル金錢幷ニ物品ニ關スル決算表幷ニ其證憑書類ヲシテ廢棄ニ屬セシム可キ期限ヲ定メタリ

第三章　控訴ノ手續方法

（提要）第千四百三十八　主計吏ニ於テ其決算表ヲ呈出スルノ義務

第千四百三十九　邑主計吏ノ決算表ニ關スル參事院判決書ヲ送達スルノ方法

第千四百四十　是等參事院判決書ヲ會計法院ニ控訴スルノ期限及ヒ程式

第千四百四十一　會計法院ハ先ツ控訴ヲ受理ス可キヤ否ヤヲ

判決ス

第千四百四十二　控訴ヲ受理ス可カラスト判決スル時ハ如何

第千四百四十三　下調ハ文憑ニ因リ之ヲ行フ○下調ニ從事スル官吏ハ何レノ官吏ナリヤ且ツ何レノ程式ニ從テ之ヲ行フヤ

第千四百四十四　會計法院評事ノ報告書及ヒ同院判事ノ報告書○會計法院ニ於テ訟廷公行ノ法ヲ行ハサルハ實ニ缺點ト云ハサル可カラス

第千四百四十五　豫定ノ判決及ヒ確定ノ判決

第千四百四十六　判決書ノ程式○判決書ニ附シタル必須執行ノ効力

第千四百四十七　會計法院ハ判決ノ權ヲ固有セリ而シテ其判

決ハ終審ノ者トス

第千四百四十八　控訴方法○第一、再審

第千四百四十九　會計法院ノ目代長ハ何レノ場合ニ於テ再審ノ訴ヲ爲ス可キヤ

第千四百五十　定期限内ニ再審ノ願書ヲ出スヿヲ怠タリタル者ハ重テ之ヲ請求スルヲ得ス

第千四百五十一　第二、破毀○破毀上告ハ參議院ニ對シテ之ヲ行フ○破毀上告ヲ爲ス可キ場合

第千四百五十二　參議院ニ上告スルノ期限ヲ經過セシムルニハ何レノ程式ニ從テ會計法院ノ判決書ヲ送達ス可キヤ○此問題ニ就キ議論紛々

第千四百五十三　破毀上告ヲ爲ス者アル場合ニ於テ參議院ハ

會計法院ニ代テ自カラ本案ノ審理ニ從事スルヲ得ルヤ

第千四百五十四　參議院ニ破毀上告ヲ爲スカ爲メニ會計法院ノ原判決執行ヲ停止セス

第千四百五十五　會計法院ノ判決ヲ執行スル方法

凡ソ官金ノ出納ニ任スル計吏ハ法例ニ定メタル期限内ニ於テ其決算表ヲ會計法院ノ書記ニ呈出ス可シ若シ之ヲ呈出セス或ハ其呈出ヲ遲引セシ場合ニ於テ會計法院ハ法例ニ依準シ計吏ニ罰金ヲ科シ且ツ之ヲ處刑スルヲ得（千八百七年九月十八日ノ法律第十二條千八百三十七年九月十六日ノ法律第六十八條千八百五十四年八月十二日ノ詔書）

第千四百三十八

會計法院ニ於テ終審裁判所ノ職ヲ行フ可キ場合ニ於テ邑及ヒ諸計吏ハ其決算表ニ關スル參事院ノ始審判決書ヲ會計法院ニ控訴スルヲ得（千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第五百三十條）但シ邑幷ニ施濟舍ノ計吏決算表ニ關スル參事院判決書ヲ送達スルノ程式及ヒ期限ト該判決書ヲ控訴スルノ手續トハ千八百三十年十二月二十八日ノ王勅及ヒ千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第五百三十一條以下ニ詳カナリ

第千四百三十九

右ノ詔勅ニ因リ參事院ノ判決書ハ邑長ヨリ當該計吏ニ送達ス可シ此場合ニ於テハ該計吏ヨリ出セル領收證書ト該計吏ニ交附シタル判決書副本ノ端ニ邑長署名シ且ツ之ヲ送達セシ日子ヲ記シタル者ヲ以テ送達ノ證ト爲ス右ノ計吏ヨリ出セル領收證書ト共ニ邑廳ニ藏置ス可キ第二副本ニモ亦邑長ノ名ヲ署シ且ツ送達ノ日子ヲ附記ス（同上ノ詔書第五百三十七條）是故ニ邑長ト計吏トハ互ニ行政上ノ程式ニ從テ行フタル判決書送達ノ證據ヲ保有セリ但シ送達ヲ行フタル場合ニ於テ之ヲ領收ス可キ計吏不在ノ時若クハ該計吏ニ於テ其領收證書ヲ出スヿヲ拒ミタル時ハ司法上ノ手續ニ從ヒ使吏ニ依賴シテ判決書ノ送達ヲ行ヒ其費用ハ

該計吏ヲシテ自カラ之ヲ負擔セシム（同上詔書第五百三十三條）

會計法院ニ控訴スルノ期限ハ參事院ノ判決書送達ノ日ヨリ三ヶ月内トス凡ソ控訴セントスル者ハ右ノ期限内ニ二通ノ訴狀ヲ作リ其一通ヲ相手方ニ交附シ之カ領收票ヲ受ク可シ相手方ニ於テ該領收票ヲ渡スヲ拒ミ若クハ其不在ナル時ハ使吏ヲシテ右ノ訴狀ヲ送達セシム又他ノ一通ハ控訴者ヨリ直ニ會計法院ニ呈出シ之ニ參事院判決書ノ副本ヲ附添ス但シ是等ノ書類ハ遲クモ控訴期限滿盡シタル翌月中ニ會計法院ニ到着セシムルヲ要ス（同上詔書第五百三十五條）

右ノ第五百三十五條ニ從ヘハ會計法院ニ控訴ス可キ期限ハ參議院ノ所管ニ屬スル事項ニ係リ該院ニ申訴スル期限ト同一ナリトス（千八百六十七年二月二十二日ノ詔書第十一條ヲ看ヨ）然レトモ會計法院幷ニ參議院ニ出訴スルノ方法ニ於テハ互ニ區別スル所アリトス即チ參議院ニ出訴セントスル時ハ法定

ノ期限内ニ於テ該院ノ書記局ニ訴狀ヲ呈出スルヲ必要トスレトモ（同上詔書第一條）會計法院ニ出訴セントスル時ハ相手方ニ訴狀ヲ送達スルヲ必要トシ其送達ヲ遲引スレハ爲メニ其控訴スルノ權ヲ失フニ至ル可シ（千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第五百三十七條及ヒ千八百三十八年一月十七日マシュエー件判決）且ツ會計法院ニ控訴スル場合ニ於テハ相手方ニ訴狀ヲ送達スル外更ニ又控訴期限滿盡シタル翌月中ニ該院ノ書記局ニ同一ノ訴狀ヲ呈出セサル可カラス（同上詔書第五百三十七條）然レトモ會計法院ハ控訴期限滿盡ノ後ニ至リテモ更ニ其期限ヲ延フルノ許可ヲ與フルノ權ヲ有ス（同上詔書第五百三十七條）

會計法院ハ民事訴訟ニ關シ破毀法院ニ於テ履行スル所ノ方法ニ準シ且ツ千八百六年六月十一日ノ詔書第二十九條及ヒ同年七月二十二日ノ詔書第三條ニ因リ參議院ノ爲メニ定メタル所ノ規則ニ依準シ控訴スル者ヲ受理ス可キヤ否ヤヲ調査スヲ受理ス可シトスル場合ニ於

テハ該院ニ於テ控訴受理ノ判決書ヲ作リ之ヲ被告者ニ送達シ而シテ原告ハ此送達ノ日ヨリ二ケ月ノ期限内ニ於テ決算表ノ辯解書トナル可キ文憑ヲ呈出スルヲ得可シ（千八百三十年十二月二十八日ノ王勅第六十條及ヒ千八百六十二年ノ詔書第五百三十條）此期限ハ共和暦第三年雨月二十八日ノ法律第二章第十一條ニ因リ會計法院ノ判決ヲ受ク可キ諸計吏ニ與ヘタル普通ノ期限トス

控訴期限滿盡シタル翌月中ニ控訴者ヨリ充分ナル文憑ヲ出サヽルニ因リ會計法院ニ於テ其控訴ヲ受理ス可カラサル者トスル時ハ控訴人名簿ニ掲クル該訴件ヲ塗抹ス可シ但シ該控訴ニ關係スル者ノ請ヒニ因リ會計法院ニ於テ第二ノ期限ヲ許可シタル時ハ此限ニ在ラス（千八百六十二年ノ詔書第五百三十七條）其他ノ理由アリテ控訴ヲ受理ス可カラストシタル時モ亦之ヲ却下セラル可シ何レノ場合ヲ論セス一度控訴人名簿ニ於テ塗抹セラレタル訴件ハ再ヒ之ヲ申訴スルヿヲ得ス（同上詔書第五百三十七條）然レ

ヒ千八百三十三年十二月二十八日ノ王勅ニ因リ定メタル程式ヲ履マサルカ爲メニ却下セラレタル者及ヒ三ケ月ノ控訴期限未タ滿盡セサル者ハ特別ナリトス（同上詔書第五百三十八條）是レ普通裁判所ニ於ケル控訴上ノ通則ト相符合スル者ナリ

訴件ノ豫審ハ文書ニ因リ之ヲ行ヒ評事ヲ以テ其職ニ任ス故ニ評事ハ其分擔スル所ノ諸決算表ヲ自カラ調査セサル可カラス（千八百七十九年九月十六日ノ法律第十九條）會計法院ニ於テ訴件豫審ノ爲メニ代言人ノ設ケアラス豫審ヲ行フ場合ニ於テ評事ハ前決算表ニ就キ二冊ノ意見書ヲ作リ其一冊ハ決算表ノ各條項中ニ就キ之ヲ呈出シタル計吏ニ於テ擔當ス可シト認メタル負債ヲ記シ他ノ一冊ハ諸法律ト收入ノ性質トヲ比較スルニ因リテ計吏ノ擔當ス可キ者トナリタル負債ヲ記ス（同上法律第二十條千八百七年九月二十八日ノ詔書第二十四條千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第四百八條）右ノ第二意見書ニハ報告者タル可

キ會計法院判事ノ意見ヲ併セ記シ政府ヲシテ是ニ依リテ以テ一國ノ財政法ヲ改良セシムルノ材料ニ供ス（千八百七年ノ法律第二十九條）此點ヨリ論スル時ハ會計法院ハ案據ヲ蒐集シテ以テ政府ニ啓沃スル者ニシテ其本務トスル判決權ヲ行フ所以ニ非ス右ノ意見書ハ政府ニ於テ毎歳印刷シテ上下兩議院ニ分賦スル所ノ財政改正ノ意見書ヲ作ルニ必要ナル者トス（千八百七年九月十六日ノ法律第二十二條及ヒ千八百三十二年四月二十一日ノ法律第十五條）評事ハ決算表ノ豫審ヲ行フニ當リテ計吏若クハ其代理人ヲ召喚査問スルヲ得凡ソ往復信書ハ評事起草シテ報告事務ヲ擔任スル局長ニ送移ス該局長之ヲ許認スルノ後書記ニ命シテ其送達ヲ行ハシム（同上詔書第二十一條及ヒ千八百六十二年五月三十日ノ詔書第四百九條）

各決算表ハ評事一名ノ調査ニ附シ之ヲシテ其報告案ヲ作ラシム該報告案ハ判事更ニ之ヲ査閲シテ又自カラ第二報告書ヲ作ル（千八百七年ノ詔書第二十八條及ヒ第二十九條千八百六十二年五月三日ノ詔書第四百十二條及ヒ第四百十四條）目代長ハ之ヲ必要トスル場合ニ於テ諸決算表ヲ通閲スルノ權アルハ勿論時トシテハ會計法院ノ各局ヨリ其職權ヲ以テ目代長ニ向テ決算表ヲ通閲スルヲ命スルヲ得（千八百七年ノ詔書第四十二條）

會計法院ノ官吏ハ他ノ行政裁判官ト異ナリテ終身其職ニ任スル者トス獨リ怪ム可キハ該院ニ於テ訟廷公行ノ式ヲ行ハス且ツ原被告カ自身ニ若クハ代言人ニ依頼シテ訟廷ニ出テ口頭辯論ヲ爲スヲ許サヽルヲ是ナリ抑〻決算表ニ係ル判決ヲ行フニ當リテハ眞ノ訴訟上ノ問題ヲ惹キ起スヿ頗ル多シ然ルニ兩造ノ爲メニ訟廷ヲ公行シテ口頭辯論ヲ許サヽルハ果シテ何故ヲヤ今ノ時ハ又國庫ノ財政ヲ秘隱スルヲ必要トスルノ時ニ非ス（ダレシト氏著行政裁判論第百九十四葉）之ヲ舊記ニ徵スルニ昔時ノ會計院ニ於テハ現ニ訟廷ヲ公行シ且ツ其議長ト目代トヲ置ケリ然ルニ之

ヲ廢シテ今ノ會計法院ヲ創設セシヨリ以來決算表ノ監査ヲ行フニ當リ屢〻眞ノ訴訟上ノ問題ヲ生シ且ツ會計法院ノ判決ヲ以テ破毀上告ノ手續ニ從ヒ參議院ニ申訴シ得ルトスルノ法制アルニ拘ラス却テ其訟廷公行ヲ禁シ且ツ爲メニ代言人ヲ置クヲ許サス是レ實ニ今ノ制度ノ缺點ト云フ可キナリ（同上著書第六百六十九葉）

以上ダレスト氏ノ論ハ極メテ其當ヲ得ル者ナリ何レノ官衙ヲ論セス皆ナ訟廷公行ノ式ヲ行フヿヲ嫌忌セサル者ハ非ス然レトモ此式ヲ行フ時ハ却テ官衙ノ威尊ヲ增昂スル者ナリ彼ノ參議院及ヒ參事院ノ實歷ニ徵シテ其理甚タ昭々タリ實ニ參事院ノ如キハ其訟廷公行ノ制ヲ立ツルニ及ンテ頓カニ之カ僚員ノ威力ヲ加ヘタリ故ニ會計法院モ亦訟廷公行ノ式ヲ執行スルニ至ラハ必ス同一ノ良結果ヲ得ルヤ得テ疑フ可カラサルナリ

第千四百四十五

第千四百四十六

會計法院ハ計吏ニ對シ先ツ假リノ判決ヲ行フ該計吏ハ此判決書送達ヲ得テヨリ以來二ケ月間之ヲ調査辯駁シ且ツ必要トスル文憑ヲ會計法院ニ呈出スルヲ得（共和暦第三年雨月二十八日ノ法律第三章第十四條）右ノ期限滿盡スルニ至リ當該ノ評事及ヒ判事ハ計吏ヨリ呈出シタル文憑ニ依リテ報告書ヲ作ル而シテ後會計法院ニ於テ確定ノ判決ヲ行ヒ假判決書ト同一ノ程式ニ從テ之ヲ計吏ニ郵送ス（ハバール氏著覆義第一卷第七百六十一葉第二行ヲ參看ス可シ）

會計法院ノ判決書ハ計吏ニ對シ執行ノ力アル者トス（千八百七年九月十六日ノ法律第十七條）凡ソ該判決書ノ副本ニハ始ニ國君ノ名ヲ記シ其執行ニ助力ス可キヿヲ公力士ニ命スル文言ヲ以テ終結スルヿ猶ホ普通裁判所ヨリ下セル裁判宣告書ノ副本ニ於ケルカコトシ（千八百七年ノ詔書第五十三條及ヒ千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第四百三條）是ニ因リテ之ヲ見レハ會計法院ノ判決書ニ因リテ政府ニ對シテ負債アル計吏ノ不動産上ニ司法上書入質ノ權ヲ生スルヿ普

通裁判所ノ裁判宣告書ニ異ナラサル可シ（民法第二千百二十三條及ヒ千八百十二年三月二十四日）

ノ參議院意見書

會計法院ハ終審ノ判決ヲ下ス可キ上等法衙ナリ而シテ其職トスル所ハ行政訴件ノ一部ヲ判決スルニ止マレヒ固有ノ判決權アル者ニシテ參議院ノ如キ僅々陳議ノ權アルニ止マル者ニ非ス或ル論者ハ參議院ヲシテ會計法院ト同シク不羈獨立ノ者ト爲サントスレヒ然レヒ未タ以テ確當ノ者トス可カラス何トナレハ果シテ論者ノ言ノ如クナルモ會計法院ハ其判決權ノ及フ所僅ニ計吏ノ管理方法ヲ監督シテ其處務ヲシテ統一ナラシムルニ過キサレヒ參議院ハ總テノ行政官ノ不正不當ナル所爲ヲ矯正スルノ重職ヲ有スルニ至ラン是レ之ヲ以テ會計法院ニ準擬シテ論ス可カラストスル所以ナリ今假リニ參議院ヲ以テ此矯正ノ大權ヲ有スル獨立不羈ノ法衙トナス時ハ之ヲシテ却テ國長ヨ

リ重カラシメ隨テ國長ニ屬スル行法權ノ執行ヲ妨碍スルハ勢ノ免カルヘカラサル者ナリ之ヲ千八百四十八年ノ國憲ニ因リテ設立シタル獨立不羈權アル參議院ニ徵シテ其理甚タ明ナリ

會計法院ノ判決書ハ再審及ヒ破毀上告ノ兩臨時手續ヲ以テスルノ外之ヲ覆審ニ附ス可カラス其再審ノ制ハ千八百七年九月十六日ノ法律第十四條ニ因リテ定ムル者ナリ曰ク會計法院ハ決算表ニ關シ確定ノ判決ヲ下シタル後ト雖モ該判決宣告ノ後ニ發見シタル文憑ヲ據トシテ計吏ヨリ請求スル所アルニ因リ又ハ他ノ決算表ヲ調査スルニ因リテ確定判決ヲ經タル該決算表ニ誤脫詐僞若クハ支拂重複等アルカ爲ニ目代長ヨリ請求スル所アルニ因リ又ハ同上ノ事情アリテ會計法院ノ職權ニ因リテ再審ヲ行フヲ得可シト右ノ條規ハ訴訟法第五百四十一條ニ定ムル普通法ヲ適施スル者ニ外ナラス（千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第四百二

十條ヲ看ヨ

法律上再審ヲ行フ可キ期限ヲ定メス故ニ縱令ヒ原判決書送達ノ日ヨリ三ケ月以上ヲ經過スルモ政府ニ於テ負債アル計吏ニ對シ要求ス可キ權アル間若クハ計吏ニ於テ政府ノ爲メニ過當ノ金額ヲ現ニ支辨スル間ハ何時ニテモ再審ノ訴ヲ起スヲ得ルナリ

會計法院附屬目代長ハ國庫若クハ州邑ヲ以テ責任者トス可キ決算表ノ誤脫詐僞若クハ支拂重複ノ爲メニ起シタル再審ノ訴ニ係ル豫審幷ニ判決ニ附キ該院ニ在リテ其務メニ服ス千八百七年九月二十八日ノ詔書第三十九條右ノ條規中國庫ヲ以テ責任者トス可シトスルノ語アルニ因リ目代長ハ計吏ヨリ起セル誤脫改正ノ訴求ニ關シ會計法院ニ對シテ口頭ニテ請求シ必シモ文書ヲ以テスルヲ要セスト斷定セサル可カラス故ニ該計吏ハ目代長ニ於テ文書ヲ以テ請求セサルヲ名トシテ破毀上告ノ訴ヲ起スヲ得ス千八百三十九年六月二十一日エリアル件判決

計吏ニ於テ再審ヲ許セル判決書ヲ得タレ𪜈定期限內ニ憑證文書ヲ會計法院ニ呈出セサルニ因リテ再審ノ訴ヲ却下セラレタル時ハ再ヒ同一ノ訴訟ヲ起スヲ得ス千八百三十三年五月十日エリアル件判決是レ控訴ス可カラサル判決ノ力アリトスル主義ニ適合スル者ナリ

會計法院ノ判決ニ對シテ破毀上告ヲ行フノ手續ハ千八百七年九月十六日ノ法律第十七條ニ因リテ之ヲ定ム該條ニ曰ク凡ソ計吏ニ於テ法定ノ程式若クハ法律ニ背戻スル者トシテ會計法院ノ判決ニ不服ナル計吏ハ其判決書送達ノ日ヨリ三ケ月內ニ於テ行政訴訟手續ノ規則ニ依準シ之ヲ參議院ニ上告ス可シ千八百六年七月二十二日ノ詔書第十一條及ヒ本書第二百九十五項ヲ看ヨ

大藏宰相モ亦同一ノ上告權ヲ有ス同上詔書第十七條千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第四百六十二條右ノ場合ニ於テ大藏宰相ハ參議院ニ上告シテ破毀法院ニ出訴セス何トナレハ會計法院ハ行政部ノ官衙ニシテ司法部ノ官衙ニ非サレハ

ナリ蓋シ會計法院ノ組織幷ニ其訴訟手續ハ概ヲ司法裁判所ノ程式ニ從フト雖モ其判決スル者ニ至リテハ即チ行政訴件ニ屬ス故ニ該判決ニ係ル破毀上告ヲ審理スルノ權ヲ以テ行政訴訟判決ノ全權ヲ有スル所ノ參議院ニ屬ス可キヿ確トシテ疑フ可カラス

弄權若クハ越權ニ係ル會計法院判決ヲ以テ參議院ニ申訴ス可キヿハ前ニ徵引シタル千八百六年七月二十二日ノ詔書第十七條中ニ法定ノ程式若クハ法律ニ背戻スト云ヘル語中ニ含蓄セリ何レノ場合ヲ論セス弄權若クハ越權ニ係ル訴ハ千七百九十年十月七日議決四月十四日公布ノ法律ニ因リテ之ヲ起スヲ得可シ該法律ハ國王ニ與フルニ行政官ノ越權ニ關スル訴訟ヲ判決スルノ權ヲ以テスル者ナリ（本書第二百二十四項以下ヲ看ヨ）

參議院ニ上告ス可キ三ケ月ノ期限ヲ經過セシムルニハ如何ナル程式ニ從テ會計法院ノ判決書ヲ送達スルヲ要スルヤドコルムナン氏ハ何レノ場合ヲ論セス使吏ヲシテ之ヲ訴訟ノ本人若クハ其住所ニ送達セシム可シト爲シ千八百十七年五月十七日及ヒ千八百十九年七月二十八日ノ參議院兩判決書ヲ引キ以テ其說ヲ證セリ（氏著書第五版第一卷第三百三十八葉ヲ看ヨ）蓋シ右ノ二判決書中第一判決書ハ同氏著書第一卷第五十七葉ニ引用シタル千八百十七年五月二十一日コンシヨン件ニ係ル參議院判決書ト同一ノ者ニシテ又千八百十九年七月二十八日ノ判決書ノ理由書中ニ引用セリ第二ノ判決書即チ千八百十九年七月二十八日ノ參議院判決書ハ大藏宰相カ參議院ニ對シテ起セル上告ノ被告タル計吏ニ於テ會計法院附屬目代長ヨリ該宰相ニ該院判決書ノ副本ヲ送達セル日ヨリ三ケ月以上ノ日子ヲ經過シタルニ因リテ該上告ヲ起ス可キノ權アラスト主張セル者ナリ當時參議院ニ於テ該計吏カ上告ヲ起スノ權

アラストスルノ説ヲ容レサリシハ頗ル其道理アリトス何トナレハ千八百七年九月二十八日ノ詔書第三十九條ニ因リ會計法院附屬目代長ヨリ大藏宰相ニ該院判決書ヲ送達セシ者ヲ以テ該宰相ニ對シ破毀上告ヲ促カシタル者ト爲ス可カラス又右送達ノ日ヨリ上告期限ヲ起算シテ以テ計吏ヲ利スルヿ有ル可カラサレハナリ（本書第三百十五項ヲ看ヨ）且ツ參議院ニ統轄セラルヽ諸行政官衙ノ判決書ヲ行政上ノ手續ニテ送達スルモ爲メニ其送達ヲ得タル宰相ニ向テ當日ヨリ其出訴期限ヲ經過セシムルヲ得ス（本書第二百九十七條以下ヲ看ヨ）是ニ因リ之ヲ觀レハ前ニ掲記セル千八百十七年及ヒ千八百十九年ノ兩參議院判決書ヲ引キ政府ニ屬スル上告期限ヲ經過セシメントスル者ハ行政上ノ手續ヲ以テ會計法院判決書ヲ送達ス可カラストスルノ説ヲ立ツルヲ得スエリアル件ニ係ル千八百三十三年五月十日ノ參議院判決書ノ理由書ニ從ヘハ却テ之ト反

對ノ説ヲ主張セサル可カラス該理由書ハ郵便ニテ會計法院判決書ヲ送達スル者ヲ以テ政府ニ屬スル上告期限ヲ經過セシムルノ効力アル者トセリ

然レトモドコルムナン氏ノ説ハ會計法院附屬目代長タルランヂユー氏ノ論ニ基ケル者ナリ氏ハバール氏カ著ハス所ノ法律覆義ト題スル書中ニ擧ケタル會計法院ト稱スル一項ヲ載セタリ該書第一卷第七百六十三葉ニハ千八百六年七月二十二日ノ詔書第十一條及ヒ千八百七年九月十六日ノ法律第十七條ハ出訴期限ヲ經過セシムルカ爲メニスル會計法院判決書送達ノ方法ト參議院ニ統屬スル自餘ノ諸行政官衙判決書送達ノ方法トノ間ニ區別ヲ立テタル者ニ非ストセリ而シテランヂユー氏ハ之ニ附言シテ曰ク是ニ因リ會計法院判決書及ヒ自餘ノ行政官衙判決書ニ係ル送達方法ハ互ニ相同シカラサル可カラス但シ何レ

レノ場合ヲ論セス出訴期限ヲ經過セシメントスレハ使吏ヲシテ之ヲ送達セシムルヲ要スト余ハランヂユー氏ノ論決スル所ノ者ヲ以テ尤モ其當ヲ失セリト思惟ス果シテ會計法院判決書ヲ以テ參議院ニ統屬スル自餘ノ行政官衙判決書ト同一視ス可キヿランヂユー氏カ論スル所ノ如クナレハ政府ノ爲メニ出訴期限ヲ經過セシメントスルニ當リ却テ其送達ヲ使吏ニ依賴スルヲ要セス唯行政上ノ手續ニ從テ之ヲ送達スルヲ以テ足レリトセリト云ハサル可カラス（本書第二百九十七項ヲ以下二百五十九項ヲ看ヨ）

ランヂユー氏ハ法律覆義第七百六十一葉ニ於テ會計法院ノ判決書ハ行政上ノ程式ニ從テ計吏ニ送達スルノ慣例ヲ以テ法律ニ適合スルト爲シテ左ノ言ヲ述ヘタリ曰ク會計法院判決書ノ原本ヲ書記局ニ交附スルノ後該局長ハ前ニ徵引シタル諸法律ニ依準シ直ニ之ヲ計吏ニ郵送スト右ノ如ク判決書ヲ郵送スルノ方法ハ共和曆第三年雨月二十八日ノ法律第二章第十一條第十四條及ヒ共和曆第九年霜月二十九日ノ布令第二條ヲ以テ指定セシ者ナリ千八百七年九月二十八日ノ詔書第二十一條ニハ又書記ヨリ發送シタル往復文書ヲ以テ豫審ヲ行フノ方法ヲ揭記セリ

是ニ因リテ之ヲ觀レハ現行法律上ニ於テ會計法院ノ判決書ハ計吏ニ郵送スル者ヲ以テ適當ノ者トスルヲ得可シ已ニ此行政上ノ手續ニ從ヒタル郵送方法ヲ以テ適法ノ者ト爲セハ隨テ此郵送方法ヲ行フノ日ヨリシテ政府ノ爲メニ參議院ニ上告スルノ期限ヲ起算シテ可ナリト論定スルヲ要ス若シ然ラスシテ判決書ノ送達ヲ使吏ニ依賴ス可シトスル時ハ國庫ノ爲メニ非常ノ費用ヲ要スルニ至ラン然レトモ余ハ敢テ會計法院判決書郵送ノ方法ヲ是認スル者ニ非ス余ハ寧ロ邑ノ財政ニ

關スル參事院判決書送達ノ方法ヲ定メタル千八百六十二年五月三十一日ノ法律第五百三十二條及ヒ第五百三十三條ノ規則ヲ以テ會計法院判決書ニ移用セントヲ欲スルナリ（本書第千四百三十九項ヲ看ヨ）

參議院ハ會計法院ノ判決書ニ係ル破毀上告ヲ審理スルノ職ヲ行フトモ該法院ニハ確定終審ノ判決權アルカ故ニ參議院ハ法定ノ程式ヲ缺キ若クハ法律ニ違反スル會計法院判決ヲ破毀スル場合ニ於テ自カラ該法院ニ代リテ本案ノ判決ヲ行フヲ得ス若シ然カセスシテ參議院ニ於テ本案ノ判決ニ從事スル時ハ千七百九十年十一月二十七日議決十二月一日公布ノ法律第三條ニ因リ破毀法院ニ對シテ命シタル禁制ヲ犯スニ至ル可シ（ハバール氏著法律覆義第一卷第七百六十三葉第五項ヲ看ヨ）

然レトモダローズ氏ハ參議院ニ關スル法律案ノ調書ニ任スル下議院委員ノ名ヲ以テ編作シタル千八百四十年六月十日ノ報告書中ニ於テ右ニ述フル所ト反對ノ說ヲ立テタリ氏曰ク吾等調査委員ハ第一ニ會計法院判決書ニ關シ參議院ニ上告スル者ヲ王勅ニ因リ破毀シタル場合ニ注意セリ蓋シ千八百七年九月十六日ノ法律第十七條及ヒ千八百十九年九月一日ノ王勅ヲ參互考察スレハ右ノ場合ニ於テ參議院ハ會計法院ニ代リテ自カラ本案ノ判決ニ從事スルノ權ヲ有シ又其破毀シタル訴件ヲ以テ會計法院中先キニ判決ヲ行フ者ニ非サル一局ニ回致シテ其判決ヲ行ハシムルノ權ヲ有スルヿ明白疑フ可カラスト余カ前段ニ下ス所ノ見解ハ或ハ誤ナキヲ保セス然レトモダローズ氏カ論據トシテ引用スル法律及ヒ王勅ノ條項ニ因リテ亦余カ主張スル如キノ說ヲ立ツルヲ得可シト思惟ス今暫ラク千八百十九年ノ王勅ノ成文ヲ左ニ寫記セントス而シテダローズ氏ノ論ト余ノ說トノ是非ハ之ヲ讀者ノ判斷ニ委ス可シ

法律ノ程式ヲ缺キ若クハ法律ニ違反スル者ト思惟スル會計法院判決書ニ對シ參議院ニ破毀上告ヲ爲スノ權ヲ以テ計吏幷ニ大藏宰相ニ認メタル千八百七年九月十六日ノ法律第十七條ヲ照閲シ且ツ會計法院判決書ヲ破毀シタル時ハ如何ナル方法ヲ以テ該法院ノ初メニ判決シタル決算表ヲ更ニ判定ス可キヤヲ定ムルノ必要ナルヿヲ熟考シテ左ノ勅書ヲ下ス

第一條

千八百七年九月十六日ノ法律第十七條ニ定ムル塲合ニ於テ會計法院判決書ヲ破毀スルニ因リ其本案ノ判決ヲ該法院ニ回致委任シタル時ハ該法院中先キニ同事件ノ判決ニ關係セサル一局ニ命シテ其判決ヲ行ハシム可シ

第二條

破毀セラレタル事件ノ判決ニ任スル局員中ニ始ニ同事件ノ判決ヲ行ヒタル局ヨリ轉任セシ者アリタル時ハ此轉任者ヲシテ新ニ判決ノ事務ニ預カラシム可カラス但シ必要トスル塲合ニ於テハ拜命ノ順次ヲ逐ヒ他局ノ判事ヲシテ該轉任者ニ代リテ事ヲ執ラシム可シ

第千四百五十四千八百六十二年五月三十一日ノ詔書第四百二十四條第四百二十五條及ヒジュフール氏著書第二卷第百五十七項ヲ看ヨ

第千四百五十五千八百七十年九月十六日ノ法律第十三條ノ公布ノ法律第十六條共和曆第九年霜月二十九日ノ布令第七條千八百七年九月六日ノ法律第一條千八百六年七月二十二日ノ詔書第三條等ヲ看ヨ

會計法院ハ確定終審ノ判決權ヲ有セリ故ニ該院ノ判決書ニ向テ破毀上告ヲ爲ス者アルカ爲メニ其執行ヲ停止セス千七百九十年十一月二十七日議決十二月一日

會計法院ノ判決執行ハ大藏宰相ニ委任シ大藏宰相ハ其屬官タル國庫訟務吏ヲシテ其事ニ當ラシム第千八百七年九月十六日ノ法律第十三條ノ布令第四節共和曆第十一年花月二十八日ノ國庫ニ對シテ送達スル判決書等ヲ收受スルモ亦此訟務吏ヲ職

ナリ（訴訟法第六十九條第二項）凡ソ判決書ヲ執行セントスル時ハ普通裁判所ノ規則ニ依準シテ督促狀ヲ發シ及ヒ物品勾收ヲ行ヒ且ツ千八百三十二年四月十七日ノ法律第八條及ヒ第九條ニ因リ要償ノ勾留ヲ行フヲ得

第五卷　徵兵及ヒ護鄉兵ニ關スル訴件ノ審司及ヒ海軍徵募ニ關スル訴件

第一章　徵兵ニ關スル審理官

（提要）第千四百五十六　徵兵法ノ主意○每歲募兵員ニ關スル法律

第千四百五十七　州縣ノ間ニ徵兵ヲ配當スルノ基礎

第千四百五十八　第三級ノ配當○點檢表○抽籤

第千四百五十九　審理官○審理官ヲ設置シタル主意

第千四百六十　審理官ノ構成○政府ノ目代

第千四百六十一　審理官ノ構成不當ナル時ハ之ヲ以テ不効ノ者トス可キヤ

第千四百六十二　審理官ハ其署衙ヲ一定セサル裁判所ナリ

第千四百六十三　審理官ノ職掌

第千四百六十四　審理官ハ人民ノ身分上ニ關スル事件若クハ人民ノ私權ニ關スル事件ヲ判決スルノ權ナシ之ヲ普通裁判所ニ回致スル事

第千四百六十五　假リノ徵兵代補者ヲ指定スル事

第千四百六十六　審理官訟廷ノ公行

第千四百六十七　審理官ニ於テスル豫審ノ方法

第千四百六十八　審理官ノ判決ハ確定終審ノ者トス

第千四百六十九　法律ニ背ケル審理官ノ判決書ヲ以テ參議院ニ申訴スルヲ得ルヤ

第千四百七十　審理官ノ判決ニシテ越權若クハ弄權ニ涉ル者ハ亦參議院ニ申訴スルヲ得ルヤ

第千四百七十一　法律ヲ誤用スレヒ弄權ト爲ラサルノ例

第千四百七十二　參議院ニ申訴スルノ權ハ誰レニ屬スルヤ○此問題ニ就キ議論紛々

第千四百七十三　審理官ニ於テ法律ニ背ケル判決ヲ行フニ因リテ損害ヲ蒙リタル者ハ唯宰相ニ哀訴スルノ權アルノミ

第千四百七十四　不法ノ徵兵代補ニ關シ普通裁判所ノ權限○奇異ノ結果

第千四百七十五　僞證書若クハ詐僞ノ擧動ニ因テ免役ヲ得タル塲合ニ於テハ如何

國民ニ兵役ヲ課シタル法律ハ護國ノ爲メ尤モ有益ナル稅法ヲ定メタ

ル者ナレヒ現ニ兵役ヲ課セラレタル家眷ノ爲メニハ是レヲ以テ尤モ苦難ナル者トス是故ニ徵兵ノ配當ハ極メテ其公平ヲ得ルヲ期シ免役セラル可キ適當ノ理由アルニ非サル外苟モ之ヲ避クル者ナカラシメ而シテ其正當ノ辯解ヲ爲ス者ハ必ス之ニ與フルニ免役ノ許可ヲ以テスルノ制度ヲ確定スルヲ必要トス是レ立法者カ徵兵法ヲ立ツルニ當リテ其主眼トスル所ノ要條ナリ千八百十五年ノ國憲第十一條ニ於テ徵兵ノ方法ハ法律ニ因テ定ムルヲ以テ國憲上ノ主義トス可シトセシモ亦之カ爲メノミ是ヨリ後千八百三十年十月十六日ノ法律ヲ發布シテ每歲徵募ス可キ海陸軍人ハ上下兩院ニ於テ定ム可シト命令シタリ此條規ハ地稅賦課法ノ効力ハ一ケ年ニ止マルトスル千八百十五年ノ國憲第四十一條ノ條規ト其主義及ヒ其性質ヲ相同シクスル者ナリ陸軍徵兵ノ規則ハ直稅配當ノ規則ニ髣髴セル者ニシテ千八百三十二

年三月二十一日ノ徴兵法律ニ掲クル所ノ條規即チ是ナリ毎歳全國ヨリ募ル可キ兵員ハ募兵員法ト名クル特別法律ニ因リテ之ヲ定ム而シテ徴兵配當ノ方法ハ凡ソ三級ニ分チ第一ニ之ヲ毎州ノ間ニ配當シ第二ニ毎縣ノ間第三ニ一縣内毎募兵員ノ間ニ之ヲ配當ス此毎州幷ニ毎縣ニ募兵ヲ配當スルノ基礎ハ古今其制ヲ一ニセス第一帝國制ノ時ニハ人口ヲ基礎トシテ毎州毎縣ニ配當ス可キ募兵ノ員數ヲ定メタリ（共和曆第十三年葉月八日ノ布令第二條及ヒ第三條）千八百十八年三月十日ノ法律第六條ハ右ノ基礎ヲ準用セリ然ルニ國境ノ州縣ニ於テハ人口表中ニ載スレ𪜈兵役ヲ免レタル外國人多キヲ以テ該邊境ノ州郡ヨリシテ人口ヲ基礎トシテ募兵員ヲ定ムル法律ノ不公平ナルヿヲ訴フニ因リ千八百三十年十二月十一日ノ法律及ヒ其他ノ毎歳募兵員ヲ定ムル法律ヲ以テ他ノ基礎ヲ立ツルヲ許シタリ是ヨリ以後ハ五年乃至十年毎ニ改正シタル人口點

檢表ニ擧ケタル壯丁ノ中數ヲ準トシテ募兵員ヲ配當シタリ千八百三十二年三月二十一日ノ徴兵法ニハ唯募兵員法ニ因リ配當ノ方法ヲ定ムル可シト一言セシノミ千八百三十七年以來ハ徴兵ニ當レル者ノ抽籤名簿ニ掲クル壯丁ノ員數ニ比率シテ州縣ノ間ニ募兵員ヲ配當シ定期限ニ至リテモ其員數ヲ確知スルヲ得サル場合ニ於テハ十年以來徴兵ニ當レル者ノ抽籤名簿ニ擧ケタル壯丁ノ平均數ヲ定メテ以テ其配當ヲ行ヒタリ（千八百三十七年五月八日ノ法律ヲ看ヨ）此時ヨリシテ毎州ニ配當ス可キ募兵員ハ右ノ基礎ニ依準シ詔書ヲ以テ之ヲ定ムル而シテ該配當ノ總表ハ法律全書ニ登錄シ且ツ上下兩院ニ通照ス可シト定ム（千八百六十三年四月十八日ノ法律及ヒ其他ノ毎歳募兵員表ヲ看ヨ）又毎州ニ定メタル募兵員ヲ以テ更ニ毎縣ニ配當セントスル時ハ毎縣ノ抽籤名簿ニ擧ケタル壯丁ノ員數ニ比率シテ之ヲ定ム此毎縣配當表ハ州長、參事院ニ咨詢シテ之ヲ編作シ徴兵審理官カ其

事務ニ着手スル以前ニ之ヲ榜示廣告ス（同上ノ諸法律ヲ看ヨ）

右ノ每州ト每縣トノ間ニ定ムル二級ノ配當法ノ外ニ抽籤法ニ因リ同縣內ノ各徵兵員ノ間ニ定ム可キ第三級ノ配當法アリ是ニ因リ每邑ノ州長ハ壯丁其親屬若クハ其後見人ノ申述ニ因リ或ハ身上證書登簿及ヒ其他ノ文憑ニ從ヒ邑長ノ職權ヲ以テ抽籤シテ兵役ニ服ス可キ每縣壯丁ノ點檢ノ表ヲ作リ之ヲ每邑ニ榜示公布ス（千八百三十二年三月二十一日ノ法律第八條）

但シ郡長ハ一縣內邑長立會ノ席ニ於テ右ノ點檢表ヲ調査シ其改正ス可キ者ハ之ヲ改正シ而シテ後邑長等ノ意見ヲ聞キテ郡長之ヲ確定ス（同上法律第十條）

是ニ於テ始テ抽籤ニ從事スルナリ（同上法律第十二條）

抽籤ヲ終リタレハ徵兵審理官ノ會議ヲ開キ之ヲシテ徵兵手續ヲ檢閱ス因リテ起レル爭訟ヲ聽キ其免役ス可キ者及ヒ減役ス可キ者ヲ判定セシム（同上法律第十五條）

蓋シ徵兵審理官ナル者ハ徵兵事件ニ關シ直稅訴件ノ

判決官タル參事院ノ職ニ髣髴タル務メニ服ス可キ行政裁判官ナリ抑徵兵ニ關スル抽籤ヲ行フ前或ハ現ニ之ヲ行フノ時ニ當リ往々徵兵トナル可キ壯丁ノ權利ヲ損害スルヿアリ是ニ因リ法律上因リテ生スル爭訟ヲ判決ス可キ官衙ヲ設置スルヿ猶ホ直稅配當ニ關スル爭訟ヲ判決スルカ爲メニ參事院ヲ置キタルカコトクセリ而シテ徵兵ハ全ク行政上ノ手續ヲ以テ行フ者ナルカ故ニ是カ爲メニ判決ヲ下ス所ノ者ハ皆ナ行政訴件タルヿ言ヲ待タスシテ明ナリ我國ニ於テ每歲徵募スル所ノ兵員ハ概子八萬人ニ下ラス隨テ爲メニ起レル爭訟ノ數モ極メテ多ク一歲中徵兵審理官ノ判決ヲ受クル者十七萬五千以上ニ及ヘリ故ニ諸裁判所中未タ嘗テ徵兵審理官ノ如キ許多ノ判決ヲ行フ者ハ有ラサルナリ

凡ソ必要トスル場合ニ於テハ每州ニ徵兵審理官ヲ設ケ左ノ人員ヲ以

テ之ヲ構成ス

一 徴兵審理官ノ議長タル可キ州長但シ州長不在ノ時ハ其委任シタル參事官之ニ代ル

一 參事官一名

一 州會議員一名

一 郡會議員一名

以上三名ハ皆ナ州長ノ指定スル者トス

一 皇帝ノ指定シタル將官若クハ士官一名

以上ノ構成方法ハ文官ト武官トヲ參互シタル者ナレ𪜈文官ノ數ヲシテ却テ武官ノ數ヨリモ多カラシメタル者ハ以テ人民ノ權利ヲ充分ニ保護センカ爲メナリ蓋シ文官ハ親シク兵事ニ關係セサルカ故ニ現任武官ヨリモ其處置尤モ公平ヲ得ル者トス凡ソ徴兵審理官ニ於テ調査

判決ノ務メニ從事スル時ハ陸軍會計監督一名之ニ參會シ何時ニテモ先ツ請フテ其意見ヲ述ヘ且ツ審理官ノ決議錄ニ己レノ意見ヲ登錄セシムルヲ得千八百三十二年三月二十一日ノ法律第十五條是故ニ該會計監督ハ政府目代ノ職ヲ行ヒ主トシテ陸軍宰相局ノ利益ヲ保護スルニ任スル者ナリ

前項ニ掲ケシ如ク審理官ノ僚員ハ五名ヲ以テ成レ𪜈實際上ニ於テハ參事官ヲ加ヘスシテ之ヲ四名トスルヿアリ此ノ如キ構成方法ヲ以テ不當ト思惟ス故ニ此場合ニ於テハ弄權ニ係ル者トシテ之ヲ參議院ニ申訴シテ可ナル可シ何トナレハ裁判所ノ構成ニ關スル程式ハ極メテ重要ニシテ移動ス可カラス敢テ或ハ法律ノ定ムル所ニ從ハサル者アラハ何レノ裁判所ヲ論セス皆ナ弄權者ト爲ス可ケレハナリ加之ナラス右ノ如ク僚員五名ノ中一名ヲ廢シテ四名ト爲シタル時ハ判決ニ從事ス可キ者ヲ以テ偶數トナラシメ隨テ論議等分スルニ當リテ其決ヲ議

長ニ取リ勢之カ權力ヲシテ過重ナラシムルノ弊ヲ避クル能ハス此ノ如キハ徵兵審理官ノ僚員ヲ以テ奇數ト定メタル法律ノ主意ニ反背スル者ナリ然レトモ嘗テ右ノ問題ニ關シ參議院ニ申訴スル者アルニ當リ該院聽訟務課ハ左ノ理由ヲ述テ偶數ヲ以テ構成シタル徵兵審理官ヲ弄權者トスルノ訴ヲ却下シタリ即チ該理由書ニ曰ク法律上徵兵審理官ハ五名ヲ以テ構成ス可シトスレトモ該五名ノ者悉ク列席スル所ニ於テ判決スル者ニ限リ適法ノ者トスルノ明文ナキヿヲ考察シ云々ト（千八百五十二年八月十三日ラザーユ件判決）右ノ參議院判決ハ當時ノ目代長ノ請求ニ從ハサルノミナラス且ツ公行ノ訟廷ニ於テ宣告シタル者ニ非ス余ハ斷然該判決ヲ指シテ法律ノ條規ニ違ヘル者ト云ハント欲ス（本書第三十項第四百七十項ヲ看ヨ）

徵兵審理官ナル者ハ各縣ニ移轉シテ開廷スル者ニシテ常ニ其所ヲ定

メス然レトモ地方ノ狀況ニ從ヒ州長ハ數縣ノ事務ヲ一所ニ集メ審理官ノ調査判決ニ附スルヲ得可シ又郡長若クハ之ニ代リテ抽籤ノ事務ニ關係スル官吏ハ審理官カ本郡內ニ於テ開ケル會議ニ出席シテ陳議ノ權ヲ有スル者トス（千八百三十二年三月二十一日ノ法律第十五條）

徵兵審理官ハ左ノ事項ヲ判決スルヲ職トス

第一　法律ニ因リ定メタル免役ノ原由○是ニ因リ審理官ハ合格ノ軀身ヲ有セス又ハ兵役ニ不適當ナル疾病アリ其他千八百三十二年三月二十一日ノ法律ニ因リ免役ス可キ原由ニ關スル爭訟ヲ判決ス但シ免役ヲ命スル場合ニ於テハ他ノ壯丁ヲ以テ之ヲ充補シ爲メニ徵兵ノ員數ヲ少フスルヲ得ス（同上法律第十三條及ヒ第十五條第一節ヲ看ヨ）

第二　減役ノ原由○減役トハ現ニ其役ニ服セサル壯丁ヲ以テ徵募ニ應シタル者ト看做シ之カ代補タル可キ者ヲ命セサルノ謂ナリ

例ヘハ義勇兵ニ編入シタル者、海兵トナリタル者其他千八百三十二年三月二十一日ノ法律第十四條ニ特記スル者ノ類是ナリ（同上法律第十五條第一節ヲ看ヨ）是等ノ壯丁ト同時ニ徵兵員タル可キ者ハ爲メニ苦情ヲ唱フルヿアル可カラス

第三　徵兵番號ノ變換及ヒ徵兵代補ノ請求（同上法律第十七條）凡ソ法律ニ特定スル要款ニ從フニアラサレハ此變換及ヒ代補ノ許可ヲ受クルヲ得ス（同上法律第十八條以下及ヒ千八百五十五年四月二十六日ノ法律第十條）徵兵審理官ハ變換及ヒ代補ヲ求ムル者ニ於テ是等法定ノ要款ヲ充行セシヤ否ヤヲ調査判決ス

第四　徵兵審理官ハ徵兵執行ニ因リテ生スル諸爭訟ヲ判決ス（千八百三十二年三月二十一日ノ法律第十五條第一節及ヒ第二十八條第一節）然レトモ是等數條ニ因リテ審理官ニ與ヘタル職權ト左ニ擧ケタル同上法律第十二條第三節ノ條規ヲシテ並ヒ行ハレテ抵牾セシムルナキヲ要ス該條第三節ニ曰ク抽籤ヲ行ヒ終リタル時ハ之ヲ確定ノ者トシ如何ナル辭アルモ再ヒ抽籤ニ從事スルヲ得ス故ニ各徵兵員ヲシテ各其當籤ノ番號ヲ變更セシム可カラスト

第五　徵兵審理官ハ其審理事務ヲ終結シタル日ヨリ十日內ニ陸軍會計局ヨリ代役納金ノ領收書ヲ呈出スルニ因リ代役ニ關スル請求ヲ判決スヒ（千八百五十五年四月二十六日ノ法律第七條及千八百五十六年一月九日ノ詔書第四十條）右ノ審理官判決ハ亦確定不變ノ者トス（同上法律第四十條第三節）

第六　徵兵審理官ハ千八百三十二年三月二十一日ノ法律ニ定ムル所ニ依準シテ千八百五十二年四月二十六日ノ法律第十條ニ因リ許可シタル兄弟、義兄弟、叔姪及ヒ從兄弟ノ中ニ代補服役ヲ求ムル訴訟ヲ判決ス（千八百五十六年一月九日ノ詔書ヒ第七十條ヲ看ヨ）蓋シ此條規ハ千

八百五十五年四月二十六日ノ法律第十條ノ成規アルニ因リテ生セシ者ナリ該第十條ニ曰ク兄弟義兄弟及ヒ第四等親迄ノ親屬ニ係ル者ヲ除ク外千八百三十二年三月二十一日ノ法律ニ因リテ定メタル代補服役ノ方法ヲ廢止ス但シ同上法律ニ因リ許可シタル番號變換ノ制ハ舊ニ依リ保存ス可シト

徵兵審理官ハ法律ニ明記シタル事項ニ係ル者ノ外判決スルノ權ナシトス故ニ各箇人ノ身分上若クハ其私權ヲ享有ス可キヤ否ヤニ關スル爭訟ヲ判決スルハ普通民事裁判所ノ職權ニ屬シ審理官ノ關與ス可キ者ニ非ス夫レ普通裁判所ハ終身其職ニ任スル官吏ヲ以テ構成シ其判決ヲ行フ可キ程式ニ至リテモ甚タ鄭重ナル者トス故ニ身分上ニ關スル一切ノ訴件ヲ以テ該裁判所ノ判決權ニ屬シ以テ人民ノ權利ヲ保護シタルナリ是レニ因リ千八百三十二年三月二十一日ノ法律第二條ニ

凡ソ佛國人タラサル者ハ本國ノ軍隊ニ編入使役スルヲ許サスト定ムルヲ以テ之ヲ據トシテ同上法律ノ同條第二節ニ掲錄セサル外國人中ヨリ免役ヲ求ムルヿアリ此場合ニ際シ徵兵審理官ハ暫ラク之ヲ免役ス可キヤ否ヤノ判決ヲ停止シ先ツ普通裁判所ヲシテ現ニ免役ヲ求ムル者ノ內國人タルヤ將タ外國人タルヤヲ判定セシム可シ其他人民ノ身分若クハ其私權ニ關スル司法上ノ問題如何ニ因リテ免役ノ許否ヲ判定ス可キ者ハ皆ナ同上ノ例ニ準シテ處分ス可シ（千八百三十二年三月二十一日ノ法律）

第二十六條

參議院ニ於テ左ノ如キ判決ヲ下セシモ亦是レカ爲メナリ曰ク兩縣ノ徵兵點檢表ニ登錄セラレタル者ハ其何レニ屬ス可キヤヲ搜索ス可キ時ニ當リ陸軍宰相ハ豫メ普通裁判所ヲシテ本人ノ住所ヲ以テ甲乙兩縣ノ中何レノ者トス可キヤノ問題ヲ定メシメタル後ニ非サレハ該

件ニ係ル爭訟ヲ判決スルヿヲ得スト千八百四十八年六月二十三日ミユレー件千八百二十六年二月二十六日バシテー件

同上ノ問題ニ關シテハ訴者ノ相手方タル州長出席ノ場所ニ於テ對理ノ判決ヲ行フ千八百三十二年三月二十一日ノ法律第二十六條第二節蓋シ州長ハ政府ニ代リ兵役ヲ回避セシカ爲メニ行ハントスル姦計ヲ擊破セサル可カラス故ニ同上ノ法制ヲ定メ所謂ル行政官ヲ以テ一切ノ租稅ニ關スル爭訟ノ相手方ト定メタル主義ヲ此ニ適施シタルナリ但シ此場合ニ於テ普通裁判所ハ檢察官ノ說ヲ聞キ成ル可ク至急ニ判決ヲ行ヒ爲メニ控訴スルアルヲ許サス同上法律第二節十六條第三節然レトモ余ハ徵兵ノ住所ニ關スル訴訟ニ於テ州長ヲシテ出廷セシムルノ必要ヲ見サルナリ

本國人タルヤ將タ外國人タルヤノ問題ヲ定ムル權ハ普通裁判所ニ屬スル者ナルヲ以テ徵兵審理官ハ普通裁判所ノ判決ヲ待タスシテ自カラ

出訴スル徵兵員ニ對シ二十日間ニ必要トスル文憑ヲ出ス可シト命シテ其外國人タルヤ將タ本國人タルヤニ關スル事件ヲ判決スルヲ得ス此成規ニ反キ右ノ訴件ヲ否拒シタル審理官ノ判決ハ弄權ニ涉ル者トシテ參議院ヨリ取消サル可シ千八百五十五年七月二十六日マーギユ件判決

凡ソ徵兵審理官ニ於テ司法上ノ問題ニ關スル訴求アルニ因リテ暫ラク其判決ヲ猶豫セサル可カラサル場合ニ於テハ抽籤ノ順序ヲ追ヒ右ノ訴求ヲ爲シタルノ員數ニ相當スル壯丁ヲ指定シテ之カ代補ト爲ス但シ該代補壯丁ハ普通裁判所ノ判決ニ因リ右ノ訴求ヲ爲シタル者ヲ以テ免役ス可キ者ト認メタル場合ニ非サル外徵募スルヿナシ同上法律第二十六條第一節

右ノ條規ハ同上法律第四十一條ニ因リ兵役ニ服ス可カラサル犯罪人トシテ徵兵ヲ裁判所ニ出訴シタル時及ヒ徵兵審理官ニ於テ證憑文書ヲ呈出セシメンカ爲メ若クハ失踪ノ場合ニ於テ猶豫期限ヲ

與ヘタル時ニ適施ス可シ而シテ此猶豫期限ハ二十日ヲ越ユルヲ得ス（同上法律第二十七條）

徵兵審理官ノ職掌ハ兵役減免ヲ訴求スル者ハ勿論抽籤番號ノ順序ヲ追ヒ兵役ヲ減免セラレタル者ニ代リテ徵募セラルヽ者ニ大關係アリトス何トナレハ審理官ノ判決ニ因リ減免ヲ行ヒタル時ハ兵役ノ義務ヲ以テ此代補者ニ負ハシムルニ至ル可ケレハナリ是レニ因リ審理官ハ勉メテ其判決ニ偏頗ナキヲ期セサル可カラス法律上凡ソ兵役減免ニ關スル訴訟ハ公行ノ訟廷ニ於テ判決ス可シト定メタルハ實ニ之カ爲メノミ（同上法律第五條第一節）

徵兵審理官ノ執行ス可キ豫審方法ハ同上法律第十六條ニ定ム該條ニ從ヘハ凡ソ抽籤番號ニ因リ徵募セラル可キ壯丁ハ徵兵審理官ニ於テ之ヲ招集調査シテ其申述スル所ヲ聽受ス是等壯丁中審理官ノ招集ニ

應セス若シハ代人ヲ出サス若シハ其猶豫期限ヲ得サル者ハ皆ナ招集ニ應シテ出頭シタル者ト看做シテ之ヲ處分ス又疾病ノ爲メニ免役ス可キ場合ニ於テハ之ヲ醫師ニ稟議シ其他ノ理由アリテ減免ヲ行フ可キ場合ニ於テハ公正文書ヲ呈出セシメテ判決ヲ行ヒ是等ノ文書ナキ時ハ同縣內ニ住居シテ現ニ其子ヲ徵兵ト爲シタル者三名ノ署名シタル證書ヲ呈出セシム但シ該證書ハ猶ホ兵役減免ヲ求ムル者ノ住居スル邑ノ邑長ニ於テ署名認可ヲ爲ス可シ

一家ノ安全ニ謀レハ每歲執行スル抽籤ニ因リテ徵兵ト爲ル可キ壯丁ノ身位ヲシテ久シク不定ノ者タラサラシムルヲ要ス又一國ノ利益ヲ謀レハ尤モ迅速ニ徵兵事務ヲ確定シテ苟モ軍役ヲ妨碍スルヿナカラシムルヲ要ス是レ法律上徵兵審理官ノ判決ヲ以テ直ニ確定終審ノ者ト定ム可シトセシ所以ナリ（同上法律第十五條）是故ニ徵兵審理官ハ最上等法

衙ニシテ故障申述若クハ控訴手續ニ因リテ其判決セシ者ヲ改正セラルヽヿナキハ獨リ前ノ第二十五條ノ明文ニ因リテ定マルニ非ス該條ヲ第二十八條ニ參互シテ彌〻其然ルヲ明カニス可シ蓋シ該第二十八條ニ從ヘハ徵兵審理官ニ於テ免役減役番號變換及ヒ代補ニ係ル訴求ヲ判決シ且ツ徵兵事務執行ニ因リテ生スル一切ノ訴訟ヲ判決シ終リタレハ更ニ募兵員名簿ヲ確定シテ之ニ署名シ徵募ス可キ兵員ノ姓名ヲ公告ス可キナリ又同上ノ法律第二十六條及ヒ第二十七條ニ因リ支障アル者ニ代リテ徵募セラル可キ壯丁モ亦募兵員名簿ニ登錄セラルルト雖モ直ニ兵役ニ服ス可キ義務ナシトス審理官ハ右ノ募兵員名簿ヲ確定シタル後之ニ登錄セラレサル壯丁ハ決シテ服役ノ義務ナキヿヲ廣告ス此廣告書ハ徵募セラル可キ者ノ末尾ノ番號ヲ指示シテ各邑ニ貼附ス而シテ同上法律第二十七條ニ因リテ與ヘタル猶豫期限滿盡

シ又ハ普通裁判所ニ於テ其第二十六條及ヒ第四十一條ニ因リ判決ヲ行ヒタレハ審理官ハ直ニ訴求者若クハ該訴求者ニ代ル可キ壯丁ニ向テ兵役減免ノ宣告ヲ爲ス但シ審理官ハ番號變換及ヒ代補ノ訴求ニ係ル者ノ外已ニ募兵員名簿ニ登錄セラレタル壯丁ニ對シ後日ニ至リ判決ヲ下スヲ得ス（同上法律第二十八條）

越權弄權若クハ犯法ニ係ル徵兵審理官ノ判決ニ對シ破毀上告ヲ行フヲ得ルヤ此破毀上告トハ參議院ニ對シテ行フ者ニシテ破毀法院ニ對スル者ニアラサルヿ殆ト余カ喋々スルヲ待タス何トナレハ徵兵審理官ナル者ハ行政上ノ訴件ヲ審理スルノ法衙ナルヲ以テ固ヨリ行政部ニ屬シ司法部ト相關係スル所アラサレハナリ是レニ因リテ之ヲ見レハ何レノ場合ヲ論セス徵兵審理官ハ司法裁判所ノ判決ニ係ル控訴ヲ受ク可キ破毀法院ニ屬スルヿアル可カラス該審理官ハ軍法會議（コンセーユ、ド、ゲール）ト自

カラ其性質ヲ異ニセリ軍法會議ハ司法部ニ屬シテ破毀法院ニ統轄セラル、者ナレ𪜈徵兵審理官ハ行政部ニ屬シテ參議院ノ統轄スル所トナルヿ猶ホ會計法院ニ於ケルカコトシ蓋シ現時ノ法律ニ從ヘハ所謂ル越權若クハ弄權ナル者ト犯法ナル者トノ間ニ區別ヲ立テサル可カラス而シテ何レノ法律モ未タ嘗テ犯法ニ係ル上告ヲ爲スヲ許セル明文ナキニ因リ此ノ如キノ徵兵審理官判決ハ參議院ニ上告スルヲ得スト可シ抑此問題ハ千八百十八年三月十日ノ法律ヲ行フノ際ニ於テ已ニ發セシ者ナリ該法律第十三條第六節ハ千八百三十二年三月二十一日ノ法律第二十五條ニ揭クル所ノ者ト其見解ヲ相同シクセリ又千八百三十年七月二十七日ノ參議院意見書ニハ余カ前ニ辯論スル者ト同一ノ判定ヲ下シタリ但シ該參議院意見書ハマカレル氏著行政裁判所論第二百七十二葉ニ揭記ス千八百三十年四月七日ブルヲー件千八百三十一年九月十五日アド及ヒブヂー件千八百四十九年四月二日ダロー件判決等ヲ看ヨ

徵兵審理官判決ノ越權若クハ弄權ニ係ル者ヲ參議院ニ申訴スルノ件ニ關シテハ千八百二十年七月二十七日ノ參議院意見書ニ於テ明言スル所ナシ然レ𪜈同院ノ判決書ニハ之ヲ申訴シ得ルト定メタリ千八百二十九年一月二十一日ブリエール件判決ヲ看ル可シ是レ蓋シ行政官ノ越權ニ關スル訴訟ヲ判決スルノ權ヲ以テ國王ニ與ヘタル千七百九十年十月七日議決十四日公布ノ法律第三項ニ基ケル者ニシテ徵兵ノ件ニ關シテハ法律上別ニ明文アラサレ𪜈亦右ノ舊法ノ主義ニ從ハシムヘシト看做シタルナリ千八百十八年三月十日ノ法律ニ代置シタル千八百三十二年三月二十一日ノ法律モ亦同一ノ主義ヲ採用セリ當時政府ハ法定ノ程式若クハ犯法ニ係レル者ヲ破毀上告スルノ制ヲ置カントシタレ𪜈此建議ハ遂ニ議院ノ採用スル所トナラサルヲ以テ宜ク前ニ引キタル千八百三十二

年ノ法律ニ定ムル區別ヲ立ツ可シ是故ニ徴兵審理官ノ判決ニシテ法律ニ違反シ若クハ法律ヲ誤用スル者ハ參議院ニ申訴スルヲ得スト雖モ其越權若クハ弄權ニ係ル者ハ千七百九十年十月七日議決十四日公布ノ法律ニ從ヒ參議院ニ於テ爲メニ申訴スル者ヲ受理ス可シ然ラハ則チ徴募セラレタル壯丁ヨリ徴兵審理官ニ向テ自カラ外國人ナリト主張スル場合ニ際シ該審理官ニ於テ其外國人タルヤ將タ內國人タルヤノ問題ヲ判決スル時ハ之ヲ弄權ノ所爲ナリトス千八百三十七年五月十八日テルスセ（二件千八百三十八年六月五日非ル件判決）其他ノ弄權ニ關スル場合ニ於テモ亦正ニ同シカル可シ千八百四十二年八月二十六日ミモール件（千八百四十二年八月二十六日バリール件判決）千八百五十六年三月六日）徴兵審理官ニ對シ寡婦ノ長子ナルヲ以テ免役セラル可シト訴求スル者アルニ臨ミ州長ハ之ヲ認メテ私生ノ子ナリト主張スル時ニ當リ審理官ニ於テ右ノ身分上ニ關スル問題ヲ司法裁判所ニ回致判決セシメ

スシテ自カラ之ヲ判定スルヲ以テ弄權ノ所爲トス千八百五十六年十一月二十七日シモニー件判決

最モ必要トスル程式ニ違ヘル徴兵審理官判決ハ弄權ノ者トナルヿアル可シ此場合ニ於テハ之ヲ參議院ニ申訴スルヲ得千八百五十六年三月六日バリール件（判決及ヒ本書第千四百六十一項ヲ看ヨ）

徴兵審理官ニ於テ千八百五十二年三月二十一日ノ法律第十三條第四項ニ因リ寡婦ノ子若クハ七十歳以上ノ父母アル子ニ與フル免役ノ特權ヲ拒ミタル判決ハ其權限ヲ守リテ行フタル者ナルヲ以テ弄權ノ所爲トセス故ニ同上法律第二十四條ニ因リ之ヲ參議院ニ申訴スルモ受理セラル可カラス千八百六十一年五月八日ビュレー件判決

千八百三十二年三月二十一日ノ法律第二十六條ニ因リ普通裁判所ニ回致判決セシム可キ司法上ノ問題ヲ徴兵審理官ニ於テ判決シテ弄權

ニ至リタル時ハ千七百九十年十月七日議決十四日公布ノ法律ニ因リ陸軍宰相若クハ該審理官ニ對シ外國人ナルヲ以テ免役セラル可シト訴求スル者ヨリ之ヲ參議院ニ申訴シ得ルヿ固ヨリ疑ヲ容レス

不當ノ免役ヲ許可スル場合ニ於テ徵募番號ノ順序ヲ退ヒ免役者ニ代リテ服役ス可キ者モ亦參議院ニ申訴スルノ權アル可キ者ノ如シ蓋シ不法ノ免役ヲ許可セス且ツ內國人ヲシテ名ヲ外國人ニ託シテ徵兵法ヲ回避セサラシムルハ之ニ代リテ服役ス可キ者ノ爲メニ大關係アル者トス然ラハ則チ此代役者ヲシテ不法ノ免役ヲ申訴スルヲ得セシメ以テ其當然ノ權利ヲ保護スルハ正理公道ニ合スル者トス本邦ノ法制上撰擧者ニ與フルニ撰擧人名簿ノ改正ヲ訴求スルノ權ヲ以テシタルカ如キモ亦其主旨ヲ相同フセリ千八百五十二年二月二日ノ詔書第十九條此ノ如キ理由アルヲ以テ某論者ハ曰ク本項ニ論スル如キ不法免役ヲ行ヘル場合ニ於テハ之カ代役者ノ利益ヲ損害スルヿ撰擧者ノ被レル損害ノ比ニ非ス故ニ爲メニ申訴スルノ權アルヿ固ヨリ論辯ヲ待タスト千八百四十一年四月十九日ノ下議院ノ討論及ヒ宰相ノミニ申訴ノ權ヲ與ヘントスル該院委員ノ建議ヲ非拒セシ兩事モ亦某論者ノ說ヲ主張スル材料トナル可シ何トナレハ當時下議院ニ於テ徵兵審理官ノ判決犯法ニ係レル場合ニ於テ宰相ノミニ申訴ノ權ヲ與フルヲ見レハ其越權若クハ弄權ニ係ル場合ニ於テ一般ノ被害者ニ申訴ノ權ヲ與ヘタル者ナル可シト推知ス可ケレハナリ

以上或者ノ主張スル所ノ理由ハ極メテ重緊ニシテ力アル者トス然レトモ代役者ヲシテ申訴セシムルノ權ハ千八百三十二年三月二十一日ノ法律ニ因リテ認定スル所ニアラス加之ナラス若シ此申訴權ヲ之ニ與フル時ハ實際上ニ於テ大不便ヲ起サン請フ漸ク其故ヲ辯セン此申訴

ヲ行フコハ如何ナル程式ニ於テシ且ツ何レノ期限ヲ守ル可キヤ且ツ此期限ハ何レノ時ヨリ起算ス可キヤ又此期限ヲ經過セシムルコハ徵兵審理官ノ判決書ヲ送達スルノ式ヲ行フヲ要スルヤ申訴スルニ因リテ徵兵審理官ノ判決ヲ取消シタル時ハ爲メニ如何ナル効驗ヲ生ス可キヤ此時ニ當リ不當ニ免役セラレタル者ニ向テ更ニ服役ヲ命セン歟然レトモ法律上徵兵審理官ノ判決ヲ以テ確定終審ノ者ト定メタリ故ニ一タヒ該審理官ノ判決ヲ經テ免役セラレタル者ハ又服役ヲ命セラルルノ理アル可カラス（千八百三十二年三月二十一日ノ法律第二十五條以下）然ラハ則チ此不法ノ免役ヲ得タル者ニ代リテ服役ス可キ者ニハ設令ヒ申訴シテ徵兵審理官ノ原判決ヲ破毀セシムルモ自カラ役ヲ免ルヲ得サルヤ曰ク否之ヲシテ弄權若クハ越權ノ爲メニ申訴スルノ權ヲ有セシムルヿ或者ノ言ノ如クナレハ原判決破毀ノ場合ニ於テ之ヲ免役ス可キヿ固ヨリ論ナキナリ然レトモ實際上此ノ如クスル時ハ爲メニ兵員ヲ闕キ軍備ヲ薄フスルノ懼アリ何トナレハ法律上不法ノ免役ヲ許シタル徵兵審理官ノ判決ニ不服ナルヲ以テ申訴シタル者ニ代ル可キ兵員ヲ豫定ス可キヿヲ該審理官ニ命セシヿアラサルヲ以テナリ

是等ノ理由アルヲ以テ余ハ不法ノ免役者ニ代テ服役スル者ニ申訴ノ權ナシトセリ或ハ曰ハン判決ノ爲メニ間接ノ損害ヲ被フリタル者ヨリ該判決ニ向テ出訴スルノ權ハ護鄕兵ニ關スル法律ニ因リテ認ムル所ノ大則ナリ故ニ今不法ノ免役者ニ代リテ服役スル者モ亦此權アラサル可カラスト蓋シ或者ノ言ノ如クナレハ法律上其明文アルヲ要ス然ルニ徵兵法ニハ未タ嘗テ此ノ如キ條規ヲ載セス是レニ因リ護鄕兵撰擧法律ニ定ムル者ハ一ノ特例タルニ過キスシテ現ニ判決ニ關係セス且ツ訟廷ニ召喚セラレサル者ハ該判決ニ向テ申訴スルヲ得サルヲ

以テ通則トス可シ夫レ免役セラレタル者ニ代リテ服役ス可キ者ハ該免役者ヨリ申述シタル理由ニ從テ徵兵審理官カ下シタル判決ニ關係アル者トシテ曾テ召喚セラレタルヿナキノミナラス該免役者ノ身分上ニ關スル問題ヲ生スルニ因リテ司法上ノ訴訟手續ヲ履ムヲ要スル場合ニ於テモ亦普通裁判所ニ召喚セラルヽヿナシ何トナレハ此時ニ當リ唯免役ヲ求ムル者ト州長トヲ召喚シテ判決ヲ行フヲ以テ通規トスレハナリ（千八百三十二年三月二十一日ノ法律第二十六條第二節）

余ハ千八百四十一年ニ開キタル下議院ノ論議ヲ據トスル或者ノ說（本項第二節ヲ看ヨ）ニ答テ曰ハン此時ノ論議ハ一身上ノ免役若クハ減役ニ關係アル者ノ出訴權ニ就テ起セル者ニシテ免役若クハ減役者アルカ爲メニ徵募セラル可キ代役者ノ出訴權ニ關係アル者ニアラス而シテ該下議院ニ於テ被害者ヨリ犯法ノ判決ヲ控訴ス可カラスト定メタル條規ハ

今之ヲ代役者ヨリ越權若クハ弄權ニ係ル判決ヲ控訴セントスル場合ニ適施ス可キナリト

徵兵審理官ニ於テ法律ヲ誤用シテ爲メニ當然ナル免役ノ理由ヲ非拒セラレタル者若クハ不當ニ代役ヲ命セラレタル者ニ損害ヲ與ヘタリト雖モ其權限ヲ守リテ判決ヲ行ヒタル時ハ得テ動カス可ラス何トナレハ徵兵審理官ノ判決ハ確定終審ノ權力ヲ有シ敢テ亦變改ス可カラサル者トスレハナリ凡ソ不當ニ服役若クハ代役ヲ命セラレタル者ハ唯陸軍宰相ニ哀訴スルヲ得ルノミ此時該宰相ニ於テ徵兵審理官ノ判決ヲ以テ法律ニ背戾スルヿ明白ナリトスレハ不當ニ服役若クハ代役ヲ命セラレタル者ニ有期ノ免狀ヲ與ヘテ之ヲ其鄉里ニ遣歸ス但シ本書ノ前項ニ論スル場合ニ於テモ之ヲ處分スルヿ亦正ニ此ノ如クナル可シ

千八百三十二年三月二十一日ノ法律第二十五條ニ因リ徴兵審理官ノ判決ハ確定終審ノ者ナルノ謂ハ余已ニ之ヲ辯セリ此條規ハ又同上法律第十七條及ヒ千八百五十五年四月二十六日ノ法律第十條ニ因リ代補ヲ請求スル者アルニ當リテ審理官カ判決ヲ行ヘル場合ニ適施ス可キヤ今此ニ一例ヲ設ケ代補者ハ法律ニ定メタル要款ヲ具備セサレヒ徴兵審理官ニ於テ同上法律第十九條ニ背戻シ詐僞ノ證書ヲ出サス若クハ詐僞ノ行爲ナキ者ニ對シテ其代補ヲ許可セリト假定セヨ此ノ如キノ代補ハ政府ノ代理者タル州長ノ請ニ因リテ取消スヿヲ得ルヤ

ザンソンソンノ控訴院ハ凡ソ法律ノ條規ニ背ケル代補ハ普通裁判所ニ訴出ス可シト定メタル千八百三十二年ノ法律第四十三條アルニ拘ラス是等ノ訴訟ヲ判決スルハ普通裁判所ノ職權ニアラス而シテ該第四十三條ハ專ラ州長ノ行ヒタル代補上ニ關スル程式ヲ闕キタル場合ニ關係シ各箇人ノ身分上ニ關スル問題ハ之ヲ徴兵審理官ノ判決權ニ委ス可シトセリ然レヒ破毀法院ハブザンソンソンノ控訴院ト反對ノ判決ヲ下セリ曰ク凡ソ代補ニ關スル徴兵審理官ノ判決ハ千八百三十二年ノ法律第二十五條ニ定ムル者ノ如ク確定終審ノ力アル者ニアラス故ニ代補ニ關スル反則ヲ判決スルノ權ヲ以テ普通裁判所ニ與ヘタル同上法律第四十三條ハ余カ前ニ引例セシ場合ニモ亦適施ス可キナリト（千八百四十二年五月三日破毀法院裁決）

普通裁判所ニ於テ代補ヲ不當トシテ之ヲ取消シタル時ハ一ケ月内ニ代補セラレタル者ニ服役ヲ命シ若クハ之ヲシテ更ニ他ノ代補者ヲ出サシム可シ（千八百三十二年ノ法律第四十三條）蓋シ前段ニ擧ケタル破毀法院裁決ノ旨ヲ推セハ普通裁判所ハ徴兵審理官カ代補ニ係ル問題ヲ判決セシ場合ニ於テ間接ニ之ヲ變改スルノ權アルナリ是レニ因リ同上法律第十七

條ニ因リ審理官ノ下シタル判決ハ其免役及ヒ減役ノ場合ニ係ル判決ト均シク確定終審ノ力ナクシテ普通裁判所ノ爲メニ取消サルヽヿアル可シ語ヲ代テ之ヲ言ヘハ同上法律第二十五條ハ其第十七條ニ掲クル場合ニ適施ス可カラス故ニ此場合ニ於テハ普通裁判所ヲ以テ代補ニ關スル徵兵審理官判決ノ控訴ヲ受理ス可キ裁判所トスルナリ

輕罪裁判所ハ詐僞ノ證書若クハ詐僞ノ行爲タルヿヲ知ラスシテ徵兵審理官ノ許與シタル徵兵變換及ヒ徵兵代補ヲ取消スノ權アレトモ詐僞ノ證書若クハ行爲ニ因リテ得タル免役ニ關シ同上ノ權ナシトス蓋シ千八百三十二年三月二十一日ノ法律第四十三條ニ定ムル規則ハ有限ノ者ニシテ之ヲ一般ノ場合ニ推シ及ホスヲ得ス（千八百五十四年一月二十一日破毀法院裁決）此ニ註記スル裁決ヲ下スニ先チ檢察官ヨリ呈出セシ請牒ニハ具ニ其理由ヲ說明セリ抑〻何故ニ右ノ第四十三條ノ規則ヲ以テ免役ノ場合ニ適施スルヲ得サルトナレハ凡ソ免役上ノ問題上ニ關シテハ法律上徵兵審理官ニ與フルニ確定終審ノ權ヲ以テシ且ツ行政司法兩權區別ノ大則ニ從ヒ普通裁判所ヲシテ行政官タル審理官ノ確定判決ヲ取消サシムルノ道理アル可カラストスルニ因ル而シテ同條ニ於テ變換及ヒ代補ニ關スル審理官ノ判決ヲ取消スノ權ヲ以テ普通裁判所ニ與ヘタル所以ノ者ハ此場合ニ際シ裁判所ニ於テ如何ナル判決ヲ下スアルモ爲メニ徵兵員ト定ムル本人ヲ變更スルヿナシ然レトモ免役ニ關スル判決ヲ取消シタル時ハ全ク之ト反對ノ結果ヲ生シ闕員ヲ生スルニ非サレハ則チ別ニ代リテ徵兵トナル可キ者ヲ募ラサルヲ得サルニ至ル可シ是ヲ以テ法律上彼此ノ區別ヲ立テタリ破毀法院ニ於テ其從來ノ審例ヲ改メテ更ニ前ニ徵引セシ如キノ裁決ヲ下シタルハ頗ル其理アリトス

然レ𪜈破毀法院ノ新裁決ニ因リ尤モ重要ナル効果ヲ生セリ即チ病ヲ偽リテ免役セラレタル者ハ其刑期滿盡ノ後ニ至リ陸軍宰相ノ命令ニ因リテ軍役ニ服セシメラル可シトスル同上法律第四十一條第三節ハ徵兵審理官ニ於テ免役ノ判決ヲ宣告セサル場合ニ限リ適施ス可キ是レナリ（千八百五十四年九月十五日破毀法院裁決ヲ看ヨ）

第二章　護鄉兵ニ關スル審事

（提要）第千四百七十六　護鄉兵ノ職務ノ性質○其構成

第千四百七十七　護鄉兵ハ其士官ヲ指名セス

第千四百七十八　調査會○其構成

第千四百七十九　調査會ノ職務ハ左ノ二者ニ分ツ○第一判決權

第千四百八十　第二、行政委員

第千四百八十一　護鄉兵ノ職ハ義務ニ屬ス權利ニ因リテ行フ所ノ者ニアラストスルニ因リテ生スル結果

第千四百八十二　調査會ニ於テスル處務ノ程式

第千四百八十三　消防隊ノ職務ハ全ク本人ノ志願ニ因リテ命スル者ナルヤ

第千四百八十四　審事○其源因

第千四百八十五　審事ノ構成方法○其兩職ヲ兼勤ス可カラサル事

第千四百八十六　審事ノ職掌

第千四百八十七　判決ヲ行フニ必要トスル審事ノ員數

第千四百八十八　疾病不具ナルヿヲ據證スル適法ノ方法○此方法ヲ踐守セサル時ハ弄權トスル事

第千四百八十九　審事ハ外國人タルヤ否ヤノ問題及ヒ住所若クハ私權ニ關スル問題ヲ判定スルヲ得ルヤ

第千四百九十　之ヲ判定スルノ權アリトスルノ說

第千四百九十一　審事ハ附帶ノ訴訟トシテ同上ノ問題ヲ判決スレヒ主タル訴訟トシテハ之ヲ判決セス○結果

第千四百九十二　審事ハ兩職兼勤ニ關スル問題ヲ判定スルヿ勿論ナリトス

第千四百九十三　審事ニ於テ判決ヲ行フノ程式○訟廷公行

第千四百九十四　調査會ノ判決ヲ以テ審事ニ控訴ス可カラストスル場合

第千四百九十五　審事ノ判決ハ確定終審ノ者トス

第千四百九十六　審事ノ判決ニ不服ナリトシテ申訴スル手續

○適施

第千四百九十七　消防隊ノ編入ニ適施スル事

第千四百九十八　數審事ヨリ發スル判決互ニ相矛盾スル場合ニ於テ參議院ハ如何カ之ヲ處分ス可キヤ

第千四百九十九　護鄉兵ノ分隊ノ職務ニ關スル法律ノ條規如何

第千五百　護鄉兵ノ規律議會ヲ此ニ揭論セサル理由

千八百十四年ノ國憲第四十六條千八百三十一年三月二十二日ノ法律及ヒ千八百五十一年六月十三日ノ法律ニ因レハ護鄉兵ノ職務ハ惟義務トス可キノミナラス尙ホ其權利ニ關スル者トス然レヒ千八百五十二年一月十一日ノ詔書發布以來ハ偏ニ之ヲ以テ國民ノ義務ニ屬スル者トナシ凡ソ內國人ニシテ二十五歲以上五十歲以下調査會ノ調査ニ

因リテ適當ト認メラレタル者ハ皆ナ護鄉兵ノ役ニ服ス可キナリ同上

詔書第二條ニ因リ政府ト各地方トニ備フ可キ員數ヲ定メ其第三條ニ因リ政府ハ必要トスル各邑ニ護鄉兵ヲ編成シ便宜之ヲ集散ス可シトセリ又其第八條ニ從ヘハ護鄉兵ハ內國人及ヒ民權ヲ享有スル外國人ニシテ調査會ノ許可ヲ得タル者ヲ以テ構成シ一樣ノ號衣ヲ服ス可シト定メタリ

昔時ハ護鄉兵ヲシテ自カラ其士官ヲ指名セシメタレトモ千八百五十二年一月十一日ノ詔書第十一條ニ因リ其權利ヲ之ニ奪ヘリ

調査會ハ行政上及ヒ聽訟務上ニ屬スル職務ヲ兼ネ行フ而シテ其千八百三十二年三月二十一日ノ法律第十條ニ因リ徵兵ノ爲メニスル點檢表ヲ編成若クハ改正ス可キ場合ニ於テハ邑長ノ補佐ヲ受ケテ郡長ノ職ニ髣髴タル務メニ服ス

諸州ニ於テハ各邑ニ巴里府ニ於テハ各區ニ調査會ヲ設置スルヲ得千八百五十一年六月十三日ノ法律第二十一條該調査會ハ護鄉兵ノ士官任命前ニ假リニ每中隊ニ三名每大隊ニ九名ヲ以テ構成シ州長若クハ郡長之ヲ指定ス已ニシテ其士官ヲ任命シタレハ中隊長タル大尉ヲ以テ調査會ノ議長トシ郡長ニ於テ別ニ僚員二名ヲ指定シテ以テ確定ノ調査會ヲ構成ス又每大隊ニ於テハ大隊長ヲ議長トシ該大隊ヲ編成スル各中隊ノ長タル大尉ヲ以テ其調査會ノ僚員ト爲ス但シ大尉ニ代フルニ曹長ヲ以テスルヲ得巴里府ニ於テハ上長將官ノ推擧ニ因リ內務宰相ニ於テ其調査會ノ僚員ヲ指定ス千八百五十二年一月十一日ノ詔書第九條

調査會ノ職掌ハ分テ二ト爲ス其一ハ始審裁判官トシテ執行スル事務ニ係リ該判決ハ之カ終審裁判官タル可キ審事ニ控訴スルヲ得其二ハ郡長州長及ヒ內務宰相ノ監督ヲ受ケ行政委員トシテ執行スル所ノ職

務ニ屬ス而シテ此第一類ノ職掌ハ左ニ開列スル條則ヲ適施スルヲ旨トス

一　政府ノ定メタル員數ニ照シ二十五歳以上五十歳以下ノ佛蘭西人ニシテ千八百五十一年六月十三日ノ法律第八條及ヒ第九條ニ定ムル特例ニ當ラサル者ヲ護鄉兵名簿ニ登錄スルヲ（千八百五十二年一月十一日ノ詔書第二條及ヒ第八條）

一　護鄉兵役ヲ免除スルヲ（千八百三十一年六月十三日ノ法律第八條）

一　除隊ノヲ（同上法律第九條）

一　現ニ公務ニ服スル者及ヒ就役ノ義務ヲ免カル可キ年齡ニ達シタル者ヲ免除スルヲ（同上法律第十五條）

一　有期ノ免役（同上法律第十六條）

一　兩職兼務ヲ禁スルヲ（同上法律第十七條）但シ本條ハ森林監守人ニ適用スルヲ尤モ多シトス（千八百六十一年七月十七日マリエー件判決）

一　民權ヲ享有スル外國人ヲ徵招スルヲ（同上法律第十九條及ヒ千八百五十二年一月十二日ノ詔書第八條）

一　護鄉兵ノ住居スル區內ニ編立シタル步兵中隊中ニ之ヲ編入スルヲ（千八百五十一年六月十三ノ法律第十三條）

一　死去、轉住、疾病、免役、兩職兼務ノ禁及ヒ有期若クハ無期ノ除隊等ノ故ヲ以テ調査會審事及ヒ規律議會（千八百五十一年六月十三日ノ法律第七十五條及ヒ第八十二條）ニ於テ徵兵名簿ヨリ除名ス可シト命シタル者ニ代リテ服役ス可キ現兵ノ供備

調査會ニ屬スル行政上ノ職務ハ凡ソ左ノ如シ

第一　千八百五十一年六月十三日ノ法律第三十四條第二節及ヒ千八百五十二年一月十一日ノ詔書第三條ニ因リ詔書ヲ以テ定メタル

規則ニ從ヒ護郷兵ヲ編成スル事

第二　消防隊ヲ常置セサル地ニ於テ之ヲ編成スルカ爲メニ徴招スヘキ人民及ヒ詔書ニ因リテ豫許ヲ得タル場合ニ於テ砲兵隊、騎兵隊、海軍、海岸守衛兵幷ニ海軍ニ屬スル工兵ヲ編成ス可キ人民ヲ指定スルヿ（千八百五十一年六月十三日ノ法律第三十四條第三節以下及ヒ千八百五十一年九月十五日内務宰相局廻達書ヲ看ヨ）

千八百五十二年一月十一日ノ詔書ニ因リ護郷兵役ノ專ラ義務ニ屬シテ其權利タルノ性質ヲ失ヒタルノ謂ハ余之ヲ前ノ第千四百七十六項ニ述ヘタリ爾來政府ハ護郷兵ノ員數ヲ定メテ各地方ノ用務ニ必要トスル所ノ者ニ限リタルヲ以テ大ニ其數ヲ減シ何レノ州邑ニテモ二十五歳以上五十歳以下ノ人民ヲ擧ケテ悉ク護郷兵ニ編入セシムルヲ要セサルニ至レリ是レニ因リ調査會ハ尤モ護郷兵ノ務メニ適當ナル者ヲ撰選シテ其役ニ服サシムルノ便ヲ得隨テ左ノ二樣ノ結果ヲ生シタリ

第一　爾來復タ後備護郷兵名簿ヲ作ルヲ要セサルヿ設令ヒ該後備護郷兵名簿ヲ作ルモ現ニ編隊セラレサル所ノ二十五歳以上五十歳以下ノ人民ノミヲ以テ之ニ充テ別ニ徴募スルヲ要セサルヿ

第二　何人ヲ論セス護郷兵ニ編入セラレンヿヲ出願スルヲ得ルトスルニ因リ爲メニ其出訴スルノ理ナシ故ニ亦該件ニ關シ調査會ノ下シタル判決ヲ以テ審事ニ控訴スルノ理由アラス但シ徴招セラレテ護郷兵トナル可キ者ハ護郷兵名簿ヨリ其姓名ヲ除去シ若クハ有期ノ免役ヲ得ンヿヲ請求スルヿヲ得而シテ其審事ニ控訴スルノ權ヲ與ヘタルハ特ニ調査會ニ同上ノ請求ヲ非拒シタル場合ニ限ル（千八百五十二年一月二十五日内務宰相局廻達書ヲ看ヨ）

調査會ニ於テス可キ處務ノ程式ハ千八百五十一年六月十三日ノ法律

第三十三條ヲ執行スルカ爲メニ下シタル同年九月五日ノ詔書ニ因テ之ヲ定ム該詔書ニ因レハ凡ソ請求スル所アラントスル者ハ調査會ノ議長ニ呈出シ（第二條）此時該請求者ハ調査會開會ノ日子ノ報知ヲ受ケ自身ニ出廷シ又ハ代人ヲ出ス可シト命セラル可シ（第三條）定日ニ至リ調査會ハ其判決ヲ行フ凡ソ何レノ判決ヲ論セス調査會ノ半數以上出席ノ場ニ於テ下セル者ニアラサレハ無効トス而シテ該判決ハ投票ノ多數ニ因リ論議兩立スル時ハ議長ノ說ニ因リテ其取捨ヲ決ス（第四條）調査會ノ對理判決書ハ之ヲ訴者ニ送達セス但シ其副本ヲ請フ者アレハ之ヲ與フ（第五條）調査會ノ闕席判決ニ向テ故障申述ヲ爲サント欲スル者ハ其送達ヲ得タル日ヨリ五日內ニ於テス可シ然レ𪜈調査會ハ五日內ニ故障申述ヲ爲スヲ得サル確證ヲ得タル場合ニ於テ闕席者ノ爲メニ其故障申述ノ期限ヲ延フルヲ得（第六條）以上數條ノ規則ハ千八百五十二年一月

十一日ノ詔書分布以後ニ至リテモ尙ホ必須執行ス可キ者トス

行政官ニ於テ消防隊ヲ創設スルヲ得ルトスル千八百五十二年一月十一日ノ詔書第三條ヲ定ムルカ爲メニ志願者ヲ以テ該隊ヲ構成ス可シトスル千八百五十一年六月十三日ノ法律第三十四條ヲ廢止セス是故ニ官命ヲ以テ人民ヲ消防隊ニ編入シ且ツ本邑內ニ設クル消防隊ヲ以テ直ニ其護鄉兵ニ充ツル場合ト雖モ本人ノ志願ニ違ヒ之ヲ消防隊名簿ニ登錄スルヲ得ス凡ソ消防隊ハ必ス其志願者ヲ以テ編立セサル可カラス千八百五十三年十二月一日ビヴケーブーセー件同年同月二十二日タイエー件千八百五十四年三月二十二日チベルチニ件同年八月二日フルモン件千八百五十一年十六日デラクロワー件千八百五十五年十二月六日ヘナン件千八百五十七年二月五日ルヌーアル件同年三月六日トランシヤン件同年十二月三日カベル件千八百五十八年八月三日シレー件千八百六十年三月二十二日ヘクリー件判決等ヲ看ヨ

調査會ハ專ラ行政上ノ務メニ服スル者ナリ故ニ其判決ニ向テ控訴セ

ントスル者ハ行政司法兩權區別ノ大則ニ從ヒ之ヲ司法裁判所ニ致スヲ得ス千八百三十一年三月二十二日ノ法律發布前ハ調査會ノ所爲ニ因リテ生スル各箇人ノ諸爭訟ハ郡長ニ於テ邑長ノ意見ヲ問フテ之ヲ判決シ猶ホ不服ナレハ更ニ參事院ニ咨詢決定スヘキ州長ニ控訴スヘシトセリ（千八百十六年七月十七日ノ王勅第三十二條ヲ參看セヨ）然レトモ千八百三十一年ノ新法ハ千八百三十三年ノ革命ニ旺盛ナル自由ノ精神ヲ體貼シテ特別ノ行政法衙ヲ創設シ之ニ任スルニ右ノ諸爭訟ヲ判決スルノ權ヲ以テセリ所謂ル審事ナル者即チ是レナリ凡ソ調査會ヨリ下セル判決ニシテ行政訴件ニ係ル者ハ皆ナ之ヲ該審事ニ控訴ス可キナリ右ノ條規ハ後來續發スル法律ノ爲メニ改廢セラレタルヿナシ（千八百五十一年六月十三日ノ法律第二十條ヲ看ヨ）獨リ審事ノ構成方法ハ千八百五十二年八月十一日ノ詔書第十條ニ因リ稍〻之ヲ修正セリ

右ノ法律第十五條ニ因レハ審事ハ之ヲ每縣ニ設ケ治安裁判官ヲ以テ議長トシ郡長ノ指名シタル者四人ヲ以テ其僚員トス然レトモ巴里府ニ於テハ參謀長ヲ以テ審事官ノ議長ト爲シ其不在ノ時ハ參謀中佐ヲ以テ之ニ代ヘ大隊長四名參謀騎兵隊長二名參謀大尉二名報告騎兵隊長一名副報告大尉書記大尉各〻一名副書記中尉一名ヲ以テ其僚員ト定ム右ノ條規ニ因リテ之ヲ推セハ數縣ヲ以テ成リタル都府ニ於テハ其縣數ニ準スル審事官ヲ置ク可シ千八百五十一年六月十三日ノ法律第二十五條ニ定ムル如ク僅ニ之ヲ一審事官ニ限ルヿヲ得ス（千八百五十五年四月二日コルドム件判決）當時內務宰相ヨリ出セル意見書ニ言フ所ノ者ハ全ク千八百五十二年ノ詔書ノ明文ニ違ヘル者トス是故ニ數縣ヲ以テ成リタル各都府ニ唯〻一ノ審事官ヲ置キタル時ハ之ヲ不法ノ者ト爲シテ其判決ヲ取消ス可シ（前ニ註記セルコルドム件判決ヲ看ヨ）

調査會員ノ職ト審事ノ職トハ兼務ス可カラス千八百五十一年六月十三日ノ法律第三十一條

千八百五十一年六月十三日ノ法律第二十條ニ因リ審事ハ護鄉兵編入ニ關スル調査會ノ判決及ヒ護鄉兵ヲ各隊ニ分配スルヿ幷ニ兵役免除ノ事ニ關スル調査會ノ判決ヲ控訴スル者ヲ受理ス現今ノ制度上ニ於テハ調査會ハ護鄉兵名簿ニ登錄ス可カラスト思量スル者ヲ除名スルノ全權ヲ有スルカ故ニ其除名セラレタル者ヨリ之ヲ該會ニ訴ヘ又ハ審事ニ控訴スルヲ得ス千八百五十二年一月十一日ノ詔書第二條及第八條是レニ因リ千八百三十一年三月二十一日ノ舊法第二十五條ニ因リ自カラ服役スルノ義務ヲ減スルカ爲メニ護鄉兵名簿ニ脫漏スル者ヲ追錄スルノ訴ヲ審事ニ對シテ起スヲ得可キ者モ亦今日ニ至リテハ其權利ヲ失ヒタル者トス可シ千八百四十四年十二月二十三日ジュールダン件千八百五十年四月二日デマルセー件判決ヲ看ヨ

現今ニ至リテハ護鄉兵ヲシテ自カラ其士官ヲ選擧セシムルヿ舊時ノ如

クナラサルニ因リ千八百五十二年一月十一日ノ詔書第十一條此撰擧ヲ行フカ爲メニ定メタル程式ヲ遵守セサル者アルカ爲メニ之ヲ審事ニ控訴スルヿ千八百三十一年三月二十二日ノ法律第五十四條猶ホ存セシ時ノ如クシ又之ヲ參事院ニ出訴スルヿ千八百五十一年ノ法律第四十三條廢止以前ノ如クスルヲ得ス

議長ヲ合セ審事ノ僚員七名以上出席スルニアラサレハ判決ヲ行フヲ得サルトスル千八百五十一年六月十三日ノ法律第二十八條ハ千八百五十二年一月十一日ノ詔書第十條ニ因リ廢止ニ屬ス該第十條ハ每縣ニ審事官ヲ設置シ治安裁判官ヲ以テ其議長トシ外ニ郡長ノ指名シタル僚員四人ヲ以テ之ヲ構成ス可シト定ムル者ナリ是レニ因リ今ノ審事官ノ判決ハ議長ヲ合セ僚員五名出席シテ宣告スルヲ以テ適法ノ者トス千八百五十三年十二月二十二日タイエ件判決但シ右ノ詔書第十條ニ因リ巴里府ニ設置

スル審事官ノ構成ヲ異ニセシヲ以テ僚員五名出席シテ宣告シタル判決ヲ適法ノ者トスルハ特ニ他ノ諸州内ニ設クル審事ノ下セル者ニ限ル可キヿ固ヨリ論ヲ待タス是故ニ巴里府審事官ノ判決ヲ以テ適法ノ者ト爲サシムルニハ少ナクモ其僚員七名以上出席シテ之ヲ宣告セサル可カラス然レモ爲メニ審事官全員ノ出席ヲ必要トセス（千八百六十三年十二月二十四日ドクール件判決）

報告者タル可キ士官不在若クハ故障アル場合ニ於テハ審事官ニ於テ民事幷ニ刑事裁判所ノ爲メニ定メタル法律ノ條規ニ依準シ暫時之ニ代リテ報告者タル可キ者ヲ審事官ノ僚員中ヨリ指定スルモ之ヲ以テ弄權ノ所爲ナリトス可カラス（千八百五十五年八月十二日ラボウス件）

除役ス可キ疾病ノ性質及ヒ其疾病ヲ據證スルノ方法ハ千八百五十一年六月十三日ノ法律第八條ヲ執行スルカ爲メニ作リタル同年九月八

日ノ行政定規ニ從テ定ム可シ故ニ審事ハ右ノ行政定規ニ定ムル方法ニ從テ撿定セスシテ某人民ヲ疾病アル者ト認メテ之ヲ免役スルヲ得ス（千八百五十四年九月十七日ポーヒル件判決）

審事ノ權限ニ關スル定規ノ解釋ニ就キ二三ノ疑點ヲ生シタリ夫レ國會代議士、州邑會議員ノ選擧事件ニ關シ其撰擧權幷ニ被選擧權ヲ有ス可キ分限ヲ判定スルハ普通裁判所ノ當務ニシテ行政官衙ノ關與ス可キ者ニ非サルヿハ余已ニ之ヲ辯セリ（千八百五十二年二月二日ノ詔書第二十二條千八百三十三年六月二十二日ノ法律第五十二條ヲ看ヨ）又徵兵審理官ニ於テ徵兵ノ事務ヲ執行スルニ際シ起レル所ノ外國人タルヤ將タ內國人タルヤノ問題其他徵募ス可キ者ノ身分ニ關スル問題ハ均シク普通裁判所ノ判決權ニ屬スルノ謂モ亦余之ヲ前陳セリ（千八百三十二年三月二十一日ノ法律第二十六條ヲ看ヨ）護鄉兵審事官ニ對シテモ亦是等ト同一樣ノ問題ヲ生スルヿアリ此場合ニ於テ其判決權ヲ以テ

亦普通裁判所ニ委ス可キヤ今二三ノ類例ヲ擧ケテ以テ護鄕兵審事官ニ對シテ此ノ如キ問題ヲ生ス可キ所以ヲ示サン蓋シ法律上民權ヲ享有スル外國人ハ徵招セラレテ護鄕兵ノ役ニ服セシメラルヽアル可シ（千八百五十二年一月一日ノ詔書第八條）而シテ護鄕兵ナル者ハ每邑ニ之ヲ編立シ（千八百五十一年六月十三日ノ法律第二條）各人ヲシテ其本住ヲ有スル地ニ於テ其役ニ服セシム（同上法律第十三條）但シ護鄕兵名簿ニハ年齡二十五歲以上五十歲以下ノ者ヲ登錄スルヲ例トセリ（千八百五十二年一月十一日ノ詔書第二條）此ニ護鄕兵ヲ徵招セントスルニ臨ミ內國人タルヤ將タ外國人タルヤ佛國ニ於テ民權ヲ享有スルヤ否ヤ又ハ徵募者ノ本住若クハ年齡ニ關スル事項ニ就テ爭論ヲ生シタリト假定セヨ此場合ニ於テ審事ハ普通裁判所ニ於テ是等ノ爭點ヲ判決シ終ルマテ徵募者ヲ護鄕兵名簿ニ登錄シ若クハ之ヲ除名スルノ判決ヲ延期ス可キヤ之ヲ延期ス可シトスルノ論者ハ曰ク以上ノ諸問題

ハ皆ナ各箇人ノ身分上ニ關係シ普通法ニ從テ判決ス可キ者ナリ故ニ其判決權ヲ以テ護鄕兵審事ヨリ一層法理ニ審明ナル普通裁判所ニ屬ス可シ且ツ選擧ニ關スル法律及ヒ徵兵ニ關スル法律ニ定メタル條規ニ就テ推論スルモ亦正ニ此ノ如クナラサル可カラスト

是等ノ道理アルニ拘ラス余ハ審事ニ於テ右ノ諸問題ヲ判決スルノ權アリト斷定ス可シト思惟ス請フ漸ク其故ヲ辯セン今夫レ千八百五十一年六月十三日ノ法律及ヒ千八百五十二年一月十三日ノ詔書ヲ反覆スルモ未タ嘗テ是等問題ヲ普通裁判所ニ廻致判決セシム可キヿヲ審事ニ命スル所ノ條項ヲ見ス若シ當時ノ立法者ニシテ其此ノ如クナル可キヿヲ欲セハ必ス之ヲ法律中ニ明記セサル可カラス然ルニ其明文ナキハ所謂ル司法行政兩權區別ノ大則ニ從ヒ普通裁判所ヲシテ敢テ行政官ノ所爲ニ關與スルヲ得サラシメントスルニ在ルヿ豈明白ナラスヤ

千八百二十八年七月二日ノ法律發布以前ニ於テ國會議員選擧人名簿ニ關スル爭訟ヲ以テ參事院幷ニ參議院ノ判決權ニ屬セシ所以ノ者モ亦此兩權區別ノ大則ニ依準セシ者ナリ而シテ是等行政官ニ屬スル判決權ヲ剝奪シテ他ニ與ヘントスル時ハ必ス之ヲ明言スル所ノ法律アラサル可カラス然レトモ護鄕兵ニ關スル事項ニ就テハ一モ此ノ如キノ明文正條ナキカ故ニ行政官ノ所爲ニ因リテ生スル爭訟ハ之カ判決權ヲ其行政官ニ與フ可シトスル原則ニ從ヒ凡ソ審事ノ所爲ニ因リテ生スル訴訟ハ該審事ニ於テ之ヲ判決スルヲ當然トス且ツ護鄕兵徵募ノ事項ニ關シテハ司法官ノ判決ヲ要スルノ道理アラス何トナレハ議員選擧ノ如キ參政ノ大權若クハ兵役ノ如キ大事ニ關スル時ハ法律上充分ナル保護ヲ人民ニ與ヘテ以テ之ヲシテ苟モ官ノ爲メニ制壓セラレサラシムルヲ要スレトモ護鄕兵ノ役務ニ至リテハ此ノ如ク重大ナル

性質ヲ有スル者ニアラス故ニ內國人タルヤ將タ外國人タルヤノ問題及ヒ本住年齡等ニ關スル諸問題判決ノ權ヲ審事ニ奪フテ以テ行政官ノ所爲ノ或ハ橫暴ニ渡ルヲ豫防セスシテ可ナリ是レニ因リ凡ソ是等ノ問題ハ皆ナ正ニ審事ニ於テ判決ス可キナリ（外國人タルヤ否ヤノ問題ニ關スル千八百三十三年二月八日ショペー件千八百四十二年二月十一日ドワン件同年十一月十八日ビギユーエー件同年十二月五日レビストル件判決住所ノ問題ニ關スル千八百四十年七月二十三日ベロメール件同年十一月二十日ラベー件同年四月二十二日ドラバヌーズ件千八百四十八年一月二十八日ドモントリー件判決民權選有ノ問題ニ關スル千八百四十一年二月五日トリクレー件判決等ヲ看ヨ）

且ツ審事ハ附帶ノ訴訟トシテ同上ノ諸問題ヲ判決シ主タル訴訟トシテ之ヲ行フニ非サルヿヲ知ルヲ必要トス是故ニ外國人タルヤ將タ內國人タルヤノ問題若クハ住所ニ關スル等ノ問題ニ就キ審事ヨリ下セル判決ハ專ラ護鄕兵ノ役務ニ關係シテ宣告スル者ニシテ之ヲ以テ一般ノ場合ニ於テ控訴ス可カラサルノ効力ヲ有スル者トス可カラス例

セハ審事ニ出訴シテ自カラ外國人ト稱スレトモ內國人ナリトシテ護鄉兵名簿ニ編入セラレタル者ハ他日徵兵ノ役ヲ免カレンカ爲メニ更ニ出訴シテ其外國人タルヿヲ證言スルヲ得可シ此場合ニ於テハ其外國人タルヿヲ證言スル者ヲ以テ主タル訴訟ノ性質ヲ有スル者トス可クシテ護鄉兵ノ役務ニ關係スル附帶訴訟ノ性質ヲ有スル者トスルヲ得ス故ニ徵兵審理官ハ千八百三十二年三月二十一日ノ法律第二十六條ニ因リ此問題ヲ普通裁判所ニ廻致判決セシメサル可カラス該普通裁判所ハ先キニ護鄉兵審事ニ於テ本人ヲ以テ內國人トナシタル判決ノ爲メニ苟モ拘束セラルヽヿアル可カラス

外國人タルヤ將タ內國人タルヤノ問題及ヒ住所ニ關スル問題ニ就キ護鄉兵審事ノ權限ヲ余カ前ニ論セシ所ノ者ハ護鄉兵ノ職ト公力ヲ請求使用スルノ權ヲ有スル官吏ノ職トヲ兼勤ス可カラストスルノ問題

ニ適用ス可キヿ固ヨリ論ヲ待タス是故ニ治安裁判官千八百三十三年五月三十一日カ邑件判決若クハ森林監守人千八百六十一年七月十七日マリエー件判決ノ代補者ヲ以テ千八百五十一年六月十三日ノ法律第八條及ヒ第九條ニ因リ免役若クハ除役セラル可キ護鄉兵ノ職ヲ兼ス可カラサル職務ヲ行フ者トス可キヤ否ヤヲ判決スルハ審事ノ權ニ屬ス

審事ニ於テ判決執行ノ方法ハ千八百五十一年九月五日ノ詔書ニ因リテ之ヲ定ム凡ソ調査會ノ判決ヲ審事ニ控訴セントスル者ハ對理判決ヲ得タル日若クハ其闕席判決書ノ送達ヲ得タル日ヨリシテ十五日內ニ於テシ又ハ故障申述ヲ爲サヽルニ因リテ闕席判決ヲ以テ確定判決ト爲シタル日ヨリ十五日內ニ於テス可シ調査會ノ判決ヲ控訴シタル時ハ暫ラク其執行ヲ停止ス其控訴狀ハ邑廳ノ書記局ニ呈出シ之カ領收書ヲ受ク但シ州長ヨリ同上ノ控訴ヲ爲ス時ハ直ニ其控訴狀ヲ審事

官ノ議長ニ送ル可シ（同上詔書第八條）邑長ハ審事議長ノ報知ニ因リ開廷ノ日時及ヒ場所ヲ控訴者ニ通告ス而シテ該控訴者ノ出廷期限ハ少ナクモ十日以上ナル可シ（同上詔書第九條）又審事ノ判決書ニハ其判決シタル理由ヲ掲クルノ例ナルカ故ニ（同上詔書第十三條）若シ此程式ヲ闕キタル時ハ之ヲ無効ニ屬ス（千八百五十三年四月十四日アングラト件判決）但シ審事ノ判決ニ對シ更ニ故障ヲ述フルヲ許サス（同上詔書第十四條）

調査會及ヒ審事ノ訟廷ハ幷ニ之ヲ公行ス（同上詔書第十八條）此訟廷公行ノ式ヲ行ヒタルヿハ審事ヨリ下セル判決書ニ明記ス可キヤ將タ法例ニ其明文ナキヲ以テ之ヲ明記セサルモ此式ヲ行ヒタル者ト看做シ若シ之ヲ行ハサル時ハ訴者ヨリ其旨ヲ證告スルヲ得ルトス可キヤ千八百五十九年七月九日ルノアル件ニ係ル參議院判決ハ第二說ヲ取リテ其判決ヲ下シタリ是レ判決上ノ程式ニ關スル原則ニ違ヘル者ナリ但シ同上

詔書ニ因リテ行フ可キ報告及ヒ送達等ハ總テ行政上ノ程式ニ從フ可キ者トス（同上詔書第十九條）

調査會ノ判決書ヲ以テ審事ニ控訴ス可カラサル場合アリ即チ千八百五十一年六月十三日ノ法律第三十四條ニ因リ調査會ニ於テ護鄉兵ノ編立及ヒ特別軍隊ノ編立ニ從事ス可キ場合是レナリ此時ニ當リ調査會ハ行政委員トナリテ行法權ノ規定ス可キ軍隊編成上ノ事務ヲ行フ者トス故ニ同上法律第三十四條ノ末節ニ曰ク是等ノ事項ニ關スル調査會ノ判決ハ審事ニ控訴ス可カラスト是レ參議院ノ舊判決ノ主意ヲ確認シタル者ニ外ナラス（千八百五十一年三月八日ビドー件判決等ヲ看ヨ）（千八百四十九年一月六日ベルトラン件）審事ノ判決ハ終審ナルカ故ニ之ヲ不當ナリトシテ控訴スルヲ得ス例セハ護鄉兵名簿ニ登錄センカ爲メニ訴者ノ寄留地若クハ本住ニ關スル事實ヲ審事ニ於テ判定シタル者ノ類是レナリ凡ソ是等ノ判決ハ控

訴手續ニ從ヒ或ハ破毀上告ノ手續ニ從ヒ之ヲ參議院ニ申訴スルヲ許サス何トナレハ其事實ニ關スル判決ニシテ法律ニ背戻スル者ニアラサルヲ以テナリ（千八百五十七年七月三十日ヘリアク件千八百五十八年十二月二十三日ピカル件千八百五十九年七月九日十四日リスレー件判決等ヲ看ヨ）審事ニ於テ某ノ人民ニ護鄉兵ノ役ヲ命スルヲ以テ極メテ困難ナル義務ヲ負ヒタル者トス可カラストスルノ判決ヲ下シタル場合ニ於テモ亦同シ是レ該審事ニ於テ其權限ヲ守リ事實ノ上ニ就テ判決ヲ行フ者ナリ故ニ之ヲ參議院ニ申訴スルヲ得ス（千八百六十三年十二月二十四日ドクール件判決）凡ソ審事ノ判決ハ其越權弄權若クハ犯法ニ係ル者ヲ除ク外之ヲ參議院ニ申訴スルヲ許サス然レトモ同一人ニ對スル終審ノ判決ニシテ數箇ノ調査會若クハ審事ヨリ下セル者ノ相矛盾スル場合ニ於テハ亦之ヲ參議院ニ申訴スルヲ得（千八百五十一年六月十三日ノ法律第三十條）此條規ヲ立テタルニ因リ審事ノ判決ニ對スル申訴ニ係ル舊法律ニ就テ屢〻起レル難題ヲ斷定スルヲ得タリ右ノ千八百五十一年ノ法律ニ因レハ審事ヲ以テ行政部ニ屬スル官吏ト認メテ其判決ニ對スル破毀上告ヲ參議院ニ致サシメタリ又舊法律ニ因リ其越權若クハ弄權ニ係ル者モ之ヲ該院ニ申訴スルヲ許セリ是レ千七百九十年十月七日議決十四日公布ノ法律ニ定ムル行政訴件ニ關スル普通法ニ從ヒタル者ナリ而シテ審事ヨリ下セル犯法ノ判決ヲ以テ參議院ニ申訴スルヲ得ルト爲シタルハ全ク特別ノ條規ニ係ル是レニ因リ該審事ノ判決ハ徵兵審理官ノ判決ト異ナレル所アルナリ（本書第千四百六十九項ヲ看ヨ）抑〻何故ニ彼此ノ判決ノ間ニ此ノ如キノ區別ヲ立テタルヤトナレハ蓋シ護鄉兵ニ關シテハ犯法ノ判決ヲ申訴スルカ爲メニ其闕員ヲ生スルアルモ大害ナシト雖モ若シ常備軍ニ於テ同樣ノ申訴ヲ爲スカ爲メニ闕員ヲ生スルヿアレハ爲メニ軍

備上ニ影響ヲ及ホスヿ極メテ重大ナル可シトスルニ因ル

左ニ掲クル場合ニ於テハ審事ヲ以テ弄權者トス故ニ其判決ハ參議院ニ於テ取消サル可シ

第一　調査會ノ調査ニ附セサル通常免役ノ請求ヲ直ニ自カラ判決スル時（千八百三十四年十一月十四日ホタン件判決）

第二　調査會ニ於テ護鄉兵ヲ各中隊及ヒ分隊ニ配分スルノ事項ニ關スル出訴ヲ受理スル時（千八百四十年七月三十日ブーグリエー件、千八百四十四年二月二日フレーボスト件）

疾病ノ爲メニ與ヘタル免役ハ有期ノ者ニシテ且ツ廢止ス可キカ故ニ審事ハ前年調査會ノ判決ニ因リ疾病アルヲ以テ除名シタル者ヲ再調査ノ後更ニ之ヲ護鄉兵名簿ニ登錄セシムルヲ得之ヲ以テ弄權ノ所爲ニ係ル者若クハ調査會ノ確定判決ノ權ヲ毀害シタル者トス可カラス（千八百四十八年五月六日バルビエー件判決）但シ本人ノ病況尙ホ前年ニ同シキ時ハ此限ニ

在ラス

前ニ徵引シタル法例ノ條規ヲ犯シタル調査會判決ヲ控訴スル者ハ其何レノ程式ニ從ヒタル者ヲ以テ適法ノ者トス可キヤ例セハ消防隊ハ志願者ニアラサル外之ヲ其名簿ニ編入スルヲ得サルハ余カ本書第千四百八十三項ニ定ムルカ如シ若シ此條規ニ背キ調査會ニ於テ其越權ノ所爲ヲ以テ護鄉兵員ヲ消防隊名簿ニ編入シタル場合ニ於テハ如何ナル控訴方法ニ從フ可キヤ案スルニ此場合ニ於テハ千七百九十年十月七日議決十四日公布ノ法律ニ基キ本書第二百二十四項ニ說明シタル例則ニ從ヒ唯之ヲ弄權ナリトシテ參議院ニ申訴スルノ一法アルノミ（千八百五十四年八月二日フレモン件及ヒロシギヨル件判決等ヲ看ヨ）是故ニ審事ハ本人ノ當務ニ非サルヲ以テ除名センヿヲ求メタル者ヲ强テ砲兵名簿ニ編入シタル調査會ノ判決ニ對スル控訴ヲ判決スルノ權ナシ（千八百五十五年一月二十五日フルニエー

件判決何レノ法律モ未タ嘗テ護鄉兵ヲ砲兵隊ニ編入シタル調査會ノ判決ヲ州長ニ控訴スルヲ許サス是レニ因リ此ノ如キノ訴訟ヲ判決シタル州長ハ弄權者ナリトス（千八百五十七年三月六日タベスヌ件）數箇ノ審事ヨリ下セル終審ノ判決互ニ相矛盾スルカ爲メニ千八百五十一年六月十三日ノ法律第三十條ニ因リ申訴スル者アル場合ニ於テ參議院ハ如何カ之ヲ處分ス可キヤ該院ハ本案ニ就テ是等諸判決書ヲ調査シ其宣告日限ノ前後ニ關セス直ニ認メテ不當ト爲シタル者ヲ取消スノ權アリヤ將タ最後ニ宣告シタル判決ヲ取消ス可キヤ蓋シ互ニ相矛盾スル判決ニ對スル破毀上告方法ハ昔ヨリ存スル者ナリ訴訟法第五百四條ハ唯昔時ノ法律ニ掲クル條規ヲ再掲シテ此破毀方法ヲ認メテ普通法ト爲シタルニ過キス故ニ千七百三十八年六月二十九日ノ條例第六篇第六條ニ曰ク兩箇ノ判決相互ニ矛盾スル時ハ最後ニ宣告シタル判決ヲ措キ最初ニ宣告シタル者ノ程式及ヒ明文ニ從テ直ニ之ヲ執行ス可シト是レ尤モ法理ニ適ヘル者ナリ何トナレハ此最初ニ宣告シタル判決ハ終審確定ノ者ナルヲ以テ控訴ス可カラサル判決ノ力ヲ得タリ故ニ爾後之ニ反對シタル判決アルカ爲メニ其レヲシテ消滅セシム可カラス隨テ此最後ニ下セル反對ノ判決ハ最初ニ下セル判決ニ屬スル所ノ控訴ス可カラサル力ヲ犯シタリトシテ取消サル可ケレハナリ是レニ因テ之ヲ推セハ參議院ハ數箇ノ審事ヨリ宣告シタル判決ニシテ互ニ相矛盾スル者ノ中ニ就キ其最後ニ下セル者ヲ取消サル可カラス其故ハ法律上該判決ヲ以テ普通裁判所ノ判決ト同視シ且ツ參議院ヲ以テ破毀法院ノ職ヲ行フ者ト看做スニ因ル（千八百三十三年四月五日ジメニルドー件千八百三十九年八月二十七日ユロール件千八百四十九年七月三十日ドラグランヂュ件判決等ヲ看ヨ）千八百五十二年一月十一日ノ詔書第一條ニ因レハ護鄉兵ノ職トスル

所概ヲ左ノ如シ

第一　本邑内ニ於テ服ス可キ通常勤務

第二　本邑外ニ於テ服ス可キ分隊勤務

第三　法律ニ定ムル制限ニ從フ可キ常備軍ノ補助勤務

此一項ハ已ニ千八百五十一年六月十三日ノ法律第一條ニ因リテ定マレル者ナレ𪜈千八百五十二年一月十一日ノ詔書第一條ニ於テ更ニ之ヲ掲ケサルヲ以テ今廢止ニ屬スルナリ（パトビー氏著公法及行政法論第四卷第五百四十六葉ヲ看ヨ）是レニ因リ護鄉兵ヲ以テ編成シタル軍隊ニ關スル千八百三十二年四月十八日ノ法律ハ爾後發布セシ法律ニ因リテ廢止ニ屬シ又其第四條ニ因リ設立シタル特別審理官ハ之ヲ今日ニ保存ス可カラサル者ト斷定スルヲ要ス但シ緊急ノ事情アリテ護鄉兵ヲ軍隊ニ使用スルヲ必要トスル時ハ爲メニ新法ヲ制定セサル可カラス

余ハ千八百三十一年六月十三日ノ法律第八十五條以下ニ因リテ設立シタル護鄉兵規律議會ノ事ヲ此ニ掲論セス何トナレハ法律上之ヲ以テ司法裁判所トナシテ行政裁判所ノ部類ニ入レサレハナリ是故ニ該規律議會ノ判決ニシテ越權弄權若クハ犯法ニ係ル者ハ破毀法院ニ上告ス可クシテ之ヲ參議院ニ致スヲ得ス（同上法律第百四條）此點ニ關シ規律議會ハ稍ヽ海陸軍裁判所ト同視ス可キナリ（共和暦第八年風月二十七日ノ法律第二十七條及ヒ千八百五十七年六月九日ノ軍律第八十一條ヲ看ヨ）

第三章　海兵徵募ニ關スル行政訴訟

（提要）第千五百一　水夫徵募ノ舊方法○分級法

第千五百二　海兵徵募（共和暦第四年霧月三日ノ法律）

第千五百三　初メニ制限ヲ命セラレ次テ自由トナリタル職工

第千五百四　舊海兵ノ勤務年限

第千五百五　海兵ノ勤務ヲシテ陸兵ノ勤務ノ如クナラシメタル事○海兵ノ志願編入及ヒ徴募

第千五百六　海兵徴募ノ方法及ヒ其勤務ノ年限

第千五百七　結果○豫備及ヒ後備

第千五百八　海兵免役ノ源由

第千五百九　海兵ノ代補

第千五百十　進級○水夫ニ與フル休暇及ヒ褒賞

第千五百十一　共和暦第四年ノ法律ニ因リ海兵徴募ニ就テ起レル爭訟

第千五百十二　邑官ニ代リテ該爭訟ノ判決ニ任シタル者ハ何レノ官衙ナルヤ

第千五百十三　海兵徴募ニ關スル爭訟判決ノ權ハ海軍區長ニ

屬ス

第千五百十四　募兵ノ身分ニ關シ爭訟ヲ生シタル時ハ如何

余カ前二章ニ於テ陳述シタル諸條則ハ陸兵ト之ヲ援助ス可キ護鄉兵トニ適施ス可キ者ナリ本篇ニ於テハ正ニ海兵ノ勤務ニ關シ同一ノ訴訟ヲ生シタル場合ニ於テ其判決權ヲ何レノ官衙ニ屬ス可キヤヲ講究セントス蓋シ往昔政府ニ於テ水夫ヲ募ラントスル時ハ直ニ港津ヲ閉チ何人ヲ論セス凡ソ航海ニ從事スル者ニ嚴命シテ國王所屬ノ船艦ニ搭載セシメタリ此强迫法ハ古羅馬ノ時ヨリ起レル者ニシテ人民ノ權利ヲ蔑棄シ且ツ其年齡ノ長幼幷ニ從前政府ノ爲メニ使役セシヿアリヤ否ヤヲ問ハスシテ濫リニ徴募スル所ノ不當ナル方法トス爾後ルヰ第十四世ノ時代ニ至リ大ニ海軍ヲシテ强盛ナラシメンヲ計リ遂ニ此不當ナル徴募方法ヲ廢シテ所謂ル分級法ナル者ヲ新定セリ此分級法

ナル者ハ千六百六十五年十二月十七日ノ王勅ニ因リ始メテ之ヲ發令シ千七百八十四年ニ至リ漸ク之ヲ大成セリ即チ海兵徵募ノ細則ヲ規定シタル同年十月三十一日ノ王勅是レナリ

國民議會ハ此分級法ナル者ヲ保存シ共和曆第四年霧月三日ノ法律ニ因テ更ニ其主義ヲ認定シタリ該法律ニ因リ凡ソ海兵名簿ニ登錄セラレタル者ハ必要トスル場合ニ際シ政府ノ軍艦ニ搭載服役スルノ義務アリトス（同上法律第十條）且ツ該法律ハ海兵勤務ニ關スル特別ノ方法ヲ定メ何レノ階級ヲ有スル者ト何レノ職業ニ服スル者トノ別ナク軍艦若クハ商船ニ乘リテ航海スル者及ヒ沿海若クハ大河ニ在テ行航ノ業ニ從事スル者ハ皆ナ之ヲ海兵名簿ニ登錄ス可シトセリ（同上法律第二條）而シテ該海兵ヲ分テ妻ナキ者、妻ヲ失フテ子ナキ者、妻アレトモ子ナキ者及ヒ妻子アル者ノ四等トセリ（同上法律第十五條）又外國人ニ關シテハ陸兵徵募法ト海兵徵募

法トノ間ニ大ニ區別スル所アリ千八百三十二年三月二十一日ノ法律第二條ニ因レハ凡ソ外國人ハ皆ナ陸兵トナルヲ得サレトモ共和曆第八年菓月十四日ノ布令ニ於テハ佛國內ニ寄留スル外國人ニシテ佛蘭西ノ女ヲ娶リテ佛蘭西ノ商船ニ搭載スル航海者ヲ徵募シテ政府ノ軍艦ニ使用ス可シト爲シタリ故ニ是等航海者ハ海兵名簿ニ登錄セラルヽノ義務アリトス

共和曆第四年霧月三日ノ法律第四十四條ニ指定スル職工ハ亦戰時ニ際シ同上ノ法律第十四條第十五條及ヒ十六條ニ定メタル規則ニ依準シ軍備若クハ臨時ノ工事ノ爲メニ徵募セラル可シ千八百八年八月十九日ノ詔書ハ是等海兵ニ徵募セラル可キ職工ヲ制限シテ木工「カルフアーター」（船ノ漏所ヲ塞ク者）「ペルスール」（孔穴ヲ塞ッ者）及ヒ「ボアリエー」（製帆者）ノ四職ニ止メタリ此詔書ハ法律全書中ニ登錄セサレトモ千八百六十三年十月

二十二日ノ詔書ニ關スル海軍宰相ノ申報書中ニ徵引セリ同年同月二十八日

「モニトール」新誌第千二百八十六葉ヲ看ヨ千八百三十二年三月二十一日ノ法律第十四條第二節ニ於テ陸兵ヲ徵募スルカ爲メニ抽籤スルニ際シ減役ス可キ者ヲ以テ右ノ四類ノ職工ニ限リタルハ前ノ千八百八年ノ詔書ニ基キタル者ナリ千八百六十四年六月四日ノ法律ヲ發布スルニ至リ更ニ右ノ四職工ヲシテ皆ナ海兵名簿ニ登錄セラルヽノ義務ヲ免除セシメタリ隨テ千八百三十二年三月二十一日ノ法律第十四條第二節モ合セテ廢止ニ屬セリ爾來右ノ四職工ハ海兵ニ徵募セラルヽノ義務ヲ免カレタルニ因リ其陸兵減役ノ特權ヲ失ヒ自餘ノ人民ト同シク徵兵例ニ因リテ處分セラル可シトセリ

共和曆第四年霧月三日ノ法律ニ因リ凡ソ海兵名簿ニ登錄セラレタル者ハ滿十八歲ヨリ滿五十歲ニ至ルマテ官ヨリ徵募セラルヽアル可

シ同上法律第五條及ヒ第二十五條海兵ニ徵募セラル可キ者ノ年限ハ此ノ如ク長久ナルヲ以テ其終身ノ產業ヲ定メントスルノ時限ヲ妨ケ爲メニ大ニ陸兵ノ勤務ト海兵ノ勤務トノ間ニ權衡ヲ失ヒ難易輕重甚タ相懸隔ナラシムルニ至レリ是レニ因リ千八百六十年十二月三十日千八百六十一年六月二十五日ノ詔書ニ因リテ其弊ヲ矯正シ非常軍備ヲ要スル場合ヲ除ク外詔書ヲ以テスルニアラサレハ政府ノ船艦ニ服役スル一十年以上ノ航海者ヲ徵募ス可カラスト定メタリ千八百六十三年十月二十八日「モニトール」新誌第千二百八十六葉ヲ看ヨ

千八百六十三年十月二十二日ノ詔書ハ尤モ重要ナル條規ヲ定メ海兵ノ勤務ヲシテ愈〻陸兵ノ勤務ト相同シカラシメタリ然レトモ該詔書ハ獨リ海兵名簿ニ登錄セラレタル者ノミニ適施シ之ヲ海軍ニ屬スル職工ニ擬セス新詔書ハ志願者編入ノ約束及ヒ徵募方法ニ從テ海兵ノ勤務

ニ服ス可キ者ヲ徵招スルヿ猶ホ陸兵ニ於ケルカコトクス可シト爲シ其第一篇ニ於テ年齡十六歲以上二十歲以下ノ者ヲシテ四年間見習ノ約束ヲ結ハシメ又十六歲以上二十三歲以下ノ者ヲシテ「アプランチー、マラン」ノ名義ヲ以テ七年間服役スルノ約束ヲ結ハシムルヲ許セリ滿十八歲トナリタル「アプランチー、マラン」ハ乘船ノ後一ケ年ヲ經レハ三等水夫ト爲ス同上詔書第一條及ヒ第四條

同上ノ法律第十一篇ハ海兵志願者ノ員數不足スル場合ニ於テ之ヲ徵募充補スルノ方法ヲ定メタリ是レニ因リ海兵名簿ニ登錄セラレタル所ノ滿二十歲以上ノ者ハ皆ナ海兵ノ勤務ニ徵募使役セラル可シ第七條其勤務ノ年限ハ時ノ事情ニ從テ縮長スルヿアル可ケレトモ少ナクモ三ケ年ヲ以テ一期ト定ムルヲ例トス此第一期ノ勤務ヲ終レハ其水夫ヲ鄉里ニ遣歸ス然レトモ緊急ノ場合ニ於テハ更ニ之ヲ徵招シテ第二期ノ勤務ヲ命スルヲ得以上服務ノ期限ハ古來ヨリノ習慣ナリシカ千八百六十三年ノ詔書ニ於テ此第二期ノ勤務ヲ廢シ海兵トナリタル日ヨリ滿六ケ年服役スル者ハ非常ノ軍備ヲ要スル場合ニ於テ特ニ詔書ヲ下スニアラサル外爾後之ヲ徵招使役スルヲ得ストセリ第八條然レトモ平時ニ於テハ各海兵ヲシテ六ケ年間引續テ服役セシムルヲ必要トセサルニ因リ同詔書ヲ以テ此六ケ年間便宜海兵ニ休暇免狀ヲ附與スルノ制ヲ定メ之ヲシテ其賜暇間自由ニ航海ノ業ニ從事スルヲ得セシメタリ

第八條

右ノ諸條規ニ因リ二十歲ニテ徵募セラレタル海兵ニシテ三年間若クハ四年間政府ノ軍艦ニ使役シ且ツ暫時豫備員トナリタル者ハ二十六歲以後ニ至レハ非常緊急ノ場合ヲ除ク外復タ其本業ヲ離レテ海軍ニ使役セラルヿナカル可シ但シ同上ノ詔書ハ是等ノ海兵ヲ以テ後備

兵トナシテ尙ホ海兵名簿ニ登錄シ非常緊急ノ場合ニ於テ直ニ徵募使役ス可キ者トナシタリ

凡ソ徵募セラレタル海兵ハ免役ヲ求ムルノ權アルヿ猶ホ陸軍徵兵法ニ因リ陸兵ノ爲メニ定メタル所ノコトシ（同上詔書第九條）

同上詔書ハ更ニ海兵ノ爲メニ代補ノ方法ヲ定メタリ此新法ハ久シク輿論ノ企望スル所ニ因リテ定メタル者ナリシカ凡ソ代補者タル可キ海兵ハ志願編入ノ約束ヲ結ヒテ四年間海軍ニ服役シタル者若クハ其他ノ名義ヲ以テ航海ノ業ニ從事シテ多少ノ年限ヲ經タル者ニ限ル可シトスルノ制限ヲ立テタルニ因リ爲メニ弊害ヲ生セサルカ如シ（同上詔書第九條）

同詔書第三篇及ヒ第四篇ハ水夫進級ノ方法及ヒ海兵志願者、海兵ニ再勤スル者若クハ海兵ノ勤務ヲ繼續セントスル者ニ對シ奬勵ノ名義ヲ

以テ與フ可キ賜暇及ヒ褒賞ヲ定メタリ該詔書ハ是等ノ點ニ關シテモ亦陸兵ノ爲メニ定メタル條規ニ依準制定セシ者ノ如シ是レニ因リテ之ヲ見レハ千八百六十三年ノ詔書ニ因リ海兵ノ身位ヲ改良シタルノ効實ニ大ナルヲ知ル可シ蓋シ此改良ハ千八百六十四年七月發兌ノ經濟新聞第六十二葉以下ニ於テ舊海軍士官ドクリシノアー氏カ辯論スル所ニ基キテ行ヒタル者ナリ

余ハ更ニ海兵徵募ノ時ニ起レル訴訟ニ就テ一言スル所アラント欲ス共和曆第四年霧月三日ノ法律ニ因リ此等ノ訴訟判決ノ方法ヲ定ムルヿ左ノ如シ曰ク凡ソ徵募セラレタル海兵ニ於テ出訴スル所アラントスレハ其旨ヲ本人住居スル區內ノ邑官ニ申述ス可シ該邑官ハ海軍區（サンザク）吏ノ陳述スル所ヲ聞キテ其判決ヲ行フ但シ該訴者ヲ以テ海兵ニ徵募セラル可カラサル正當ノ理由アリトスル場合ニ於テハ直ニ之カ代補

者タル者ヲ指定ス可シ（第二十一條）然レトモ海兵名簿公布ノ日ヨリ四日ヲ經レハ何レノ訴訟ヲモ受理ス可カラスト（第二十二條）

前項ニ徵引シタル共和暦第四年霧月三日ノ法律第二十一條ニ掲クル所ノ區ノ邑官ナル者ニ代リテ今日其職ヲ執ル者ハ何レノ官衙ナルヤヲ知ルヲ要ス抑モ共和暦第四年ノ法律ヲ公布セシハ「ジストリク」（縣ト譯ス）ト名クル行政區ヲ廢シ（第三條）且ツ人口五千以下ノ地ニ設クル邑長ヲ止メテ（第百七十四條及第百八十條）區廳ナル者ヲ置キシ所ノヒ（第百七十四條及第百八十條）共和暦第三年菓月五日ノ國憲ヲ行ヒシ時ナリ爾後同第八年雨月二十八日ノ法律ニ因リ更ニ右ノ區廳ヲ廢シ其職ヲ以テ郡長ト邑官トニ分與セリ故ニ該法律第九條ニ曰ク郡長ハ先キニ邑官幷ニ區委員ノ行ヒタル職務ニ服ス可シ但シ次條ニ因リ郡長幷ニ邑官ニ任與シタル職掌ハ此限ニ在テスト然レトモ該法律中邑長ニ與フルニ徵募海兵ヨリ起セル爭訟ヲ判決スルノ權ヲ以テスルノ明條アラス故ニ此權ヲ以テ中央行政官ニ屬シテ新置邑官ノ有ト爲ス可カラスフーカル氏カ其著書第二版第一卷第五百九項ニ於テ同上ノ爭訟判決ノ權ヲ邑長ニ屬ス可シト論シタルハ恐クハ誤解ナル可シ蓋シ氏ハ共和暦第四年霧月三日ノ法律ニ掲クル區ノ邑官ト云ヘル語ノ意義ト此時以來ノ沿革トニ注意セサルカ爲メニ此誤リヲ致シタリ

共和暦第八年雨月二十八日ノ法律ノ明文ニ就テ同上ノ爭訟判決ノ權ヲ邑長ニ與フ可カラサルヲ知ルノミナラス尙ホ且ツ該法律ノ精神ニ基キテ其之アル可カラサルヲ領解ス可シ夫レ海兵徵募及ヒ因リテ生スル爭訟ハ一國ノ公益ニ關シ其事極メテ重大ナル者ナリ法律上豈ニ此ノ如キノ大事ヲ判決スルノ權ヲ以テ僅ニ一村落ノ首長ニ與フルノ理アランヤ且ツ常備陸兵ハ勿論護鄕兵ニ關スル場合ニ於テモ同上ノ

判決權ヲ以テ邑長ニ屬セス然ラハ海兵ニ關シテモ亦之ヲ以テ邑長ノ職ニ屬スヽ可カラサルヿ殆ト辯ヲ待タサル可シ案スルニ千八百三十二年三月二十一日ノ法律ヲ公布スルノ前ハ千八百十六年七月十七日ノ王勅第十三條ニ因リ調査會ノ行爲ニ因リテ生スル爭訟ヲ判決スルノ權ヲ以テ郡長ニ與ヘ之ニ不服ナル時ハ參事院ニ咨詢決定ス可キ州長ニ控訴ス可シトセリ今之ヲ類推シ海兵徵募ニ關スル爭訟ニ關シテモ亦其判決權ヲ以テ中央行政官ニ附ス可キノ道理アリトス

余ハ郡長ヲ以テ共和曆第八年雨月二十八日ノ法律ニ因リ之ニ默許シタル職掌ヲ固有シタル者トシ且ツ現ニ其之ヲ行ヒタルヲ信セス當時政府ハ右ノ法律ヲ公布スルノ後未タ幾許ナラスシテ同年花月七日ノ布令ヲ發セリ該布令ハ海軍區長ナル者ヲ新置シ海軍事務ニ關スル一切ノ行政務ヲ統率セシメタリ（第五條及ヒ第六條ヲ看ヨ）故ニ海兵徵募ニ關スル事

務ハ該區長ニ隸屬スル吏員ノ職掌ト爲レリ（第四十一條）又國長ハ毎歲海軍士官一名若クハ數名ヲ指定シ之ヲシテ航海ノ業ニ從事スル者ヲ點檢セシメ其政府ノ軍艦及ヒ商船ニ屬シテ服役セントスル者ト諸港津ニ在リテ其職ニ就カントスル者トヲ認知スルヲ得（第四十二條）而シテ各海軍區若クハ各海軍小區ニ屬スル部內ニ於テ執行ス可キ海兵ノ登簿及ヒ海軍事務ハ海軍委員局ノ職掌ニ屬セリ（共和曆第八年葉月十四日ノ布令第四條第五條第六條及ヒ千八百三十六年十月十一日ノ王勅第一條ヲ看ヨ）是レニ因リ余ハ海軍委員局ナル者ヲ以テ海兵名簿ヲ編作スルノ權ト徵募セラレタル海兵ヨリ起セル爭訟ヲ假リニ判決スルノ權トヲ兼有スル者ト思惟ス但シ確定判決ノ權ヲ有スル海軍區長ニ控訴スルハ此限ニ在ラス

海兵區內ニ於テ執行ス可キ普通行政務ハ之ヲ各州長ト海軍區長トニ分任スルヿ猶ホ巴里府ニ於テ其行政務ヲセーヌ州長ト警察總監ト

ニ分任スルカコトシ蓋シ海軍區長ハ軍務ニ屬スル一切事件ノ行政長官ニシテ海軍宰相ニ直隷シ其職ヲ行フノ千八百二十八年十二月十七日王勅第二條第四條及ヒ第五條看ヨ千八百六十三年十月二十二日ノ詔書第十條ハ右ニ註記スル王勅ノ諸條則チ確認セシ者ノ如シ該第十條ニ曰ク前條ニ定ムル場合ヲ除ク外海軍區長若クハ海軍課長ノ建議ニ因リ海軍宰相ノ特許アルニアラサレハ決シテ海兵ノ徴募ヲ延期スルヲ得スト

海兵ノ登簿及ヒ其徴招ニ關スル爭訟ハ行政訴件ナルヲ以テ凡ソ爲メニ下セル海軍區長ノ判決ハ先ツ海軍宰相ニ控訴シ之ニ不服ナレハ更ニ參議院ニ申訴ス可シト云ハサル可カラス

海軍區長ハ訴者ノ身分ニ關スル問題ヲ以テ普通裁判所ニ回致判決セシム可キヤ例セハ海兵委員ニ於テ共和曆第八年葉月十四日ノ布令ニ因リ外國人ナレ𪜈佛蘭西人ヲ妻トシ且ツ佛蘭西ノ商船ニ搭載シテ使役セラルヽニ因リ之ヲ海兵名簿ニ登錄スルニ當リ該外國人ハ佛蘭西人ヲ妻トセシヿナシト主張シ又ハ海兵委員ニ於テ未タ妻アラスシテ自カラ外國人ナリト申述スル者ヲ認メテ佛蘭西人ナリトシテ海兵名簿ニ登錄セリト假定セヨ是等ノ場合ニ於テ海軍區長ハ自カラ其訴訟ヲ判決スルヲ得ルヤ將タ其訴者ヲ普通裁判所ニ回致ス可キヤ案スルニ其出訴スル所ノ者ヲ以テ稍ヽ根據アリトシ且ツ海兵名簿ニ其姓名ヲ登錄セラレントスルノ時ニ際シテ此訴ヲ起セハ宜ク之ヲ普通裁判所ニ回致判決セシムヘキカ如シ然レ𪜈已ニ海兵名簿ニ登錄シタル者ヲシテ進軍セシメントスル時ニ臨テ其訴ヲ起ス者ハ海軍區長ニ於テ直ニ其判決ヲ行フ可シ蓋シ第一ノ場合ニ係ル訴者ハ未タ海兵名簿ニ登錄セラレサルヲ以テ尚ホ其身ノ自由權ヲ有セリ之ヲ聽カスシテ直ニ其姓名ヲ海軍名簿ニ登錄スル時ハ現ニ海兵ノ役ヲ免カル可キ

者ヲシテ強テ之ヲ服役セシムルノ弊アリ況ヤ其訴訟ノ性質ハ婚姻若クハ內國人タルヤ將タ外國人タルヤノ如キ普通裁判所ノ管轄ニ屬ス可キ者ナルヲヤ千八百三十二年三月二十一日ノ法律第二十六條ニ從ヒ又同一ノ議論ヲ主張スルヲ得而シテ共和曆第四年霧月三日ノ法律第二十一條ハ法ニ適シテ海兵名簿ニ登錄セラレタル者ヨリ爭訟ヲ起セル場合ニ限リテ定メタル者トス前ニ援引セシ第二ノ場合ハ即チ此第二十二條ノ明文ニ適當スル者ナリ此時ニ當リ海兵ハ其海兵名簿ニ登錄セラレタルヿニ就キ苟モ異議スル所ナクシテ現ニ其位置ニ相應スル利益ヲ得タル者トス故ニ自カラ出訴シテ免役ヲ求ムルノ權ヲ有スルヲ得ス本書第千四百八十九項以下ヲ看ヨ

第六卷　學區會　學務州會　大學議會及ヒ文部宰相

第一章　學區會及ヒ學務州會

第一款　學區會

(提要)第千五百十五　教育ニ關スル法例ノ錯雜ナルヿ

第千五百十六　大學ノ源由○昔時ノ學區會ノ構成

第千五百十七　大學ニ屬スル專占權ノ制限及ヒ廢止

第千五百十八、千八百五十年三月十五日ノ法律ニ因リテ定メタル自由教育ノ組織○八十六學區

第千五百十九　同上ノ法律ニ因リテ定メタル學區會ノ構成

第千五百二十　學區ヲ減シテ十六ト爲ス○其理由

第千五百二十一　現今學區會ノ構成

第千五百二十二　學區會職掌ノ要綱○學區會ノ職掌ヲ三類ニ分ツ

第千五百二十三　學區會ニ屬スル聽訟務若クハ懲戒事務ノ性

質

第千五百二十四　千八百五十二年三月九日ノ詔書ニ因リ學區會ニ屬スル懲戒事務ノ一部ヲ廢止ス

第千五百二十五甲　千八百五十四年六月十四日ノ法律ニ因リ學區會ニ與ヘタル權○學區會ハ今猶ホ判決權ヲ有スルヤ否ヤノ問題ニ就キ議論紛々

第千五百二十五乙　千八百五十年ノ法律ニ因リ高等教員ニ對シ學區會ノ行フ可キ懲戒上ノ職務

第千五百二十六　學區會ニ於テ踐守ス可キ程式○第一普通教育上ノ義務○第二聽訟務○第三懲戒事務

第千五百二十七　訟廷ヲ公行セサルヿ○議決ヲ行フニ必要トスル人員

第千五百二十八　督學ハ懲戒事務ヲ評議スルノ席ニ出會スルヲ得ルヤ

第千五百二十九　學區會ノ聽訟務上ノ判決若クハ懲戒上ノ判決ヲ控訴スルヲ得

第千五百三十　是等判決ニ對シテ故障申述ヲ爲スヲ得ス

第千五百三十一　弄權ノ判決ニ對スル申訴○千八百五十年ノ法律ニ因リテ行フタル終審ノ判決

行政法ヲ彙類シテ恰モ民法刑法ノ如クナラシメンヿヲ希望スル者頗ル多シ然レモ之ヲ實行スルヿノ甚ダ難キハ僅ニ行政法ノ一枝派ニ過キサル教育上ノ組織方法ヲ編成スルヿ能ハサルヲ見テ之ヲ知ル可シ蓋シ教育上ニ關スル法律詔勅條例幷ニ布令ノ如ク錯雜ヲ極ムル者ハ非ス是等舊法律詔勅及ヒ條例ノ條規ハ新法律詔勅及ヒ條例ノ條規ニ

抵觸スル者ノ外皆ナ廢止ニ屬セシ者トス可カラス故ニ之ヲ彙類シテ敎育成典ヲ編成セントスル時ハ無數ノ法例中ニ就キ其廢止ニ屬スル條規ヲ削リテ獨リ其尙ホ存スル者ヲ再錄スルノ勞ヲ取ラサル可カラス而シテ其法例ノ主意錯雜極マリナキヲ以テ尤モ敎育ノ事務ニ通明ナル者ニアラサレハ其此ノ如キニ至レル理由ヲ解スル能ハス余敎育上ノ法例ヲ研究スルヿ茲ニ四十有六年ノ星霜ヲ積メ未タ其要領ヲ得ス何レノ法例ト雖モ未タ嘗テ此ノ如ク相抵觸矛盾スル者ハアラス且ツ其改廢頻數ナルヲ以テ余カ本書第一版ニ於テ論述セシ所ノ者ハ今全ク徒勞ニ屬セリ何トナレハ此第一版ヲ發兌セシ以來敎育上ノ法例悉ク改マリ殆ト舊體ヲ存スル者ナキニ至リタレハナリ之ヲ地質學ニ譬ヘハ新地層ヲ生セシカ爲メニ舊地層ハ全ク廢滅シテ又其舊體ヲ見サルカ如シ先キニ千八百三十二年二月三日ノ王勅ニ因リ特ニ委員ヲ命シテ敎育上ノ法律及ヒ條例ヲ調査セシメシカ已遂ニ其効ヲ奏セス爾來歲月ヲ空過スルヿ三十有三年益其紛糾錯雜ヲ加フルヲ覺ユルノミ

大學ハ千八百六年五月十日ノ法律ニ因リテ創立スル者ナリ即チ其第一條ニ曰ク特ニ全國ノ敎育事務ヲ管理スル官衙ヲ置キ帝國大學ト稱ス可シト而シテ大學ノ組織方法ハ千八百八年三月十七日及ヒ千八百十一年十一月十五日ノ詔書ニ因リテ之ヲ定ム此詔書ハ爾後法律ノ力ヲ得タルヿ當時公領セシ自餘ノ詔書ニ於ケルカ如シ蓋シ千八百八年三月十七日ノ詔書ニ因レハ大學ハ全國控訴院ノ數ニ均シキ學區ヲ以テ構成シ（第四條）每學區ノ治所ニハ大學總監カ學區內ノ官吏中ヨリ指定シタル僚員十名ヲ以テ成リタル議會ヲ設ク（第八十五條）是レ全國ノ敎育權ヲ專占シ（第一條）及ヒ其許可ナケレハ總テノ學校ヲ開設セシメサル大學

ノ性質ニ適合スル者ナリ第二條

右ノ大學ニ屬スル專占權ハ千八百三十年ノ國憲第六十九條ニ因リテ剝奪セラレタリ曰ク左ニ開列スル事項ニ關スル者ハ成ル可ク至急ニ特別法ヲ以テ規定ス可シ第八項教育及ヒ教育ノ自由云々ト是レニ因リ千八百三十三年六月二十八日ノ法律ニ因リ自由教育ノ主義ニ基キテ小學教育法ヲ立テタリ然レトモ國王、ルヰ、ヒリップ統御ノ間ハ中學幷ニ大學ノ爲メニ同主義ノ法律ヲ制定スルヿナクシテ終レリ中學ノ自由教育法ヲ公布セシハ千八百四十八年十一月ノ國憲第九條ナリトス本條ニ曰ク教育ハ自由トス但シ法律ニ定メタル堪能及ヒ品行ニ關スル要款ニ從ヒ政府ノ監督ヲ受ケテ自由教育ヲ行フト

千八百五十年三月十五日ノ法律ニ因リ自由教育執行ノ方法ヲ定メテ大ニ學區ノ數ヲ改正シタリ即チ各州ニ大學一所ヲ置キ第七條督學所ニ

學區會ナシテ之ヲ監理セシメタル是レナリ第八條蓋シ該法律制定者ノ主意ハ大學區ノ數ヲ增シテ八十六ト爲シ以テ舊督學ト舊大學トノ權力ヲ弱メテ牧師州長及ヒ州會ニ屬スル教育上ノ權力ヲ增サントスルニ在ルナリ

自由教育ヲ許シテ學制ノ面目ヲ新ニシタルニ因リ學區會ノ構成モ亦隨テ變更セリ故ニ爾後學區會ハ舊大學ノ學事專占ノ制ヲ行ヒシ時ノ如ク該大學ニ屬スル僚員ニ對シテ懲戒ヲ行フニ止ムルヲ得ス宜ク廣ク公私ノ教育事務ニ任スル者ヨリ起セル爭訟及ヒ其懲戒ニ關スル事項ヲ判定スヘシ隨テ私立學校教員ノ權利ヲ保護シ之ヲシテ舊時ノ如ク其競爭者タル大學僚員ニ隷屬セスシテ公正不偏ナル僚員ノ判決ヲ受ケシメサル可カラス千八百十五年三月十五日ノ法律第十條ニ因リ學區會ノ構成ヲ規定セシハ蓋シ之カ爲メナリ該法律ハ學制ニ關係

ナキ者ナシテ學區會僚員ノ多分ニ充テタリ千八百五十二年三月九日ノ詔書モ亦舊學區會ノ組織方法ニ從テ變更スル所ナシ（第三條）但シ文部宰相ニ與フルニ千八百五十年ノ法律ニ因リ學區會員ニ撰マル可キ者ヲ黜陟スルノ權ヲ以テスルノ一條ヲ異ニスルノミ

千八百五十四年六月十一日ノ法律第一條ハ千八百五十年ノ法律ノ精神ト相背馳シ却テ學區ヲ減シテ僅ニ十六ト爲シ以テ大ニ督學ノ權力ヲ强シ之ヲシテ學制ニ服スル諸官吏ヲ駕御シ且ツ僧侶ノ威權ニ抵敵スルニ堪ヘシメントセリ次テ同年八月二十二日ノ詔書ニ因リ各學區會ノ區畫ヲ改定シテ舊時ノ如ク行政區及ヒ裁判區ト關係ナキ者ト爲シタリ余ハ千八百八年ノ詔書ニ因リテ定メタル大學區ノ員數ヲ保存シ其區畫ヲシテ控訴院所管ノ區畫ト相同シカラシムルヲ以テ尤モ至當ノ制ナリト思惟ス千八百五十年幷ニ千八百五十四年ニ於テ大學區

ノ員數幷ニ區畫ヲ改正シタルハ極メテ其當ヲ失フ者ナリ但シ千八百五十四年ニ改正シタル十六大學區ノ外ニ、アルゼリー及ヒ、シヤンベリーノ二大區アリ（千八百六十年六月十三日ノ詔書）ニーヌ州ハ、エー、大學區ニ併合シタリ（同上詔書ヲ看ヨ）而シテ巴里府大學區ニハ別ニ督學ヲ置カス文部宰相自カラ其職ニ當ルヲ得此場合ニ於テハ副督學ノ職掌ハ千八百五十四年十月五日ノ布令ニ因リテ之ヲ定ム（千八百五十四年八月二十二日ノ詔書ヲ看ヨ）

今ノ學區會ハ左ノ僚員ヲ以テ成ル

第一　督學ハ議長ニ任ス

第二　各大學區ノ學務監守

第三　專門學校長

第四　三年毎ニ文部宰相ニ於テ撰定ス可キ僚員七名內一名ハ各大

學區ノ大牧師若クハ牧師ヨリ撰ミ二名ハ「カトリック」教ノ僧徒若クハ官准ヲ得タル他宗ノ僧徒ヨリシ二名ハ法官中ヨリシ自餘ノ二名ハ總テノ官吏若クハ各大學區內ノ紳士ヨリ撰拔ス（千八百五十四年六月十四日ノ法律第三條）

以上ノ構成方法ヲ見レハ今ノ學區會ニ於テハ學事ニ從フ者其多分ヲ占ムルヲ知ル可シ

請フ之ヨリ學區會ノ職掌ヲ研究セン蓋シ千八百五十年三月十五日ノ法律第八條ニ因レハ學區會ハ督學ト協同シテ各大學區ノ學政ヲ助クルヲ衆共ニ政ヲ取ル可シトスル當時共和政ノ主義ニ適ヘル者ナレ𪜈其甚タ錯雜ナルヲ以テ立君政ノ主義ニ背キ且ツ共和曆第八年雨月二十八日ノ法律制定以來大ニ佛國ニ行ハレタル所ノ「事ヲ處スルハ一人ノ務ナリ」ト云ヘル通則ニ戻レル者トス故ニ千八百五十四年六月十四日

ノ法律第二條ニ因リ先キニ學區會ニ屬スル行政ノ權ヲ奪フテ（第四條）專ラ之ヲ督學ニ與ヘタリ

千八百五十年三月十五日ノ法律ニ因リ學區會ノ職ヲ分テ三種ト爲ス即チ意見ヲ述フル一ナリ懲戒例ニ當ル者ノ下調ニ從事スル二ナリ行政訴訟上若クハ懲戒上ノ判決ヲ行フ三ナリ（第十四條）

是レニ因リ學區會ハ各州ニ設立スル諸學校ノ景況教育上ノ改正公立學校ノ規律及ヒ理務中小學校ノ豫算表幷ニ決算表ニ關シ其意見ヲ述ヘ又文部宰相若クハ督學ノ命ヲ受ケテ公立中學若クハ大學ノ僚員ニ關スル懲戒事務ノ下調ヲ行ヒ且ツ學位ノ授與私立學校ノ開設私立學校教員ノ權利教育權ノ執行ニ關スル爭訟官立中學校ノ教員ノ糾治及ヒ法律ニ定ムル場合ニ於テ私立學校長若クハ教員ヲ廢除シテ自後其教員ト爲ルヿヲ禁止センカ爲メニスル糾治且ツ公私立小學校教員ニ

關スル懲戒事務ニ就キ判決ヲ行フ但シ其判決ハ不服ナル者ハ上等學議會ニ控訴スルヲ得（同上法律第十四條）

以上學區會ニ屬スル懲戒ノ權ハ併セテ公立大中學校ノ教員ニ及ホス可シ（千八百五十年三月十五日ノ法律第十四條第六十五條第七十六條末節等ヲ看ヨ）同上法律第十四條ニ定ムル場合ニ於テ宣告シタル學區會ノ判決ハ上等學議會ニ控訴ス可シ（同上法律第五條第七節）是レニ因リ學區會ハ唯一意見ヲ述フルノ權アルノミナラス大學教員ニ對シテモ猶ホ判決ヲ行フノ權アリトス即チジヤツ件ニ關シ千八百五十一年三月十四日ニ宣告セシ上等學議會ノ判決ニ徵シテ之ヲ知ル該判決書ハ千八百五十一年ノ教育法例全書第百七十八葉ニ見ヘタリ

千八百五十年三月十五日ノ法律第十四條ノ末節ニ掲クル兩件ハ法律上其一件ヲ以テ行政訴件ト爲シ他ノ一件ヲ以テ懲戒上ノ事務ト爲セ

ヒ共ニ皆ナ行政訴訟上ノ性質ヲ有スル者トス要スルニ玆ニ言フ所ノ懲戒事件ナル者ハ純然タル行政件ト區別シタル行政訴訟件ノ一種タルニ過キス蓋シ純然タル行政件ナル者ハ專ラ行政權ノ爲メニ私利ヲ損害セラレタル者ニシテ其行政訴件ナル者ハ行政官ノ爲メニ其私權ヲ損害セラレタル場合ニ係ル然レヒ所謂ル懲戒事件ハ常ニ行政訴件ト其性質ヲ同シクセス何トナレハ懲戒上ノ處分ハ之ヲ命スル者ノ全權ニ屬シ之ヲ命セラレタル者ヲシテ爲メニ其權利ヲ損害セラレタル者ト推定スルヲ得サレハナリ是故ニ懲戒事件ニ關シテハ眞ノ行政事件ニ屬ス可キ重刑ヲ行フカ爲メニ定メシ所ノ程式ヲ行ハス千八百五十年三月十五日ノ法律第三十三條ヲ此懲戒事件ナル者ハ行政訴件ナル者トヲ分別スルノ一例トス可シ蓋シ本條ノ明文ニ從ヘハ邑學校ノ教員ヲ呵責シ若クハ之ヲ停職廢職セントスルニ當リ督學ハ直ニ之ヲ命令

シ爲メニ學區會幷ニ上等學議會ニ申訴スルヲ許サス此場合ニ於テ懲戒セラレタル教員ハ純然タル行政務ニ關スル通則ニ依準シ獨リ之ヲ文部宰相ニ哀訴スルヲ得ルノミ然レ𪜈邑學校教員ノ現職ヲ奪フノミナラス爾後私立學校教員タルノ權利ヲ剝カントスル時ハ之ヲ以テ行政訴訟ノ性質ヲ有スル者ト爲シテ此禁ヲ命スルノ權ヲ以テ學區會ニ屬シ之ニ不服ナレハ尙ホ上等學議會ニ控訴ス可シトセリ是レニ由テ之ヲ觀レハ懲戒事件ハ其命ス可キ刑名ノ性質之ヲ宣告ス可キ官衙ノ種類之ヲ受ケタル者ノ品等其他立法官ニ於テ行政訴訟ノ手續ニ從フヲ必要トスルト然ラサルトノ事情ニ因リテ或ハ純然タル行政件トナリ或ハ眞ノ行政訴件ト爲ル者ナリ以上論スル所ノ者ヲ玩味スレハ法律上ニ於テ眞ノ行政訴件ナル者ト懲戒事件ト行政訴件トノ性質ヲ兼ヲ有スル懲戒事件ナル者トノ間ニ立テタル區別ヲ明カニスルニ足ル

可シ

千八百五十二年三月九日ノ詔書ニ因リ大ニ學區會ニ屬スル懲戒上ノ職務ヲ殺キタリ該詔書ノ明文左ノ如シ

文部宰相ハ公立中學ノ教員ニ對シ終審ノ權ヲ以テ直ニ左ノ懲戒ヲ命スルヲ得

一　學區會ノ呵責ヲ受クルヿ

一　上等學議會ヨリ謹愼ヲ命ス

一　降等

一　俸給ノ全部若クハ一部ヲ奪ヒ若クハ奪ハスシテ停職ヲ命スルヲ得

一　免職

文部宰相ハ大學ノ教員ニ對シ同上ノ懲戒ヲ命スルヲ得レ𪜈之ヲ免

職セントスル時ハ先ツ大統領ニ具申シテ其命ヲ待ツ可シ

是レニ因リ學區會ハ同上ノ事務ニ關シ始審判決ノ權ヲ失ヒ上等學議會ハ其終審判決ノ權ヲ失ヒタルナリ

千八百五十四年六月十四日ノ法律ハ學區會ニ屬スル陳議上ノ職權ヲ制限セントセシ者ノ如シ該法律第四條ニ曰ク學區會ハ大學議會ニ諮詢シ文部宰相ノ敎則ニシテ其所管內ニ設立スル公立大中小學校ノ遵守シ且ツ大中小學校ニ關スル管理事務會計務幷ニ懲戒上ノ問題ニ就キ其意見ヲ陳スト同上法律ハ又學務州會ナル者ヲ新設シ小學事務幷ニ中學ニ關スル懲戒事務ト行政訴件トニ關シ千八百五十年三月十五日ノ法律ニ因リ學區會ニ與ヘシ所ノ職權ヲ剝キテ之ニ與ヘタリ千八百五十四年ノ法律第五條及ヒ第七條ヲヘリエール氏ハ是等ノ新條則ニ基キ左ノ判決ヲ下セリ曰ク千八百五十四年ノ法律ニ因リテ設置シタル學區會ハ僅ニ

官ノ定ムル敎育事務ヲ調査監守スルノ職ニ服スルニ過キス施政上ノ權幷ニ判決上ノ權ハ復タ其有スル所ニアラスト論氏著公法行政法講義第五版第三百八葉ヲ看ヨ氏又曰ク學區會ハ千八百五十四年ノ法律及ヒ詔勅ニ因リ陳議上及ヒ監察上ノ職ヲ行フヲ以テ其本分ト爲ス故ニ懲戒上ノ判決權ヲ有スルヿ復タ舊時ノ如クナルヲ得サレトモ獨リ下調ヲ行フノ權ニ至リテハ尙ホ之ヲ有スル者トスト同上著書第三百十四葉ヲ看ヨ

余ハヘリエール氏ノ說ヲ以テ大ニ其實ヲ得タル者トスレトモ稍〻誤解スル所ナクンハアラス夫レ學區會ハ敎則ノ監守ニ任シ且ツ大中學ニ關スル管理上會計上幷ニ懲戒上ノ問題ニ關シ其意見ヲ陳スルノ權アルヿ實ニ氏ノ言ノ如シ五十四年ノ法律第四條文部宰相若クハ督學ノ命ヲ受ケテ公立大中學ノ敎員ニ關スル懲戒事件ノ下調ヲ行フノ權ヲ保有スルヿモ亦氏ノ言フ所ニ異ナルナシ千八百五十年三月十五日ノ法律第十四條千八百五十二年三月九日ノ詔

書第十一條千八百五十四年六月十四日ノ法律第十五條是等法例ノ明文ニ因テ考フレハ千八百五十年ノ法律ノ條款ハ千八百五十二年ノ詔書及ヒ千八百五十四年ノ條款ニ抵觸スル者ノ外皆ナ廢止ニ屬セサル者トス故ニ學區會ハ新法例ニ因リテ剝奪セラレサル所ノ諸職權ヲ保有シ學位授與專門學校ノ試驗ニ關スル訴件ニ就キ判決ヲ行フノ權アルヿ舊ノ如シ但シ該判決ニ不服ナルヲ以テ上等議會ニ控訴スルハ此限ニ在ラス千八百五十年三月十五日ノ法律第十四條第六節

學區會ハ學校外ニ於テ人民ノ喧噪若クハ法律ニ背ケル集會結社等ニ加ハリタル法律學校及ヒ醫學校生徒ニ對シ懲戒ヲ命スルヲ得ルヿ亦舊ノ如シ是等犯則ノ生徒ハ六ケ月以上二ケ年以下其修學スル學校若クハ總テノ大學校ニ往キテ聽講スルノ權ヲ剝カルヽヿアル可シ而シテ之ヲ宣告スルハ學區會ニ於テス可シ但シ大學議會ニ控訴スルハ此

限ニ在ラス千八百二十一年七月五日ノ王勅第十八條第十九條及ヒ第二十條

千八百五十年三月十五日ノ法律第八十五條ト千八百八年三月十七日及ヒ千八百十一年十一月五日ノ二詔書トヲ參互考察スルハ上ニ開陳スル者ノ外更ニ學區會ノ職權ニ屬ス可キ者アルヲ知ル可シ該法律第八十五條ニ曰ク高等教育ニ關スル法律公布ノ日ニ至ルマテ上等學議會及ヒ常置學會ハ各其職權ニ照シ舊高等學會ニ屬スル高等教育上ノ職權ヲ行ヒ又新學區會ハ舊學區會ニ屬スル職權ヲ行フ可シト

今ノ學區會ノ職掌凡ソ前文ニ述フルカ如シ是レニ因リ千八百五十年三月十五日ノ法律ヲ施行セシ時及ヒ千八百五十二年三月九日ノ詔書ト千八百五十四年六月十四日ノ法律トニ因リテ右ノ法律ヲ修正セシ以前ニ比スレハ大ニ學區會ノ權力ヲ殺減スルヲ知ル更ニ千八百八年三月十七日ノ詔書第八十七條ニ因リ當時ノ學區會ニ與ヘタル職權ヲ